大分県文化財調査報告書　第156輯

国道502号B区間（東九州自動車道臼杵インター－国道502号間）道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

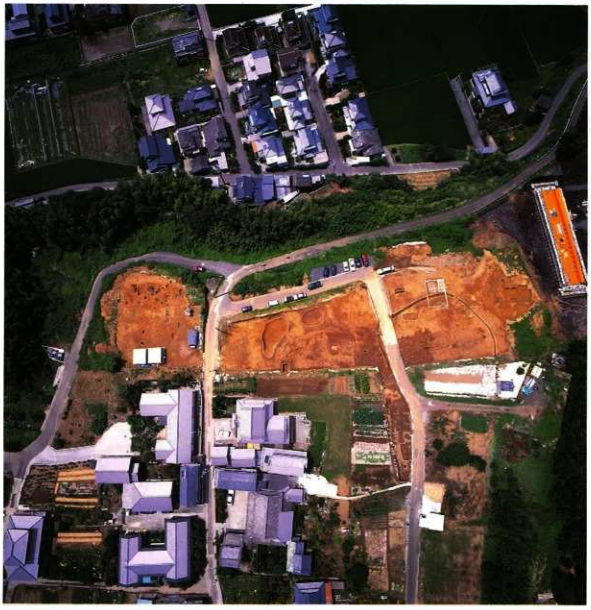
野村台遺跡

2003

大分県教育委員会

野村台遺跡

野村台遺跡全景



野村台遺跡環溝遺構

田井ヶ迫３号横穴

序　　文

本書は、県教育委員会が臼杵土木事務所の依頼を受けて実施した一般国道５０２号（Ｂ区間）道路改良工事に伴う野村台遺跡の発掘調査報告書です。

臼杵市は、大分県の東南部に位置し、国宝臼杵磨崖仏をはじめ史跡下山古墳や県指定史跡臼塚古墳、臼杵城跡などの多くの文化財が所在しています。

今回調査した野村台遺跡は、臼杵川沿いにあり、河口から約2.5㎞上流の台地を中心に形成された遺跡で、市街地から西約６㎞にある臼杵磨崖仏と市街地にある臼杵城の中間に位置しています。

今回の発掘調査の結果、縄文時代から近世にわたる人々の長い営みの跡を明らかにすることができ、なかでも野村台遺跡の飛車丸地区で発見された弥生時代後期の環壕や、田井ヶ迫地区で発見された古墳時代の陽刻のある閉塞石を持つ横穴墓などは注目されます。

本書が地域の先人の生活を理解する資料として、また、埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し衷心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

大分県教育委員会教育長

石　川　公　一

例　　言

1　本書は臼杵市野田に所在する遺跡の調査報告書である。

2　発掘調査は一般国道５０２号（Ｂ区間）道路改良工事に伴い、臼杵土木事務所から委託され大分県教育委員会が実施した。

3　調査対象となったのは大分県臼杵市大字野田他に所在する野村台遺跡内の飛車丸地区及び田井ヶ迫地区である。このため、本調査区全体を野村台遺跡とし、それぞれ飛車丸地区・田井ヶ迫地区として報告する。

4　現地での遺構の実測・写真撮影は調査員があたった。

5　遺物の整理作業は大分県文化課文化財資料室整理作業員が行い、遺物の実測・トレースは細川愛・安井由加梨（大分県教育庁文化課嘱託）及び同資料室整理作業員があたった。

6　本書の作成にあたり執筆の分担は第１章、第２章第１・２・６節、第３章第３節、第４章第１節を坂本嘉弘（大分県教育庁文化課主幹）が、それ以外は槙島陸二（大分県教育庁文化課主査）があたった。

7　本書の編集は槙島陸二・坂本嘉弘が担当した。

本 文 目 次

序文
例言

第１章　はじめに …… 1
　第１節　調査の経緯 …… 1
　　１．調査に至る経過 …… 1
　　２．調査の経過と方法 …… 2
　　３．調査団の構成 …… 2
　第２節　遺跡の立地と環境 …… 3
　　１．地理的環境 …… 3
　　２．歴史的環境 …… 4

第２章　野村台遺跡鳥車丸地区の調査 …… 6
　第１節　調査の概要 …… 6
　　１．立地 …… 6
　　２．遺構配置 …… 6
　第２節　縄文時代の調査 …… 7
　　１．出土状況 …… 7
　　２．出土遺物 …… 7
　　(1)　土器 …… 7
　　(2)　石器 …… 14
　第３節　弥生・古墳時代の調査 …… 15
　　１．貯蔵穴 …… 15
　　(1)　遺構 …… 15
　　(2)　遺物 …… 15
　　２．環溝遺構 …… 15
　　(1)　遺構 …… 15
　　(2)　遺物 …… 16
　　３．住居跡 …… 23
　　(1)　遺構 …… 23
　　(2)　遺物 …… 23
　　４．竪穴遺構（Ⅱ区拡張区４号土壙） …… 26
　　(1)　遺構 …… 26
　　(2)　遺物 …… 26
　第４節　中世の調査 …… 27
　　１．Ⅰ区１号土壙 …… 27
　　(1)　遺構 …… 27
　　(2)　遺物 …… 28
　　２．Ⅰ区２号土壙 …… 29

(1) 遺構 …… 29
(2) 遺物 …… 29
3．Ⅱ区2号大型土壙 …… 30
(1) 遺構 …… 30
(2) 遺物 …… 31
第5節 近世の調査 …… 37
1．Ⅰ区土壙群 …… 37
(1) 1号土壙 …… 37
(2) 7号土壙 …… 38
(3) 8号土壙 …… 38
(4) 11号土壙 …… 38
(5) 12号土壙 …… 38
(6) 14号土壙 …… 38
(7) 15号土壙 …… 39
(8) 17号土壙 …… 41
(9) 19号土壙 …… 41
(10) 22号土壙 …… 41
2．Ⅱ区1号大型土壙 …… 44
(1) 遺構 …… 44
(2) 遺物 …… 44
3．Ⅲ区1号土壙 …… 46
(1) 遺構 …… 46
(2) 遺物 …… 46
4．Ⅱ区拡張区1号土壙 …… 49
(1) 遺構 …… 49
(2) 遺物 …… 49
5．Ⅲ区集石土壙 …… 50
(1) 遺構 …… 50
(2) 遺物 …… 52
6．Ⅱ区4号土壙 …… 53
7．Ⅱ区拡張区1号土壙 …… 53
8．Ⅱ区袋状竪穴遺構 …… 54
9．Ⅲ区1号土壙 …… 54
10．Ⅱ区拡張区3号土壙 …… 55
11．石組遺構 …… 55
第6節 野村台遺跡飛車丸地区各地区出土遺物 …… 56
1．弥生・古墳時代 …… 56
(1) 土器 …… 56
(2) 石器 …… 56
2．中世 …… 57
3．近世 …… 59
(1) 陶磁器 …… 59

⑵　土錘 …… 63
⑶　銅銭 …… 63
⑷　石臼 …… 64

第３章　野村台遺跡田井ヶ辺地区の調査 …… 65
第1節　調査の概要 …… 65
１．立地 …… 65
２．遺構配置 …… 65
第２節　古墳時代の調査 …… 67
１．１号横穴墓 …… 67
２．２号横穴墓 …… 70
３．３号横穴墓 …… 70
第３節　包含層出土遺物 …… 74
１．縄文時代 …… 74
２．弥生時代 …… 74
３．古墳時代 …… 76
４．中世 …… 77
５．近世 …… 78
６．石器・石製品・土製品 …… 78
７．土錘 …… 86
８．煙管 …… 88

第４章　まとめ …… 90
第１節　野村台遺跡とその周辺の変遷 …… 90

挿 図 目 次

第１章
第１図　東九州自動車道と野村台遺跡 …… 1
第２図　野村台遺跡と周辺の遺跡 …… 3
第３図　野村台遺跡と周辺の地形 …… 5
第４図　野村台遺跡調査区位置図 …… 7～8

第２章
第５図　野村台遺跡飛市丸地区遺構配置図 …… 9～10
第６図　野村台遺跡飛市丸地区出土縄文土器実測図 …… 12
第７図　野村台遺跡飛車丸地区出土石鏃実測図 …… 13
第８図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅱ区拡張区２号土壙実測図 …… 15
第９図　野村台遺跡飛市丸地区環溝出土土器実測図(1) …… 16
第10図　野村台遺跡飛車丸地区検出環溝実測図 …… 17
第11図　野村台遺跡飛車丸地区環溝遺構南部実測図 …… 18
第12図　野村台遺跡飛市丸地区環溝遺構西部実測図 …… 18
第13図　野村台遺跡飛車丸地区環溝出土土器実測図(2) …… 19
第14図　野村台遺跡飛車丸地区環溝出土土器実測図(3) …… 20
第15図　野村台遺跡飛市丸地区環溝出土土器実測図(4) …… 21
第16図　野村台遺跡飛市丸地区環溝出土姫島産黒曜石実測図 …… 22
第17図　野村台遺跡飛車丸地区住居跡実測図 …… 23
第18図　野村台遺跡飛市丸地区住居跡出土土器実測図 …… 24
第19図　野村台遺跡飛車丸地区住居跡出土小玉実測図 …… 25
第20図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区４号土壙出土土器実測図 …… 26
第21図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅱ区拡張区４号土壙実測図 …… 26
第22図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区１号土壙実測図 …… 27
第23図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区１号土壙出土土器実測図 …… 28
第24図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅰ区２号土壙実測図 …… 29
第25図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区２号土壙出土土器実測図 …… 29
第26図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区２号大型土壙実測図 …… 30
第27図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅱ区２号大型土壙出土遺物実測図(1) …… 32
第28図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区２号大型土壙出土遺物実測図(2) …… 33
第29図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区２号大型土壙出土遺物実測図(3) …… 34
第30図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区２号大型土壙出土遺物実測図(4) …… 35
第31図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅱ区２号大型土壙出土石塔実測図 …… 35
第32図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区２号大型土壙出土石造品実測図 …… 36
第33図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群配置図 …… 37
第34図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群１号土壙実測図 …… 38
第35図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群出土遺物実測図(1) …… 39
第36図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅰ区土壙群出土遺物実測図(2) …… 40
第37図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅰ区土壙群出土遺物実測図(3) …… 41
第38図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅰ区土壙群出土遺物実測図(4) …… 42
第39図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅰ区土壙群22号土壙出土石造品実測図 …… 43
第40図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅱ区１号大型土壙実測図 …… 44
第41図　野村台遺跡飛市丸地区Ⅱ区１号大型土壙出土遺物実測図 …… 45

第42図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区１号土壙実測図 …… 46
第43図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区１号土壙出土遺物実測図(1) …… 47
第44図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区１号土壙出土遺物実測図(2) …… 48
第45図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区１号土壙実測図 …… 49
第46図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区１号土壙出土遺物実測図 …… 49
第47図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区集石土壙実測図 …… 50
第48図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区集石土壙出土遺物実測図 …… 51
第49図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区集石土壙完掘状況実測図 …… 52
第50図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区４号土壙実測図 …… 53
第51図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区１号土壙実測図 …… 53
第52図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区袋状竪穴実測図 …… 54
第53図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区１号土壙実測図 …… 54
第54図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区３号土壙実測図 …… 55
第55図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区石組遺構実測図 …… 55
第56図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図(1) …… 57
第57図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図(2) …… 58
第58図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図(3) …… 60
第59図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図(4) …… 61
第60図　野村台遺跡飛車丸地区出土石器実測図 …… 62
第61図　野村台遺跡飛車丸地区出土土錘実測図 …… 63
第62図　野村台遺跡飛車丸地区出土銅鈴実測図 …… 63
第63図　野村台遺跡飛車丸地区出土石臼実測図 …… 64

第３章

第64図　野村台遺跡山井ヶ迫地区遺構配置図 …… 66
第65図　野村台遺跡田井ヶ迫地区１号横穴墓実測図 …… 67
第66図　野村台遺跡田井ヶ迫地区１号横穴墓出土遺物実測図(1) …… 68
第67図　野村台遺跡田井ヶ迫地区１号横穴墓出土遺物実測図(2) …… 69
第68図　野村台遺跡田井ヶ迫地区２号横穴墓実測図 …… 70
第69図　野村台遺跡山井ヶ迫地区３号横穴墓実測図 …… 71～72
第70図　野村台遺跡田井ヶ迫地区３号横穴墓閉塞石実測図 …… 73
第71図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図(1) …… 79
第72図　野村台遺跡山井ヶ迫地区出土遺物実測図(2) …… 80
第73図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図(3) …… 81
第74図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図(4) …… 82
第75図　野村台遺跡山井ヶ迫地区出土遺物実測図(5) …… 83
第76図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図(6) …… 84
第77図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図(7) …… 85
第78図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図(8) …… 86
第79図　野村台遺跡山井ヶ迫地区出土遺物実測図(9) …… 87
第80図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土石臼実測図(1) …… 88
第81図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土石臼実測図(2) …… 89
第82図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土土錘実測図 …… 89
第83図　野村台遺跡山井ヶ迫地区出土煙管実測図 …… 89

第４章まとめ

第84図　野村台遺跡各調査区位置図 …… 92

写真図版目次

巻頭図版 1　野村台遺跡全景
巻頭図版 2　野村台遺跡環溝遺構
巻頭図版 3　山井ヶ迫３号横穴
図　版　1　野村台遺跡飛車丸地区全景
図　版　2　野村台遺跡　環溝・住居跡・石組遺構
図　版　3　田井ヶ迫地区全景・１号横穴・２号横穴
図　版　4　３号横穴・３号横穴閉塞状況復元
図　版　5　環溝・環溝遺物出土状況
図　版　6　住居跡・竪穴遺構
図　版　7　中世１号土壙・中世２号土壙・中世２号土壙遺物出土状況
図　版　8　野村台Ⅱ区２号大型土壙・近世土壙群
図　版　9　野村台近世土壙
図　版　10　野村台近世土壙
図　版　11　野村台Ⅱ区１号大型土壙・Ⅱ区拡張区１号土壙・Ⅲ区集石遺構
図　版　12　野村台Ⅱ区４号土壙・３号土壙
図　版　13　野村台袋状遺構・Ⅱ区１号土壙・拡張区３号土壙
図　版　14　野村台石組遺構・発掘風景
図　版　15　野村台遺跡出土　石鏃
図　版　16　山井ヶ迫地区発掘前・石垣除去作業
図　版　17　田井ヶ迫　１号横穴①②③
図　版　18　田井ヶ迫　２号横穴・３号横穴①②
図　版　19　田井ヶ迫　３号横穴①②③
図　版　20　田井ヶ迫　３号横穴④⑤⑥
図　版　21　田井ヶ迫　遺物出土状況
図　版　22　野村台２区２号大型土壙出土陶磁器　野村台２区１号大型土壙出土陶磁器・擂鉢
図　版　23　１号土壙出土瓦質火鉢・７号土壙出土土人形・８号土壙出土土人形・８号土壙出土平瓦
図　版　24　11号土壙出土陶磁器
図　版　25　12号土壙出土軒平瓦・12号土壙出土擂鉢・19号土壙出土擂鉢・22号土壙出土擂鉢・22号土壙出土陶磁器
図　版　26　Ⅲ区１号土壙出土陶磁器
図　版　27　Ⅲ区１号土壙出土陶磁器２・Ⅲ区１号土壙出土羽釜・Ⅲ区１号土壙出土擂鉢
図　版　28　拡張区１号土壙出土白磁碗・３区集石土壙出土擂鉢・３区集石土壙出土陶磁器
図　版　29　野村台飛車丸地区出土中世陶磁器・野村台飛車丸地区出土近世陶磁器
図　版　30　野村台環溝遺構出土遺物
図　版　31　野村台住居跡出土遺物・野村台出土銅銭
図　版　32　野村台Ⅱ区２号大型土壙出土遺物
図　版　33　野村台貯蔵穴出土遺物・竪穴遺構出土遺物・Ⅱ区１号土壙出土遺物
図　版　34　野村台環溝遺構出土黒曜石石核・石臼　山井ヶ迫出土石臼
図　版　35　田井ヶ迫１号横穴出土遺物
図　版　36　田井ヶ迫出土縄文土器・弥生土器１
図　版　37　山井ヶ迫出土弥生土器２
図　版　38　山井ヶ迫出土弥生土器３
図　版　39　田井ヶ迫出土弥生土器４
図　版　40　田井ヶ迫出土土師質土器・瓦質土器
図　版　41　田井ヶ迫出土須恵器・土製品・石製品・煙管

第１章　はじめに

第１節　調査の経緯

１．調査に至る経過

九州の東部に位置する大分県は、古くから、瀬戸内海を通じて、江戸・京都を繋ぐ交通の拠点として、その役割を果たしてきた。しかし、国内の交通網が、海路から陸路に重点が転換する近代になると、起伏の激しい複雑な大分県の地形は、道路網の整備にとって障害要因となった。

しかし、平成８年３月、大分自動車道が全線開通し、県都大分市と九州の西側を南北に貫く九州縦貫自動車道とが繋がり、本格的な高速自動車道が到来した。その後、兼ねてから計画され、すでに、宮崎・鹿児島県で工事に着工していた九州の東海岸を結ぶ、東九州自動車道の工事が、大分県でも大分市米良インターから宮崎方面にむけ、本格的に着工された。

この東九州自動車道は、大分県南部の主要都市郊外にインターチェンジを造りながら南下し、平成13年末、大分市米良一津久見間までが開通している。高速道路本体と、インターチェンジは、日本道路公団の事業であるが、料金徴収所から一般道までは、大分県土木建築部の事業として施行されている。

本書で報告する野村台遺跡の調査も、このような事情で実施されたもので、臼杵インターチェンジと、臼杵市と内陸の竹田市を結ぶ国道 502 号線を繋ぐ新設の道路建設に伴い行われたものである。

第１図　東九州自動車道と野村台遺跡

2．調査の経過と方法

九州の東海岸を南北に貫く東九州自動車道の臼杵インターチェンジは、臼杵市田井ヶ迫地区に計画された。しかし、その場所は大部分が水田であり、周辺の幹線とアクセス道路建設の必要性が生じた。その幹線道路は、約1km北側を臼杵市街地へ通じる国道502号である。アクセス道路建設は大分県土木建築部の事業として施行されることとなった。

平成10年、日本道路公団による臼杵インターチェンジ建設が施行に向けて動き出すと、国道502号への、アクセス道路建設が急務となった。しかし、アクセス道路建設予定地は、周知遺跡である野村台遺跡の西端を含むことが判明した。そこで、大分県土木建築部は大分県教育庁文化課と協議を行い、平成11年度に発掘調査を実施することに決定した。

調査は平成11年4月9日から、野村台遺跡の台地部である飛車丸地区から開始した。この地区は、野村台遺跡の主要部である台地の西端にあたり、市道や農道が通じているため、3ヶ所に分所された調査区を設定し、南から第Ⅰ区・第Ⅱ区・第Ⅲ区とした。検出された遺構については、それぞれの地区で命名した。また、調査中、第Ⅱ区と第Ⅲ区の間の農道部がアクセス道路建設に伴い、南側の第Ⅱ区に拡張することが判り、掘削を受けるその部分を、第Ⅱ区拡張部として調査を行った。

その後、アクセス道路予定地の台地の斜面部で、横穴墓があることも判明し、この調査も年度内に実施することとなった。そこで、台地斜面部を重機で表土除去を行い横穴墓の確認を行なった。その結果、3基の横穴墓の存在が確認された。また、台地斜面部から低地の水田部の遺物包含層があることも確認され、調査の対象とした。

このような調査経過を経て、野村台遺跡の飛車丸地区と田井ヶ迫地区の発掘調査は、平成12年3月末に終了した。

なお、臼杵インターチェンジを含む、東九州自動車道の大分宮河内―津久見間は、平成13年12月27日に開通した。

3．調査団の構成

調査指導員　　下條信行（愛媛大学教授）

文化課長	山本芳直
課長補佐兼参事	田原基之
課長補佐兼埋蔵文化財第二係長	清水宗昭
主　幹	坂本嘉弘（発掘調査担当）
副主幹	高橋信武（発掘調査担当）
主　査	甲斐寿義（発掘調査担当）
主　任	植島隆二（発掘調査担当）
嘱　託	上角智希（発掘調査担当）
嘱　託	野口典良（発掘調査担当）
嘱　託	長野淳一（発掘調査担当）

以上の他、調査期間中、高倉洋彰西南学院大学教授の現地訪問があった。

第２節　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

九州の北東部に位置する大分県は、瀬戸内海に面し、海岸部は温暖な瀬戸内気候帯に属する。

地形的には、大分県中央部を、中央構造線である臼杵－八代線が東西に走る。このため、県南と県北とは地形が大きく異なる。すなわち、県北では、大規模な海岸部の平野や、河川による沖積地、遠浅の海岸が見られる。一方、県南は、祖母・傾連山に代表されるように、急峻な山と深い谷が織り成す険しい地形をしており、海岸部は豊後水道に面し、リアス式海岸を形成している。

こうした中、野村台遺跡のある臼杵市は、県南部に位置し、眼前には豊後水道が広がる。北は、樫木山（484 m）・九六位山（451m）のある佐賀関半島、南は、姫岳（620m）・鎮南山（536 m）のある臼津半島を堺に津久見市と接する、リアス式海岸の奥まった場所を中心に形成された町である。

野村台遺跡と周辺の遺跡
1　野村台遺跡
1－a　野村台遺跡　飛来丸地区
1－b　野村台遺跡　田井ヶ迫地区
2　清太郎遺跡
3　望月遺跡
4　荒田台遺跡
5　家野遺跡
6　後発遺跡
7　臼杵石仏群地域遺跡
8　深田遺跡
9　深田地下式横穴
10　下中尾遺跡
11　猿懸遺跡
12　野洲遺跡
13　持田遺跡
14　門福寺遺跡
15　門前地下式横穴
16　海蔵寺遺跡
17　小中尾遺跡
18　木田館遺跡
19　戸強台遺跡
20　水ヶ城跡
21　末広遺跡
22　小穴洞穴
23　長小野縣塚
24　坊主山遺跡
25　末広横穴
26　井村遺跡
27　下山古墳
28　神下山古墳
29　日塚古墳
30　道安遺跡
31　荒山城跡
32　猫尾遺跡
33　高倉古墳
34　芝尾岭横穴
35　鐵塚古墳
36　田崎古墳
37　三竜野遺跡
38　丸山古墳
39　中村遺跡
40　平竜遺跡
41　大野遺跡
42　竜王山遺跡
43　仲山遺跡
44　的場山台遺跡
45　鹿苑山遺跡
46　鹿苑山横穴
47　将棋頭台場跡
48　臼杵城下町
49　臼杵城跡
50　琵琶ヶ島台場跡

第２図　野村台遺跡と周辺の遺跡

2．歴史的環境

臼杵市は人口約37000人で、佐伯市に次ぐ県南第2の都市である。その基盤となったのは、江戸時代に臼杵藩の中心地として形成された、稲葉氏の臼杵城下町である。しかし、江戸時代以前の歴史的な遺跡も数多く存在する。すなわち、下山古墳や臼塚古墳などの前方後円墳や、国宝の臼杵石仏などは全国的に知られている。

そこで、臼杵の歴史を遺跡から概観すると、臼杵市で確認される最古の人々の暮らしの痕跡は旧石器時代に遡る。その遺跡は、臼杵川の上流の火山灰台地に立地する東台遺跡で、調査は1973年に実施され、ナイフ形石器や、削器・石核などが出土している。この他、津久見市との境界となっている姫岳の西側山麓からも旧石器時代の石器が採集されている。

縄文時代になると、遺跡は数多く市内で見られるようになる。早期の遺跡では、1952年に調査した末広川流域の小六洞穴をはじめ、東九州自動車道建設に伴い発掘調査した臼杵川流域の荒田遺跡や下ノ山遺跡でも遺物が出土している。この他、市内西部の東台遺跡・戸室台遺跡・井ノ上西遺跡、姫岳西麓でもなどでも押型文土器が出土・採集されている。

縄文時代前の遺跡は市内で確認されていないが、中期の遺物は野村台遺跡の西隣りの清太郎遺跡でわずかに出土している。土器型式は縄文地文の瀬戸内系の船元式土器にあたる。後期の遺物も、清太郎遺跡からまとまって出土している。土器型式としては、後期中頃の九州の北久根山式土器・四国の片粕式土器を中心に、西平式土器・三万田式土器などがわずかに見られる。

縄文時代晩期になると、臼杵川流域の尾首遺跡では、刻み目突帯の深鉢形土器が出土しており、同様な土器は清太郎遺跡からも出土している。

弥生時代の遺跡は、沖積地に近い台地上に見られる。集落としての調査例は少ないが、弥生時代前期・中期の遺跡は、清太郎遺跡でわずかに遺物が出土しており、野村台遺跡では、円形の貯蔵穴が調査されている。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡は、1993年と1994年に調査された山篠台遺跡がある。この遺跡からは、円形や方形の住居跡が検出されており、この時期の円形住居跡の存在は、瀬戸内地方との関連を伺うことができる。また、野村台遺跡からは、楕円形の環溝と、方形の住居跡が調査されており、荒田遺跡でも住居跡が報告されており、この時期の臼杵地域の社会状況が徐々に明らかになりつつある。

古墳時代の集落は、清太郎遺跡で、6世紀代のカマドを持つ住居跡が数軒調査されている。高塚式の古墳は、臼杵市北部の熊崎川流域に多く点在し、その代表は下山古墳や臼塚古墳などの前方後円墳が知られている。臼杵川流域では横穴墓は認められるものの、古墳は知られてなかった。しかし、1996年に削平された4世紀代の円墳が調査されており、観音寺古墳と名づけられている。

古代、臼杵市は「和名抄」に記載される海部郡丹生郷に属する。この時期の遺跡は、あまり知られていない。しかし、1998年に調査した臼杵石仏からも近い清太郎遺跡から、この時期の遺物が出土している。なお、国宝「臼杵石仏」は平安時代末期に造営が始まると考えられており、「臼杵」の地名は、治承4年（1180）に見られるのが早い例である。

また、鎌倉時代の遺跡は、臼杵石仏の周辺の調査で、13世紀初頭の工房跡などが1976年から1982年の調査で明らかになっている。また、清太郎遺跡や、荒田遺跡・野村台遺跡など、でもこの時期の輸入陶磁器が出土しており、造営の背景がわずかであるが垣間見える。

室町時代の遺跡は、野村台遺跡から14世紀代の断面逆台形の溝が確認されており、この時期の有力者の居館の存在が予測される。

また、16世紀後半、大友宗麟が1562年頃、三方を海に囲まれた丹生島（現臼杵城）に築城し、臼杵に移住した。そして、南蛮貿易の拠点の一つとなり、教会や修練所も建てられ、キリスト教布教

の中心ともなった。しかし、天正14年（1586）の島津氏の進行により、住民の逃げ込んだ丹生島城は落城しなかったものの、城下町は壊滅的な状況となった。この時期に象徴的な儀礼用土師器である京都系土師器は、宗鋼の居住した臼杵城跡のみならず、荒田遺跡・野村台遺跡でも出土している。

近世の臼杵は、文禄2年（1593）の大友占統除国後、豊臣秀吉の直轄地となったものの、文禄3年（1594）に石田三成の女婿福原直高が臼杵城主となった。その後、慶長2年（1597）に大田一吉がこれに代わったものの、慶長5年（1600）の関が原の戦いで、徳川方についた岡藩の中川氏に攻められ、太田氏は退去した。そして、同年に稲葉貞通氏が入城し、明治維新を迎えるまで、15代にわたり統治した。

第3図　野村台遺跡と周辺の地形（1／1000）

第２章　野村台遺跡飛車丸地区の調査

第１節　調査の概要

１．立　地

野村台遺跡は、臼杵市の市街地のある沖積地を形成する河川の中でも最大の流域面積をもつ臼杵川沿いにあり、河口から約 2.5km 上流の台地を中心に形成された遺跡である。この台地は、臼杵市の南側の神久見市との境界をなす、鹿南山から北に延びる尾根が、徐々に高さを失い、先端で阿蘇凝結凝灰岩を基盤とする台地を形成している。また、遺跡の位置は、臼杵の平野部の奥まった場所にあり、これから上流は、臼杵川沿いの谷底平野が広がる地形が続いている。すなわち、平野部と山間部の分岐点にあたる。

台地は、東西 600 m、南北約 150 m の細長い形状で、西側には臼杵川の支流の田井ヶ迫川が流れ、南側には谷が入り込み、独立性が強い。周辺の沖積地からの比高差は、約 25 m で、台地上面は、標高 30 m の平坦面を形成している。台地中央には神社が鎮座している。

野村台遺跡飛車丸地区は、台地の西端にあたり、西側は、田井ヶ迫川の形成する沖積地へと続く急斜面となっている。このため、調査区全体が、西向きの緩やかな斜面となっている。また、北端部は、臼杵川の形成する沖積地に向けて突き出しており、眼下には、臼杵市と内陸部を繋ぐ、古代からの道路である国道 502 号が通っている。

２．遺構配置（第５図参照）

野村台遺跡飛車丸地区は、調査対象地の中に生活道路が２ヶ所通っているため、３ヶ所に区部されて調査された。これらの３ヶ所の地区については、南から Ⅰ 区・Ⅱ 区・Ⅲ 区と命名し、調査を行った。遺構の名称については、煩雑になったが、各地区ごとに命名した。

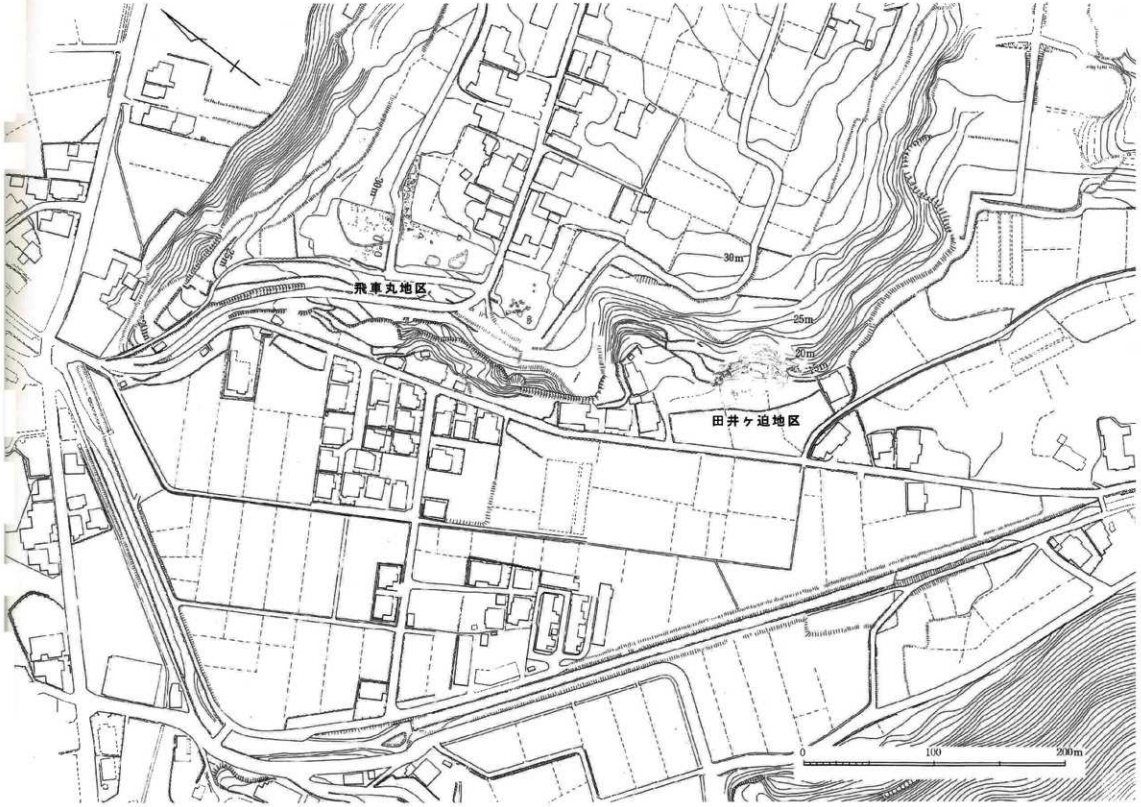
野村台遺跡飛車丸地区で検出された遺物や遺構の時期は、縄文時代から江戸時代までの多岐にわたる。縄文時代の調査は、Ⅲ 区の南西隅に、わずかに遺物包含層が確認された。調査はこの包含層の掘り下げを行った。この他、弥生時代以降の遺構からも遺物が出土した。

弥生・古墳時代の遺構と遺物は、飛車丸地区の北半分で、確認された。すなわち、Ⅱ 区拡張区からⅢ 区にかけてである。遺構の時期は、前期末から中期初頭にかけては、Ⅱ 区拡張区から円形貯蔵穴が１基確認された。後期の遺構としては、Ⅲ 区を中心に検出された環溝遺構がある。規模は小さいが、臼杵川を北に見下ろす位置に築かれ、溝からの出土土器を見ると、弥生時時代後期から古墳時代初頭まで見られる。古墳時代の遺構も、弥生時代と同じ場所で確認されている。それは、Ⅱ 区拡張区で確認された住居跡と、竪穴遺構である。出土土器から判断すると、古墳時代前期に属する。このような遺構の検出状況から、弥生・古墳時代の集落は、野村台遺跡の中でも、北よりの平坦部を中心に営まれていたものと推測される。

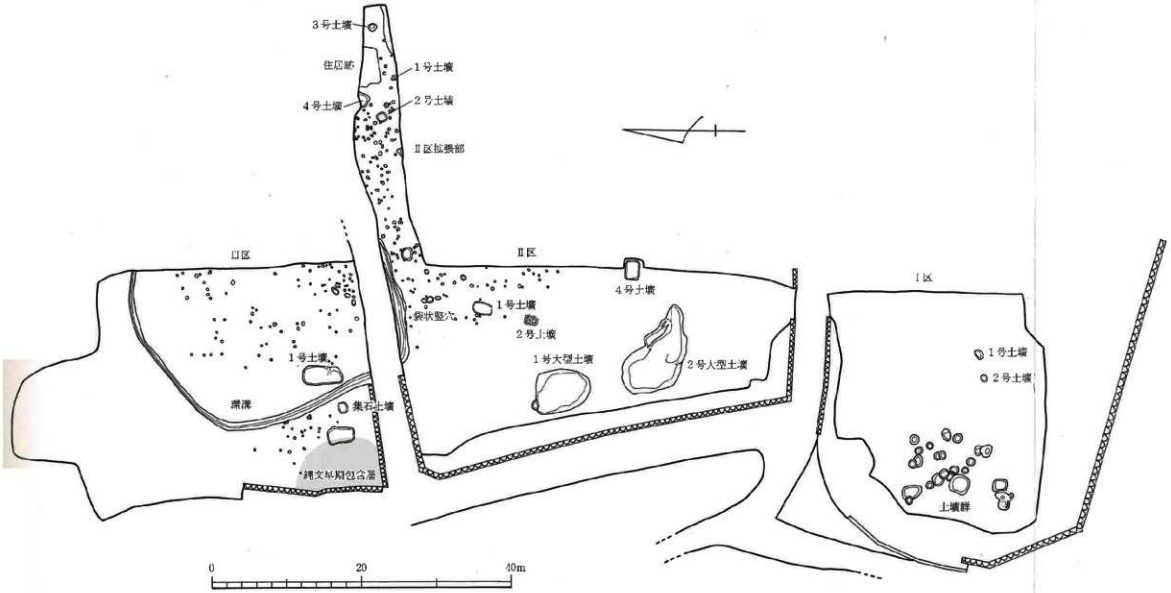
古代の遺構・遺物は確認されていないが、中世になると、飛車丸地区の南側、すなわち Ⅰ 区とⅡ 区で、遺構が確認される。1992 年～ 1996 年にかけて農道建設や宅地開発に伴い、臼杵市教育委員会が台地の東北部や南西部を発掘調査している。それによると、野村台の台地上には 11 ～ 16 世紀の溝や柵地が確認されており、台地全面にわたり、屋敷や集落・墓地などが展開していたことが予測される。

こうした中世の状況は、近世にも継承され、飛車丸地区の Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 区で遺構が確認されている。特に、Ⅰ 区の西端で検出された、土壙群はその形態や、集中性などから墓地の可能性が強い。また、Ⅱ・Ⅲ 区では、不用物を埋め込んだ廃棄土壙が検出されている。

以上の他、中世か近世に属する可能性が強いものの、遺物の出土がない遺構や、判別不能の遺物を出土した遺構がある。これらは、一応近世の遺構として取り扱った。



第４図　野村台遺跡調査区位置図



第５図　野村台遺跡飛車丸地区遺構配置図（500／1）

第2節　縄文時代の調査

1．出土状況

縄文時代の調査は、Ⅲ区の南西隅に、わずかに縄文時代早期の遺物包含層が確認された。通常この地域は、火山灰である「アカホヤ」の下位にこの時期の遺物包含層が確認される。しかし飛東丸地区では、後世に削平を受け、「アカホヤ」は残っていなかった。このため、遺物包含層は薄く、その範囲も狭かったため遺物の出土量も少ない。

この他、縄文時代早期の遺物は弥生時代以降の遺構からも出土した。

出土遺物は、押型文土器と石鏃が主体である。

2．出土遺物

(1)　土器（第6図）

1は、口縁部の資料で、内面には2段の原体条痕が、外面は楕円押型文が施文されている。色調は橙褐色で、胎土に砂粒は少なく、焼成は悪い。2は、口縁部内面に短い原体条痕が施文されている。外面は縦回転の撚糸文と考えられる。胎土に細かい砂粒を含み、淡褐色で焼成は軟質である。3は、口縁端部を欠くが、内面には原体条痕とその下位に横回転による山形押型文が施文されている。外面にも横回転の山形押型文が施文され、色調は淡黄褐色で、焼成は不良である。4は、口縁部近くの資料である。内外面に山形押型文が施文され、色調は暗褐色をしている。胎土に砂粒は少なく、焼成は不良である。5は、口縁端部を欠くが、内面に細い原体条痕とその下位に横回転の山形押型文が施文されている。外面は縦回転の山形押型文が施文されている。口径は小さく、色調は明褐色で、胎土に砂粒は少なく、焼成は不良である。

6・7は、胴部の資料で、内面は撫で仕上げで、外面は横回転の山形押型文が施文されている。6の色調は、黄褐色で、胎土に砂粒が少なく、焼成は不良である。7は底部に近く、色調が橙褐色で、胎土に砂粒を多く含み、色調は不良である。8は、内面が横撫でで、外面は楕円押型文の胴部資料である。色調は黄褐色で、胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は不良である。9は、内面が横撫でで、外面は横回転の山形押型文の胴部資料である。色調は茶褐色で、胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は不良である。10は、内面が横撫でで、外面は横回転の山形押型文の底部に近い胴部資料で、器壁の厚さが均一ではない。色調は暗茶褐色で、胎土に砂粒は少なく、焼成は不良である。

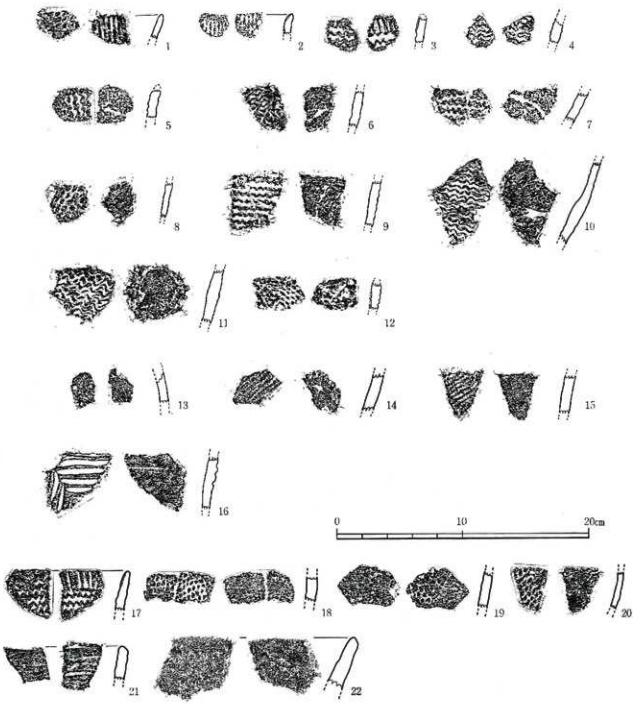
11は、内面が横撫でで、外面は横回転の山形押型文の胴部資料である。色調は黄褐色で、胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は不良である。12は、口縁部に近い資料である。内面の一部と外面に横回転の楕円押型文が施文されている。色調は淡褐色で、胎土に砂粒は少なく、焼成は不良である。13は、出土位置不明の土器で、器面には擬似縄文が施文されている。色調は明褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。縄文時代後期の資料の可能性が強い。

14・15は内面が撫で、外面が縄文の資料である。色調は14が淡褐色、15が橙褐色で、2点とも胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は良くない。16は、内面が横撫で、外面が沈線の土器片である。色調は黒褐色で、胎土に角閃石を含み、焼成は良くない。手向山式土器の可能性が強い。

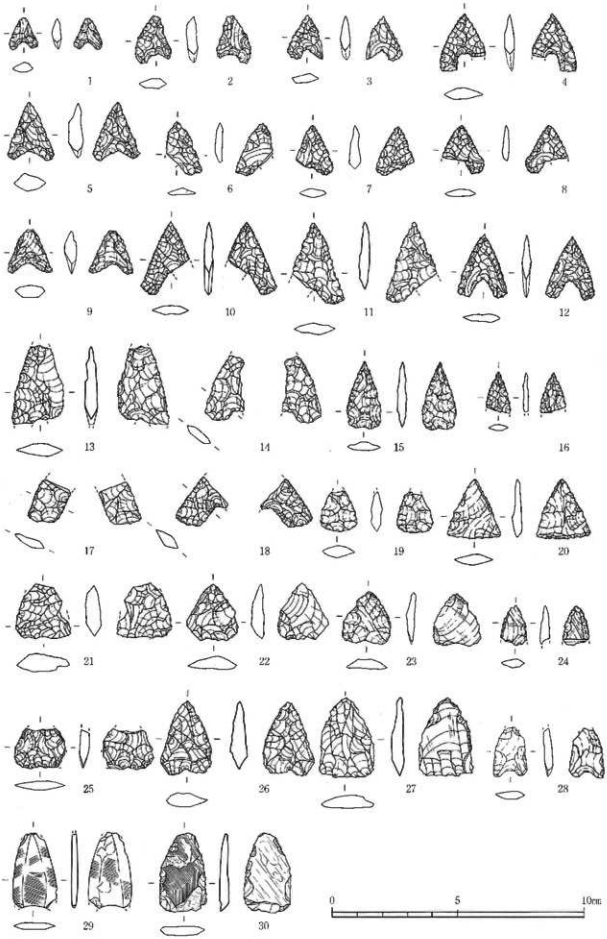
17～22の資料は、環溝遺構から出土したものである。17は、口縁部の資料である。内面には原体条痕とその下位に横回転の山形押型文が施文されている。外面は、口縁端部が無文帯で、その下位に山形押型文が施文されている。色調は淡橙褐色で、胎土に砂粒をわずかに含み、焼成は不良である。18・19は、口縁部近くの資料である。18は、内面が横回転の楕円押型文であるが磨滅している。外面は縦回転の楕円押型文である。色調は、淡黄褐色で、胎土に砂粒が多く、焼成は不良である。19は、内外面とも磨滅しているが、楕円押型文が施文されている。色調は、淡褐色で、胎土に

砂粒は少なく、焼成は悪い。20は底部近くの資料で、内面が横撫で、外面は楕円押型文が施文されている。色調は黄褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。21・22は無文土器の口縁部である。内外面とも横方向の撫でで、色調は茶褐色で、胎土に砂粒を多く含み、焼成は不良である。

包含層出土の資料は、1～3の口縁部の資料から、早水台式土器と考えられ、縄文時代早期前葉に属する。



第6図　野村台遺跡飛車丸地区出土縄文土器実測図



第７図　野村台遺跡飛車丸地区出土石鏃実測図

(2) 石器（第7図）

野村台遺跡飛車丸地区からは、縄文時代早期の包含層を中心に、弥生時代までの各時期の石鏃が多数出土している。ここでは、それらをまとめて報告する。

1は、長さ1.25cm、幅1.15cm、厚さ0.35cm、重さ0.3gの角閃安山岩製で、極めて小さい。2は、長さ1.9cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ0.87gの姫島産黒曜石製である。3は、長さ1.7cm、幅1.45cm、厚さ0.4cm、重さ0.7gのチャート製である。4は、片脚を欠くが深い抉りのある縄文時代早期の押型文土器に伴う典型的な鍬形鏃である。長さ2.25cm、幅1.8cm、厚さ0.45cm、重さ1.8gのチャート製である。

5は、長さ2.3cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm、重さ1.9gのチャート製である。拡張区の住居跡内から出土している。6は、脚部を欠く石鏃である。長さ2.1cm以上、幅1.2cm以上、厚さ0.3cm、重さ0.6g以上のチャート製である。7は、片脚を欠く。長さ2.0cm、幅1.45cm、厚さ0.4cm、重さ0.8g以上のチャート製である。8も片脚を欠く。長さ1.8cm、幅1.65cm、厚さ0.3cm、重さ0.8g以上のチャート製である。9は、主要剥離面を残す石鏃である。長さ1.7cm、幅1.7cm、厚さ0.45cm、重さ0.9gの安山岩製である。10は、片脚を欠く石鏃である。長さ2.9cm、幅1.5cm以上、厚さ0.35cm、重さ1.2gのチャート製である。

11は、片脚を欠く石鏃で、環溝出土である。長さ3.2cm、幅1.7cm以上、厚さ0.4cm、重さ1.9g以上のチャート製である。12は、長さ2.5cm、幅1.9cm、厚さ0.35cm、重さ1.1gのチャート製である。13は、先端部と脚部を欠く。長さ3.0cm以上、幅2.0cm、厚さ0.5cm、重さ02.9g以上の姫島産黒曜石製である。14は、半分を欠く石鏃である。長さ2.6cm以上、幅1.5cm以上、厚さ0.3cm、重さ1.4g以上のチャート製である。15は、環溝出土で、長さ2.65cm、幅1.4cm、厚さ0.35cm、重さ1.0gの角閃安山岩製である。

16は拡張区4号土壙出土の石鏃の先端部である。長さ1.6cm以上、幅1.0cm以上、厚さ0.2cm以上、重さ0.3g以上のチャート製である。17は石鏃の脚である。長さ1.7cm以上、幅1.4cm以上、厚さ0.3cm、重さ0.9g以上のチャート製である。18は脚部のみである。厚さ0.45cmのチャート製である。19は、先端を欠く。長さ1.6cm以上、幅1.4cm、厚さ0.45cm、重さ0.87gの角閃安山岩製である。20は、長さ2.35cm、幅2.1cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gの安山岩製である。

21は、先端部を欠く石鏃である。長さ2.25cm以上、幅2.25cm、厚さ0.75cm、重さ2.6g以上のチャート製である。22は、長さ2.35cm、幅1.8cm、厚さ0.42cm、重さ2.6gのチャート製である。23は、主要剥離面を残した石鏃である。長さ2.1cm、幅1.8cm、厚さ0.35cm、重さ01.2gの安山岩製である。24は、石鏃の先端である。長さ1.6cm以上、幅1.0cm以上、厚さ0.4cm、重さ0.5g以上の安山岩製である。25は、先端部を欠く。長さ1.7cm以上、幅1.95cm、厚さ0.4cm、重さ2.2g以上のチャート製である。

26は、長さ2.9cm、幅2.0cm、厚さ0.65cm、重さ3.1gのチャート製である。基部の抉りは小さい。27は、長さ3.1cm、幅2.1cm、厚さ0.5cm、重さ3.5gのチャート製である。基部は平坦で、主要剥離面を残している。28は、先端を欠く。長さ2.0cm以上、幅1.4cm、厚さ0.3cm、重さ0.9g以上で、安山岩製である。Ⅱ区の1号大型土壙出土である。

29は、Ⅱ区2号大型土壙出土である。先端部を欠くが、長さ3.0cm以上、幅1.7cm、厚さ0.2cm、重さ2.1g以上の緑色片岩製の磨製石鏃である。30は、住居跡出土の一部を欠く磨製石鏃である。残された部分は、長さ3.1cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ2.7gの頁岩製である。

1～28は、縄文時代早期に属するが、29・30は、弥生時代後期で、環溝遺構と関連する時期である。

第３節　弥生・古墳時代の調査

１．貯蔵穴（Ⅱ区拡張区２号土壙）

(1)　遺構（第８図）

Ⅱ区の拡張区西側に位置し、遺構検出時からプランを確認でき、規模は1.5ｍ×1.5ｍ、深さ15cmを測る。平面プランはほぼ円形を呈し、床面は平坦である。

埋土からは下城式土器の口縁部と、一括廃棄された状況で小型の壺形土器が出土した。また、周りの礫は熱による赤変が見られる。

時期は出土土器の形態から弥生時代中期初頭と考える。

(2)　遺物（第56図１・５）

遺物は第56図の１と５に図示した。

１は弥生土器の壺形土器で胴部の８割が残存する。残高12.5cm、胴部最大径17.1cmである。外面ハケ調整の後、ヘラによるみがき、内面ハケ調整、ナデ仕上げである。胎土に２～４mm大の石英、１mm大の長石をまばらに含み、砂粒が多い。色調は内外面ともにぶい橙色である。胴部上半に区画文様帯を持つ。文様は基本的に半截竹管状工具を用いた２条１単位の沈線文で、胴頸境に１、胴部に２単位の横沈線を描き、区画内に縦に２単位ずつ、計８単位描く。また、底部は円盤充填風な作りで、あるいは脚が付くことも考えられる。半截竹管を用いて文様を描くのは下城式土器に伴う壺形土器に特徴的である。胴部上半に区画文様帯を持つことから弥生前期的な特徴をもちあわせているが、形態から見て弥生時代中期初頭と考える。

５は刻目突帯文を有する下城式土器の甕形土器の口縁部である。復元口径20.2cmである。外面ハケ調整、内面ナデ調整で指圧痕が残る。胎土に石英・長石を含み、色調は外面明赤褐色、内面赤褐色である。

２．環溝遺構

(1)　遺構（第10図）

Ⅱ区とⅢ区にまたがり南北36m、東西20m以上の環溝遺構が検出された。溝そのものは調査区の南側のⅢ区に大きく展開しているが、後世の削平により、上部が削られており、深さ30cm～１mの深さしか残っていない。しかし、1994年にⅡ区とⅢ区の間の農道を調査した臼杵市教育委員会の成果によると深さ約1.8m、幅約1.8mの溝が確認されている。今回それに続く溝として再確認することができ小規模な環溝といえることが解った。

第８図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区２号土壙実測図

環溝内部にはピット群が展開するが、かなりの削平を受けており、明確な建物を確認することはできなかった。

溝の中からは弥生時代後期の壺形上器や甕形上器が多く確認された。特に溝の西側と南側からの出土は良好であった。また、重さ約3.7kg姫島産の黒曜石の石核が確認されている。

(2) 遺物（第9・13～16図）

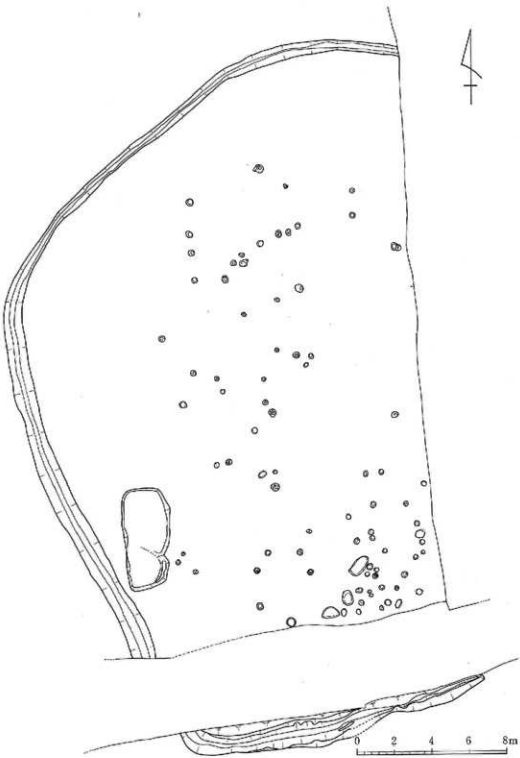
第9図1は口縁外端部とその下位に2条の刻目突帯をめぐらす。残存部分で見る限り、内外面ともナデによる調整がなされ、胎土に石英を含む。色調は明黄褐色である。2・3は刻目突帯文を持つ下城式土器である。2は突帯部に刻目を有し、外面ハケ調整、内面丁寧なナデ調整で胎土に1mmほどの角閃石をわずかに含み、色調は黄褐色である。3は突帯部に刻目を有し、復元口径20.6cmである。外面の調整は突帯の下はヨコナデ、胴部はハケ調整、内面はナデ調整である。胎土に1mmほどの角閃石をわずかに含み、色調は黄褐色で外面に煤が付着している。4は壷形土器の胴部片で、半截竹管による2条の沈線文が認められる。胎土に1mm大の角閃石・長石をわずかに含む。外面はハケ調整。内面の調整は摩耗のため不明である。色調は明橙褐色である。

第13図1～2は壷形土器の胴部片である。1は2条以上の突帯を持ち胎土に1～2mmの砂粒を含み内外面ともナデ調整である。色調は暗黄褐色である。2も突帯を有し、胎土に1～2mmの砂粒を含み、外面ナデ調整、内面ナデ調整で指圧痕が残る。3は長頸壷と考えられる。頸部以上を欠損していが、残高13.0cm、胴部最大径14.1cm、底径1.7～2.0cmである。底部は凹みがある。胎土に多くの砂粒と2～3mm大の石英粒、1mm大の長石などをまばらに含む。器面調整は器表面にタタキと思われる痕跡も見られるが、細かいミガキによってほとんど消されている。また、焼成後に穿孔されている。

4は壷形土器の口縁部破片である。外形15.0cmで、胎土に砂粒を多く、角閃石をわずかに含む。器面調整は内外面ともナデ調整で色調は黄褐色である。5は壺形土器の胴部と思われる。胴部最大径27.8cmを測る。胎土に多量の砂粒や赤色粒と、微量の石英を含む。器面調整は内外面ともハケ調整で指圧痕が残る。色調は黄褐色である。6は壺形土器の底部と思われる。胎土に多量の砂粒と、微量の石英を含む。器面調整は外面摩耗のため不明だが底部下半に指圧痕が残り、ハケメのような工具跡が見られ、内面はナデ調整である。色調は黄褐色である。7は壺形土器の口縁部で、復元口径25.8cmである。口縁部に板状工具の刺突による山形文が施される。胎土に1～2mmの石英を多く含む。色調は外面黄褐色、内面淡黄褐色である。8は複合口縁壷の口縁部である。口縁部先端は欠損している。屈曲部復元径は18.4cmである。口縁部外面に7条1単位の櫛描波状文が施される。器面調整は内外面ともミガキ風のハケメ調整である。胎土に3～5mmの石英、7mm大の結晶片岩を含み、色調は内外面とも橙色である。9は複合口縁壷である。口縁は短く外方に折れ曲がり、底部は

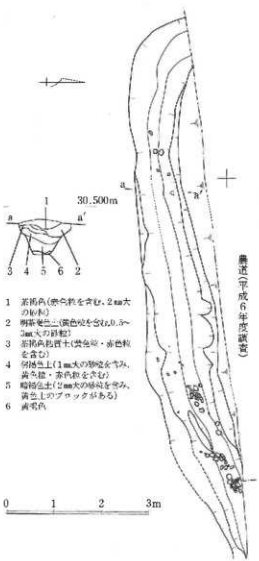
第9図　野村台遺跡飛車丸地区環溝出土土器実測図（1）

尖底気味になる。口径 11.2cm、器高 25.6cm、胴部最大径 17.2cmを測る。口縁部外面に３条１単位の櫛描波状文を、頸部の突帯に斜目の刻目を施す。胎土に多量の砂粒と２～４mm大の石英をまばらに含む。器面調整は外面では口縁部ナデ調整、頸部はミガキ調整、胴部はハケ調整後、丁寧なミガキ調整で、内面では口縁部ナデ調整、ミガキ調整がみられ、胴部はハケのちナデ消し調整がなされ、胴部下半には指圧痕がよく残る。

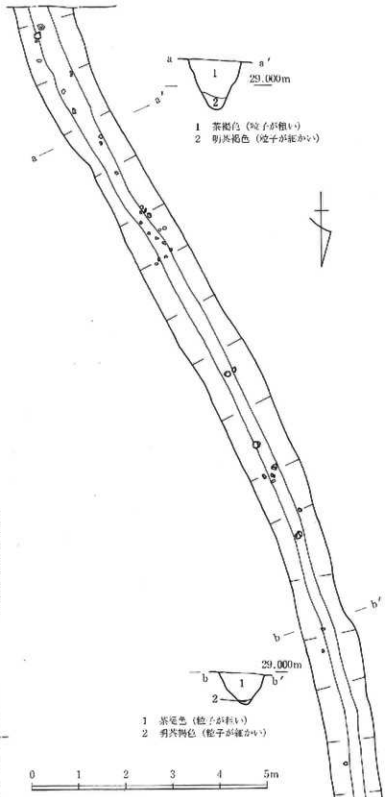


第 10 図　野村台遺跡飛車丸地区検出環溝実測図

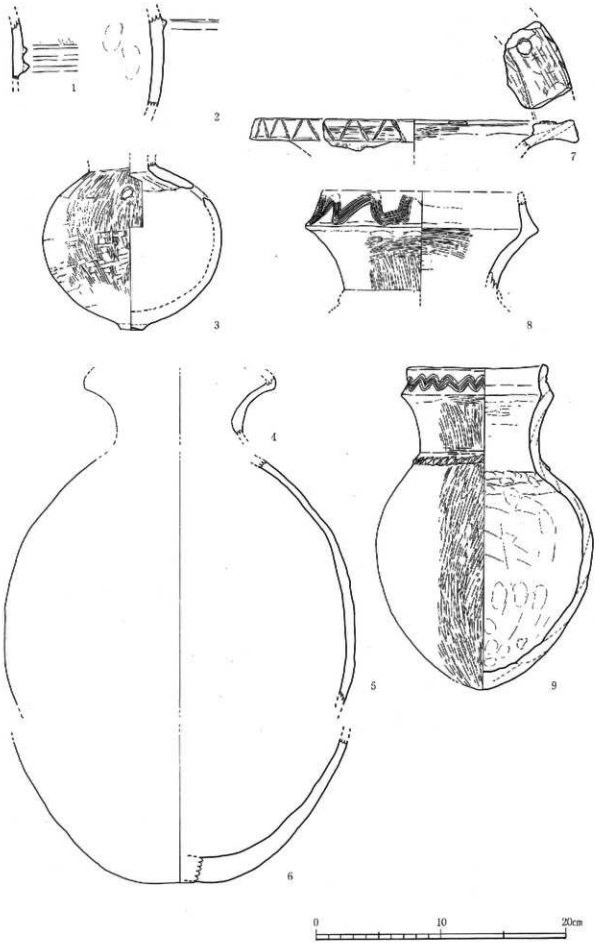
第14図1は復元口径17.8cm、屈曲部径14.0cmの甕形土器である。胎土には多量の砂粒と、石英・長石をまばらに含む。色調は外面がややにぶい橙色、内面は黄橙色である。内外面とも斜にハケメ調整を施している。外面に煤の付着が認められる。2は甕形土器の頸部から胴部の破片である。復元頸部径20.0cmで、胎土に1mm大の角閃石・長石・石英をわずかに含む。内外面ともハケ及びナデ調整である。色調は内外面とも黄褐色で内面の一部に煤の付着が認められる。3は残高28.2cm、頸部径12.6cm、胴部最大径23.0cm、底径2.4cmの甕形土器である。胎土に角閃石・石英を多く含むが、きめは整っている。タタキによる成形の後、ハケメを細かく施し、ほとんどタタキの痕跡を残さない。ハケメも一部ナデによって消されている。内面はハケメが残る。外面は黄橙色で部分的に二次被熱による赤変が見られる。内面はに



第11図　野村台遺跡飛車丸地区環溝遺構南部実測図

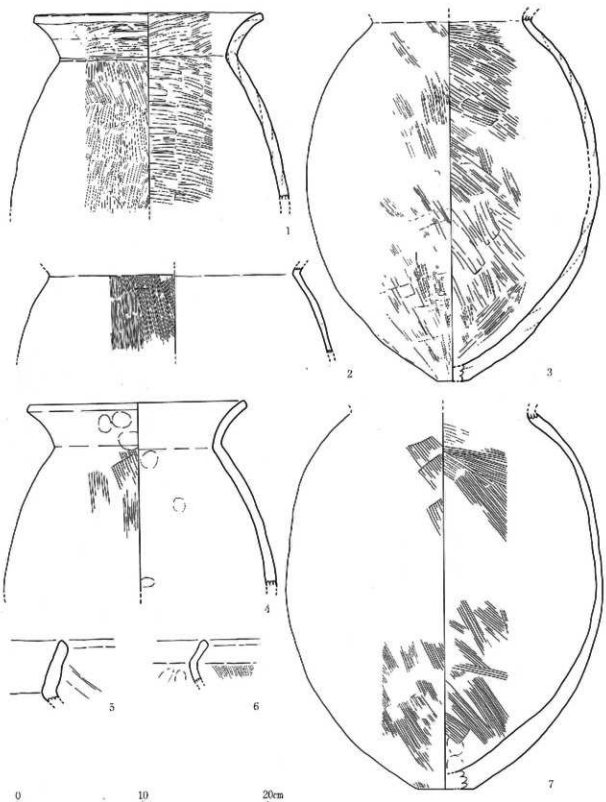


第12図　野村台遺跡飛車丸地区環溝遺構西部実測図



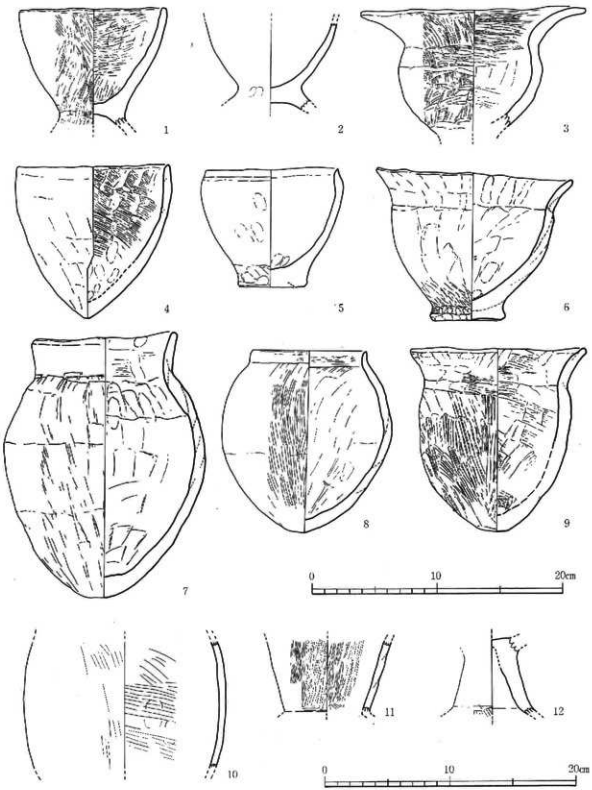
第13図　野村台遺跡飛車丸地区環溝出土土器実測図（2）

ぶい橙色、赤褐色である。外面には煤が付着している。4は復元口径6.6cmの焼形土器で、胎土に石英・長石を含む。外面は褐灰色、明赤褐色、にぶい黄橙色、内面は明褐色である。口縁部に指圧痕が見られ、胴部は外面ハケ調整、内面ナデ調整で指圧痕が残る。5～6は焼形土器の口縁部片であ



第14図　野村台遺跡飛車丸地区環溝出土土器実測図（3）

る。5は胎土に角閃石・長石を含み、色調は外面暗褐色、内面黄褐色である。器面調整はナデ調整である。6は胎土に角閃石をわずかに含み、色調は内外面とも黒褐色である。外面はハケ及びナデ調整、内面はナデ調整で指圧痕が残る。7は甕形土器の胴部で胴部最大径25.1cm、復元底径4.2cmである。胎土に角閃石・長石・赤色粒子を含み、色調は内外面とも橙色である。

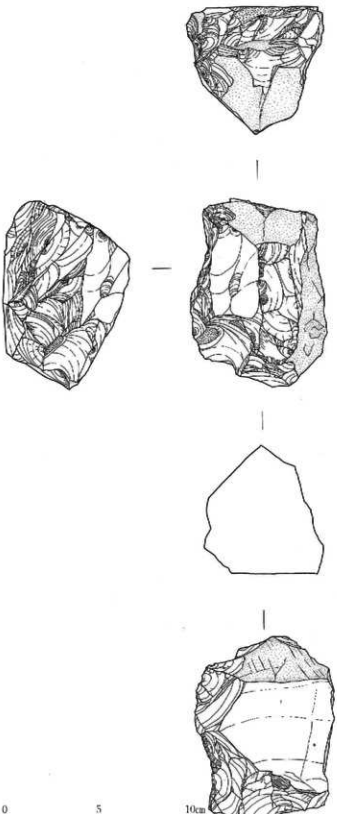


第15図　野村台遺跡飛車丸地区環溝出土土器実測図（4）

第15図1～3は脚付の鉢形土器である。1は口径11.5cm、脚部径5.1cm、残高9.1cmで、胎土は1～2㎜大の石英・砂粒を多く含むためやや粗い。色調は外面にぶい黄橙色、内面にぶい橙色である。外面の調整はやや粗めのハケ調整の後粗いミガキ調整で脚部も縦方向のミガキが入る。内面は部分的に粗いハケメが残るが、割と密にミガキ調整を行っている。2は脚部径5.0cmで胎土に1㎜大の石英と砂粒を多く含む。色調は内外面とも明橙色である。外面はナデ調整、脚部は指押さえ後ナデ調整、内面工具でのナデ調整の後ナデ調整を行っている。3は口径18.0cm、残高9.6cmで、胎土に2～5㎜大の石英や1～2㎜大の長石をまばらに含み、砂粒も多い。色調は内外面とも橙色で赤い発色が見られる。内面は部分的に黄橡色である。口縁部は内外面ともハケ調整後ミガキ調整が行われ、胴部外面はハケ調整後粗いミガキ調整が行われている。胴部内面は摩滅のため調整は不明である。

4は口径12.0cm、器高11.9cmの尖底の鉢形土器で胎土に3～5㎜大の大粒の石英と角閃石を含む。色調は内外面橙色で、内面は部分的に灰色味を帯びる。外面の調整はわずかに工具跡が残り、ハケメ調整の後、丁寧にナデ消したものと思われる。内面はやや荒いハケ調整である。5は復元口径10.4cm、器高9.2cm、底径4.8cmの平底の鉢形土器で、胎土に2㎜大の石英、1㎜大の角閃石をまばらに、砂粒を多く含む。色調は内外面とも黄橙色である。器面調整は摩滅により不明であるが、底部に指圧痕が明瞭に残る。6は復元口径15.4cm、器高11.4cmの平底の鉢形土器である。胎土に2～5㎜大の石英や長石を含んでいる。色調は内外面と黄橙色である。器面調整は摩滅により分かりにくいが、外面下半タタキと思われる痕跡があり、ハケメ状の調整も施している。

7～9は在地性の強い土器である。7は復元口径10.8cm、器高20.3cmの甕



第16図　野村台遺跡飛車丸地区環溝出土姫島産黒曜石実測図

形土器である。胎土に5㎜前後の石英と、2～3㎜大の結晶片岩を特徴的に含む。色調は内外面とも浅黄橙色で、胴部中程に煤が付着している。口縁部外面はナデ調整、胴部外面はハケ調整の後丁寧なナデ消しが行われている。内面はハケ調整の後ナデ消しである。8は復元口径9.0cm、器高14.1cmの甕形土器である。胎土に5～8㎜大の石英、5㎜大の結晶片岩、雲母などを多く含む。色調は外面にぶい橙色、内面黄橙色で胴部外面上半に煤が付着している。外面は荒いハケメを施したのち部分的にナデ消しているが摩滅が著しい。内面はハケ調整後ナデ調整である。底部は丸みを持つがやや面を持つ。9は口径13.8cm、器高14.5cmの甕形土器である。胎土に5㎜大の石英をまばらに含み、1㎜大の長石も認められる。色調は外面にぶい黄橙色、内面黄橙色である。外面の調整はかなり荒いハケメが入り、肩部には工具痕が連続して残存し、意識的に肩部をつくり出している。口縁から先端には粘土のひび割れが入る。内面はハケ調整後ナデ消しである。胴部外面中程に煤が付着する。

10は甕形土器の胴部片で胴部最大径16.1cmである。色調は内外面とも暗褐色で、器面調整は内外面ともハケ調整で内面に指圧痕が残る。11は長頸壺の頸部片である。残高5.5cmで胎土に2～3㎜大の長石を含む。色調は外面橙色、内面浅黄色で内外面にミガキによるものと思われる赤い発色が見られる。器面調整は内外面とも丁寧なミガキ調整である。12は高坏の脚部片である。残高5.9cmで胎土に石英・長石・角閃石を含み、色調は内外面とも橙色である。器面調整は外面ナデ調整、一部ハケ調整、内面ナデ調整である。

第16図は姫島産黒曜石の石核で最大長18.9cm、最大幅14.3cm、最大厚14.5cm、重量3.75kgをはかる。

以上の出土土器から、環溝遺構の時期は弥生時代後期後半と考えられる。

3．住居跡

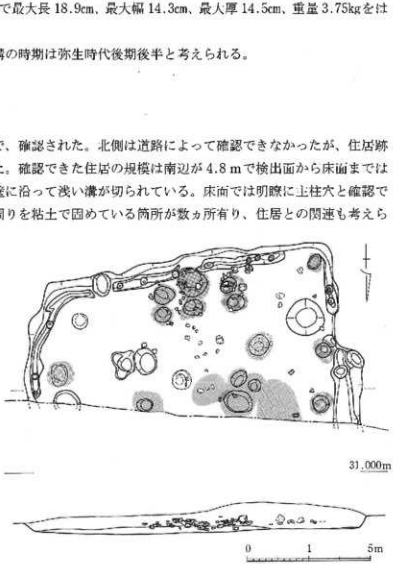
(1) 遺構（第17図）

遺構はⅡ区拡張区の中央付近で、確認された。北側は道路によって確認できなかったが、住居跡の南半分を調査することができた。確認できた住居の規模は南辺が4.8ｍで検出面から床面までは35cmである。住居跡の床面には壁に沿って浅い溝が切られている。床面では明瞭に主柱穴と確認できるものはなかったが、柱穴の周りを粘土で固めている箇所が数ヵ所有り、住居との関連も考えられる。また、住居跡中央寄りに熱変赤色硬化した部分が見られるが炉跡の燃焼部かどうかは疑わしい。

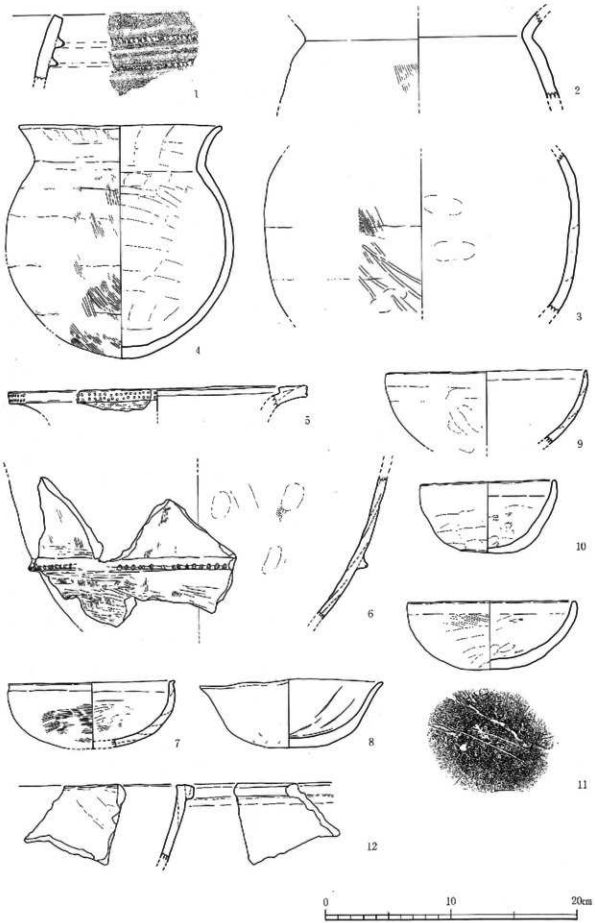
遺物はすべて覆土中からの出土で、小型の甕形土器や土師器の坏などが出土した。また、小玉1点が出土している。

(2) 遺物（第18・19図）

第18図1は刻目突帯をもつ甕形土器の口縁部片である。胎土に石英を含み、色調は外面にぶい黄褐色、内面赤褐色である。2は頸部径18.0cmの甕形土器で、胎土は砂粒が少ない。器面調整は内外面ともナデ調整である。



第17図　野村台遺跡飛車丸地区住居跡実測図



第18図　野村台遺跡飛車丸地区住居跡出土土器実測図

3は胴部最大径24.7cmの甕形土器で、胎土に1㎜大の長石を含み、砂粒は少ない。色調は暗褐色である。外面の調整は上半ハケ調整、下半ミガキ調整で指圧痕が残る。内面はナデ調整で指圧痕が残る。胴部に煤が付着する。4は復元口径15.9cm、器高18.2cmの甕形土器で、胎土は石英・長石・砂粒を若干含むが精選されている。色調は外面にぶい橙色、内面黄橙色で外面に煤が付着している。外面の調整はハケ調整ののち丁寧なナデ消しが行われ、内面は外面よりも丁寧なナデを施すが、屈曲部下の傾斜変換点のあり方から推察するにケズリを施したのちにナデ消したと思われる。

5は復元口径23.4cmの壷形土器で、胎土に5㎜大の石英・結晶片岩・角閃石を含む。色調は内外面とも灰黄褐色である。器面調整は内外面とも丁寧なミガキ調整が施されており、口縁部には竹管状工具を2本一単位として刺突文が施され、その内面に赤色顔料が付着する。6は大型の壺形土器の胴部下半片である。断面コ字状の突帯を一条貼り付け、板状工具による刻目がまばらに入る。胎土に5㎜大の石英や3～5㎜大の結晶片岩をまばらに含む。色調はにぶい黄橙色である。外面はハケ調整のちミガキ調整、内面はハケ調整のち丁寧なナデ調整で一部ミガキ調整が見られる。

7は復元口径13.0cm、器高5.1cmの坏で、胎土に多量の砂粒と2㎜大の石英、2～3㎜大の赤色粒をまばらに含む。色調は内外面とも黄橙色である。器面調整は基本的にはナデ調整であるが部分的に細かいハケメが入る。内面はミガキ調整と思われる。8は口径14.5cm、器高5.3cmの坏で、胎土に角閃石、2㎜大の石英、5㎜大の砂粒と長石を多く含む。色調は内外面とも橙色である。器面調整は外面ナデ調整、内面ヘラ状工具によるナデ調整のちナデ調整で外面底部付近にツメ痕が残る。また、底部付近に黒斑がある。9は復元口径15.6cmの坏で、胎土に多量の砂粒と石英、1～5㎜大の結晶片岩をまばらに含む。色調は外面浅黄色、内面黄橙色である。器面調整は内外面ともナデ調整で口縁部先端は強くヨコナデを施す。10は口径10.6cm、器高5.6cmで胎土に石英・角閃石・長石・結晶片岩をわずかに含む。色調は内外面ともにぶい橙色である。内外面とも底部に指圧痕が残り、それより上はナデ調整である。口縁部は先端にヨコナデを施す。内面にツメ痕が残る。11は口径13.4cm、器高5.3cmの坏で、胎土に石英・角閃石・長石と砂粒を多く含む。色調は内外面とも黄橙色である。器面調整は内外面ともハケ調整のちナデ消しである。底部にヘラ記号が残る。

12は時期不明の上師質土器の口縁部片である。胎土は5㎜大の石英、8㎜大の結晶片岩などかなり大きめの小石を混入させている。色調は外面黄橙色、内面にぶい黄色である。器面調整は基本的にナデ調整であるが、内面はミガキのようにかなり丁寧な仕上げを行っている。瓦質鍋に形態は似る。混入と考える。

第19図は緑灰色の滑石製の小玉で長さ5㎜、幅6㎜、重量0.1gである。

第19図　野村台遺跡飛車丸地区住居跡出土小玉実測図

4．竪穴遺構（Ⅱ区拡張区４号土壙）

(1) 遺構（第21図）

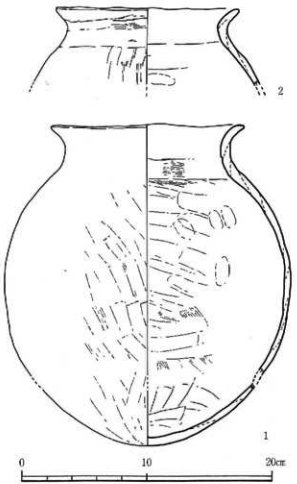
遺構はⅡ区拡張区の住居跡の西側で検出された。遺構の北側は道路下になり、一部は水道管埋設による削平を受けている。平面プランより楕円形を呈するものと推定され、確認できた規模は1.6×1.8m、深さ30cmである。遺構の東肩に柱穴が２つ確認できる。

遺物は古墳時代の甕形土器が廃棄された状態で出土している。

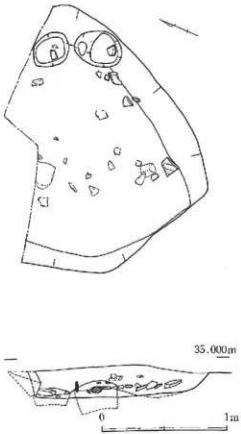
(2) 遺物（第20図）

１は復元口径15.2cm、器高25cm前後、胴部最大径22.1cmである。胎土は５～６mm大の石英を数点、１cm大の結晶片岩をわずかに含み、砂粒が多い。色調は外面黄褐色で胴部中位は二次的な比熱により橙色に変色している。口縁部内面は黄橙色、胴部内面は暗灰黄色である。口縁部は強いヨコナデによる調整がみられ、胴部外面はハケ調整ののちナデ消し調整をおこなっている。また、胴部内面にはケズリを施したのちナデを施している。

２は復元口径14.4cmの甕形土器で、胎土に２～３mm大の石英、結晶片岩をまばらに含み、砂粒も多い。色調は外面黄橙色、口縁先端橙色、胴部内面暗褐色である。口縁部は強いヨコナデがみられ、胴部外面はハケメが若干残るもののナデ消しをおこなっている。胴部内面はナデ調整である。



第20図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区４号土壙出土土器実測図



第21図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区４号土壙実測図

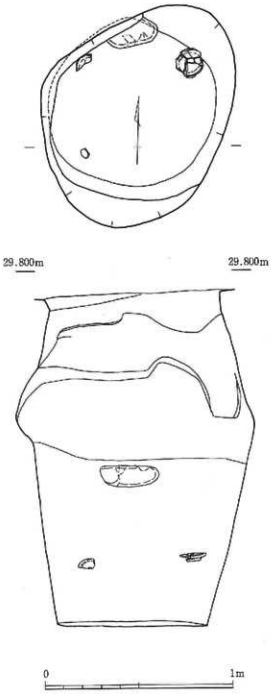
第４節　中世の調査

１．Ｉ区１号土壙

(1)　遺構（第22図）

調査区の南側に設定したＩ区の東南部分に位置し、西側に展開する近世土壙群とは離れた位置に存在する。平面プランは長軸2.5ｍ、短軸1.9ｍの楕円形を呈し、深さ3.6ｍを測る。検出面から1.3ｍほどのところで、袋状に膨らみ、床面に向かって逆八の字状に掘られている。

遺物は床面から30～40cmのところで箱形の土師器が３点、覆土から２点出土している



第22図　野村台遺跡飛車丸地区Ｉ区１号土壙墓実測図

(2) 遺物（第23図）

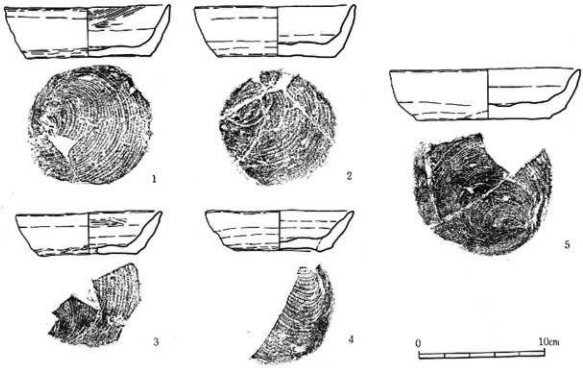
1～5は底部糸切り離しのロクロ成形の土師器であるが、やや歪みがある。いずれも底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口縁部端でやや外反しながら尖る。1は口径12.8～13.0cm、器高3.9～4.1cm、底径9.8～10.4cmを測る。胎土に5mm大の石英がわずかに入る。色調は外面が灰白色～浅黄色を呈し、内面は黄橙色を呈する。

2は口径12.4～12.6cm、器高3.9～4.1cm、底径9.0～9.6cmを測り、胎土はきめ細かい。色調は外面が暗灰色～浅黄橙色を呈し、内面は暗褐色を呈する。

3は復元口径11.6cm、器高3.2cm、底径8.0cmを測り、胎土には角閃石などの1mm以下の微粒子を含むがかなり精製されている。色調は内外面とも浅黄橙色を呈する。

4は復元口径11.8cm、器高3.1cm、底径7.0cmを測り、胎土に2mm大の石英をわずかに含む。色調は内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

5はかなり粗い作りで歪みが大きい。復元口径14.8～15.2cm、器高3.7～4.0cm、底径10.6cmを測る。胎土は赤色粒や石英粒などの微粒子を含むがかなり精製されている。色調は内外面ともにぶい黄橙色～灰黄色でやや白っぽい。



第23図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区1号土壙出土土器実測図

2．Ⅰ区2号土壙

(1) 遺構（第24図）

遺構はⅠ区の中央北より、1号土壙の東側に位置する。平面プランは1.90 m × 1.85 mのほぼ円形を呈し、深さ85cmを測る。埋土は茶褐色土で黄褐色ブロックや炭化物を含む。遺物は箱形の坏が3点、内2点は合子状に重なった状態で出土した。

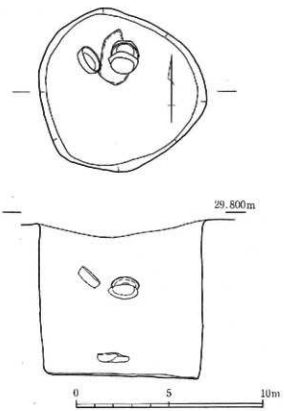
(2) 遺物（第25図）

遺物は第23図1～3に図示した。いずれも底部糸切り離しのロクロ成形の土師器で、底部から口縁部に向けて逆八の字状に開き、口縁部端で尖り、やや歪みがある。1は口径11.3～12.2cm、器高3.2～3.3cm、底径9.0～9.3cmを測る。成形後、内面にハケメ状の調整を加え整形、仕上げをしている。胎土は赤色粒を多く含むが、精選されており、2・3とは若干異なる。色調は内外面ともにぶい橙色である。

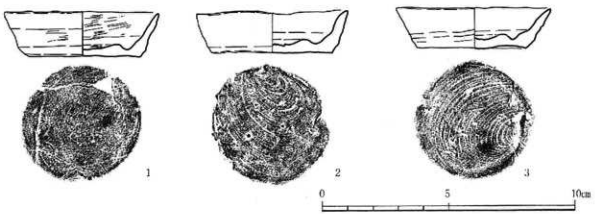
2は口径11.3～12.0cm、器高3.0～3.3cm、底径9.3～9.6cmを測る。成形後の調整はない。胎土には多量の砂粒と1mm大の角閃石、2mm大の結晶片岩、3～4mm大の石英粒をまばらに含む。色調は内外面とも黄橙色である。

3は口径12.1～12.5cm、器高3.0～3.3cm、底径8.6～9.0cmを測る。成形後の調整はない。胎土には多量の砂粒と1mm大の角閃石、3～4mm大の結晶片岩、2mm大の石英粒、長石をまばらに含む。色調は黄橙色である。

坏の形態から見て時期は15世紀代と考える。



第24図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区2号土壙実測図



第25図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区2号土壙出土土器実測図

3．Ⅱ区２号大型土壙

(1) 遺構（第26図）

遺構はⅡ区の中央やや南西寄りに位置する。遺構検出段階でまず二つの大型の土壙を確認したが、掘り進んでいく内に遺物の集中具合や埋土の違いなどから大型の土壙が最低３つ切り合っていることが判明した。切り合い関係は不明瞭で、時期差を特定することは困難だった。遺構のちょうど中央部分にあたるところでは地下式土壙の天井部が崩落した後のような土層の堆積が見られた。また、遺構の東部分では大型の礫や石塔などを大量廃棄した跡が見られる。

遺物の出土は主に三箇所に集中する。遺構西側、中央部分、東側である。西側の遺物は小破片が多く、おそらく土取の後埋められたものと推定する。中央部分では弥生時代から中世までの遺物が多く含まれる。東側では礫の大量廃棄が見られるが、その中に石塔が見られる

第26図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区２号大形土壙実測図

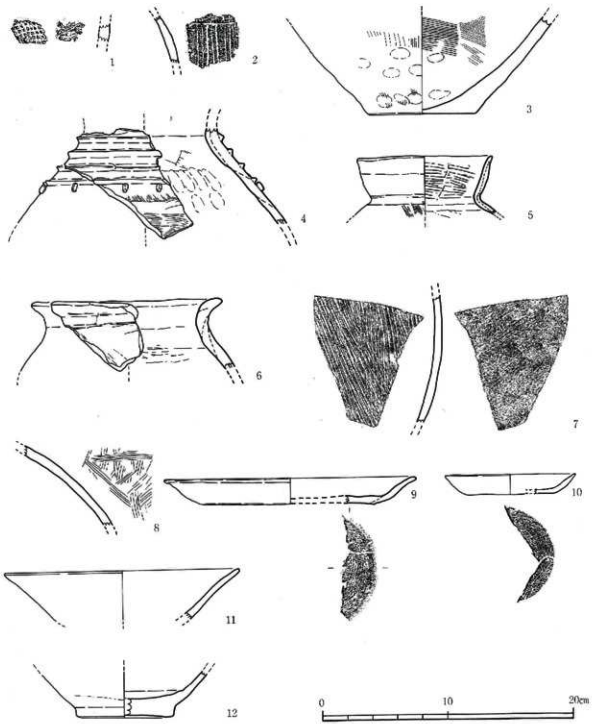
(2) 遺物（第27～32図）

第27図1は押型文土器である。胎土は砂粒が少なく、長石を微量含む。色調は外面淡橙褐色、内面淡褐色である。内外面に楕円文を施す。2は弥生時代中期の壺形土器の胴部片である。胎土は砂粒が多く、微細な長石を含む。色調は暗褐色である。外面は半裁竹管状の縦、横の文様が施され、内面はミガキ調整である。3は弥生土器の甕の底部で、底径8.3cmである。胎土に石英・長石を含み、色調は内外面ともにぶい黄橙色である。器面調整は内外面ともハケ調整で指圧痕が残る。4は弥生時代後期の肩部片である。突帯部で径を復元すると10.4cmで、胎土に砂粒を多く含む。色調は外面黄褐色、内面にぶい黄褐色である。断面三角形の貼り付け突帯を肩部に4条以上めぐらし、浮文は両側から指でつまみ、貼り付けている。器面調整はハケ調整のちナデ消しである。5は古墳時代前期の甕形土器の口縁部である。復元口径10.6cmで胎土はきめ細かい。色調は内外面とも浅黄色である。口縁部に強いヨコナデが見られ、胴部はハケ調整である。胴内面はケズリを施したのちナデ消しを行っている。

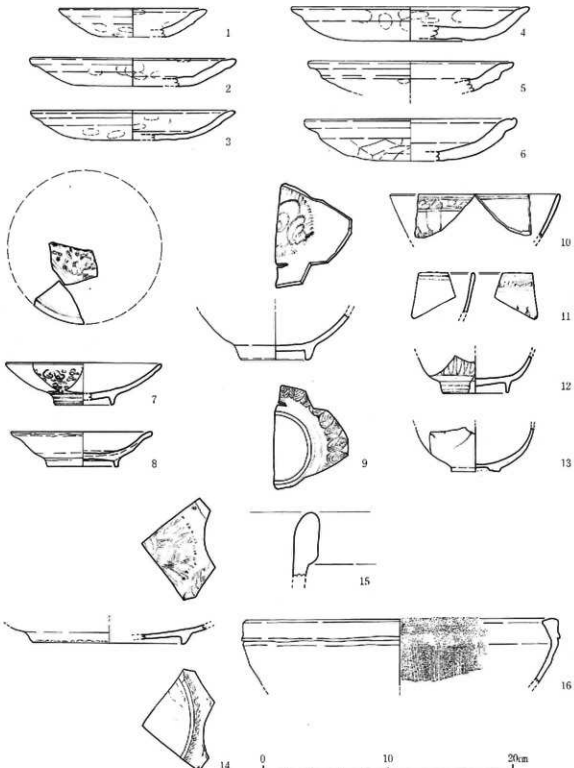
6は復元口径25.0cmの甕形土器で、胎土に1～2mm大の石英・長石・角閃石・結晶片岩・砂粒を多く含む。色調は外面黄橙色、内面にぶい黄色である。外面はナデ調整、胴部内面はケズリを行ったのちナデ調整を行っている。7は須恵器の胴部片で胎土に微細な長石、2mm大の砂粒を含み、砂粒は少ない。色調は外面薄灰色、内面茶褐色である。外面はナデ調整、内面はハケ調整である。8は弥生土器の壺の肩部片で胎土に1mm前後の長石、角閃石を含む。色調は内外面とも明橙褐色である。外面は不方向のハケ調整、内面は不方向のヘラケズリを行っている。9は底部糸切りの土師器皿である。復元口径20.0cm、器高2.0cm、底径13.6cmで胎土は角閃石をわずかに含むもののきめ細かい胎土で精選されている。色調は内外面とも黄橙色である。10は底部糸切りの坏である。復元口径10.4cm、器高1.55cm、底径7.0cmで胎土に微細な長石、1mm大の角閃石を含み、砂粒は少ない。色調は明橙褐色である。11は土師質土器で高坏の坏部と思われる。復元口径18.6cmで胎土に0.5～1.0mm大の角閃石を多く含み1mm大の長石を含む。砂粒は少ない。色調は淡褐色である。器面調整は内外面ともナデ調整である。12は白磁碗の底部で底径7.8cmである。内外面とも施釉されており、高台の形態から12世紀以降の所産と考える。

第28図1～6は手捏ね成形の京都系土師器である。1は復元口径11.7cm、器高2.25cm、器壁7mmである。2は復元口径15.9cm、器高2.2cm、器壁7mmである。3は復元口径15.9cm、器高1.85cm、器壁4mmである。4は復元口径18.7cm、器高3.7cm、器壁7～9mmである。5は復元口径15.7cm、器壁8mmで口縁部に強いナデが見られる。6は復元口径16.7cm、器高3.3cm、器壁9mmで口縁部に強いナデが見られる。

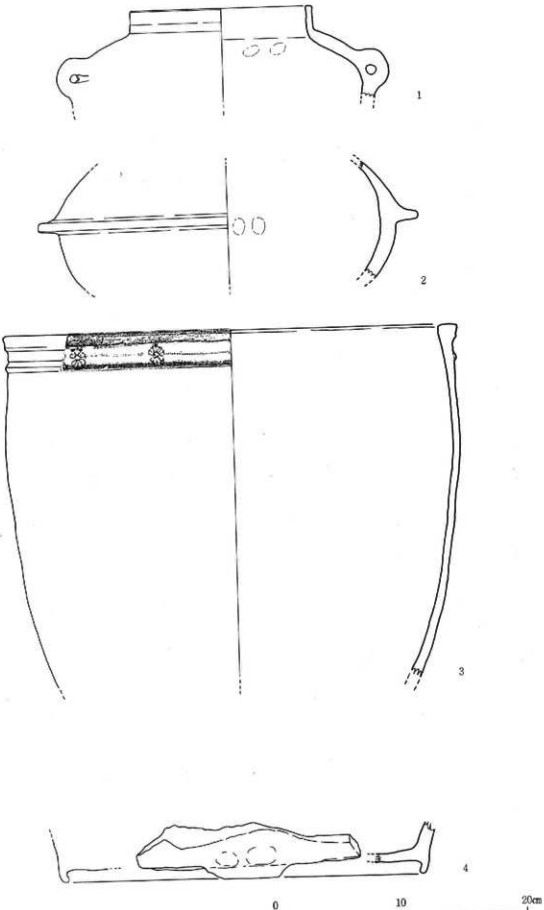
7は染付皿で復元口径12.3cm、器高3.3cm、底径4.8cmである。8はロクロ成形による高台付きの土師質土器である。復元口径11.2cm、器高2.7cm、底径5.6cmである。9～11は小野分類のC群I類にあたる、いわゆる蓮子碗である。9は外面に芭蕉葉文、内面見込み部分に法螺貝を描く。10は復元口径13.4cmで外面の文様は芭蕉葉文か。11の文様も芭蕉葉文と思われる。12は染付碗で復元高台径5.2cmである。内外面とも施釉されているが、畳付は一部無施釉である。13は信楽系の陶器碗で高台径3.8cmである。内外面とも透明釉で施有しており、外面の文様は暗オリーブ色である。ケズリ出し高台を持ち、高台内は露胎である。14は染付皿で復元高台径12.0cmである。外面に唐草文、内面に花芯を描く。高台は露胎だが高台内は施釉されている。15は備前焼の甕の口縁部である。16は擂鉢で復元口径24.0cmである。



第 27 図　野村台遺跡Ⅱ区２号大型土壙出土遺物実測図（１）



第 28 図　野村台遺跡Ⅱ区２号大型土壙出土遺物実測図（２）



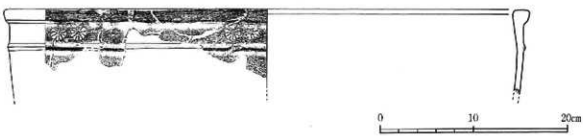
第 29 図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区２号大型土壙出土遺物実測図（３）

第29図の1～2は茶釜である。1は復元口径14.4cmである。2は胴部最大径30.0cmである。3は瓦質火鉢である。復元口径36.0cmで口縁部に一条の三角突帯を持ち、菊花文のスタンプを1個ずつ6.5cm間隔に押捺する。4は瓦質火鉢の底部で復元底径28.8cmである。脚部付近に指圧痕が残る。

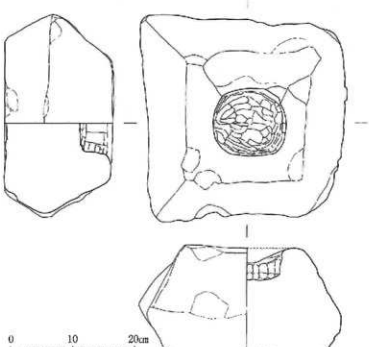
第30図は瓦質火鉢である。復元口径56.0cmで、口縁部に一条の三角突帯を持ち、菊花文のスタンプを2個ずつ14.5cm間隔に押捺する。

第32図は凝灰岩製の石塔の部材である。長さ51.1cm、幅39.8cm、重量24.5kgである。中央部に長さ約30cm、幅8.5cm、深さ3.5cmほどの平坦面を持ち、墓石の一部とも考えられる。

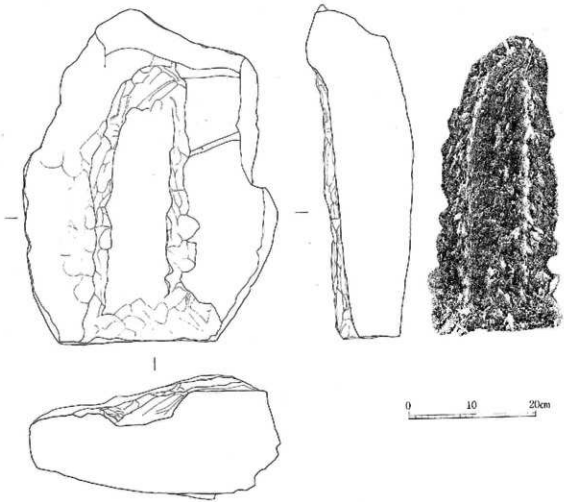
第31図は凝灰岩製の五輪塔の火輪である。最大幅36.5cm、高さ、18.1cm、重量16.5kg、ホゾ穴径10.0cm、深さ4.8cmである。ホゾ穴にはノミ痕が残る。



第30図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区2号大型土壙出土遺物（4）



第31図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区2号大型土壙出土石塔実測図



第 32 図　野村台遺跡飛車間地区Ⅱ区２号大型土壙出土石造品実測図

第5節　近世の調査

1．Ⅰ区土壙群（第33図）

土壙群は調査区南に設定したⅠ区の西半分に集中しており、22基を数える。後世の削平を受けているためその性格は特定しがたいが、その形態や集中性などから墓地の可能性も強い。ここでは主な遺物の出土した土壙を報告する。

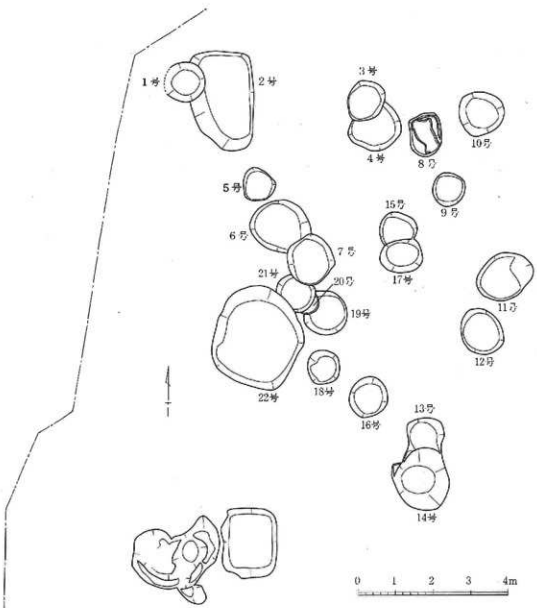
遺物は瓦や近世陶磁器などが主である。

(1)　1号土壙（第34図、35図1）

Ⅰ区の西北に位置し、2号土壙を切る。西側は撹乱でプランは検出できなかったが、平面プランは1×1mのほぼ円形をなすものと思われ、最深部60cmを測る。

遺物は第35図1の瓦質の火鉢が口縁を下にしてほぼ完形の状態で出土した。

口径32.45cm、器高25.50cm、底径24.70cmを測り、胴部及び脚部に菊紋が施文されている。また、胴部に1箇所、脚部に3箇所の穿孔がある。



第33図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群配置図

(2) 7号土壙（第35図2）

遺構は土壙群のほぼ中央に位置し、平面プランは1.2×1.2mのほぼ円形を呈する。

ここからは土人形の脚部（第35図2）が出土した。脚部のみの出土であり器形を推定するのは困難である。器高2.6cm以上、復元底径5.2cmを測り、内外面ともにぶい橙色を呈する。胎土に長石や微細粒を含み焼成は良好である。

(3) 8号土壙（第35図3～5）

遺構はⅠ区の北寄り3・4号土壙と10号土壙の中間に位置する。平面プランは0.8×1.1mの楕円形を呈する。出土遺物は博（第35図3）と土人形（第35図4，5）である。

3は縦25.9cm、横16.5cm、厚さ1.5～2.2cmを測る。片面に格子状の文様が施されている。

4は頭部を欠損しているもののほぼ関係の形で出土した。その器形から虚無僧をもしたものと思われる。器高4.65cm以上となる。外面は浅黄橙色とにぶい黄橙色を呈し、一部朱塗りがある。胎土に長石や微細粒を含み、焼成は良好である。5は動物の足を模したもののようで外面に爪のような表現が見られる。器高は1.95cm以上で、内面浅黄橙色、外面にぶい黄橙色を呈する。胎土には長石や微細粒を含み焼成は良好である。

(4) 11号土壙（第36図1～5）

遺構は土壙群の中央北側に位置する。平面プランは1.5×1.2mの楕円形を呈する。出土遺物は比較的残りの良いものが多く近世陶磁器が中心である。（第36図1～5）

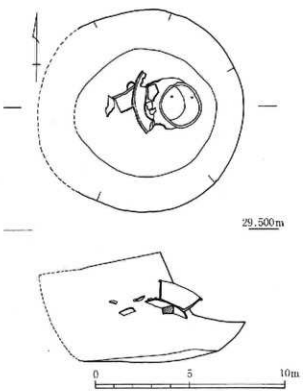
1は白磁皿である。復元口径22.2cm、器高3.2cm、底径15.2cmを測る。内面に型押し成形で葉の文様が施されている。内外面とも施釉されており高台は釉が掻き取られている。また、見込み部分には焼成時のものと思われるハリ支えの痕跡が3箇所以上ある。2は染付の徳利である。器高11.2cm以上、底径4.5cmを測る。外面に蝟唐草の文様がある。3は染付の碗である。口径8.7cm、器高4.5cm、底径3.5cmを測る。外面に羊歯と葉の文様が施され、見込み部分には寿の字が崩された文様がある。内外面とも施釉されているが、高台は釉が掻き取られている。4は陶器で土瓶の蓋と考えられる。口径5.8cm、最大径8.0cm、つまみ径2.05cm、器高2.9cmを測る。外面にイッチンがけによる文様がある。5は陶器碗で、口径10.2cm、器高5.8cm、底径3.6cmを測る。底部以外は内外面とも施釉されている。

(5) 12号土壙（第36図6）

遺構は11号土壙のすぐ南に位置する。平面プランは1.2×1.2mのほぼ円形を呈する。

ここからは軒平瓦（第35図6）が出土した。約1／2が残存しており、中央飾りは六葉花弁文である。袖部には「神」の刻印がある。

(6) 14号土壙（第36図7）



第34図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群1号土壙実測図

遺構は土壙群の南に位置し、平面プランは1.6×1.5mのほぼ円形プランを呈する。

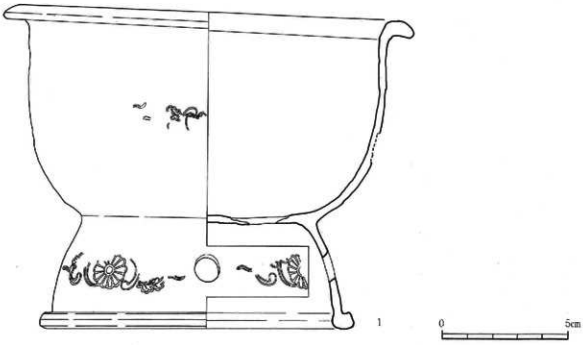
遺物は瓦質の火鉢と思われるもののロ縁部である。(第36図7)

復元口径15.8cmを測り、外面は暗赤褐色を呈するが、口縁部と内面は黒灰色を呈する。外面には小円文が施されている。

(7) 15号土壙(第36図8)

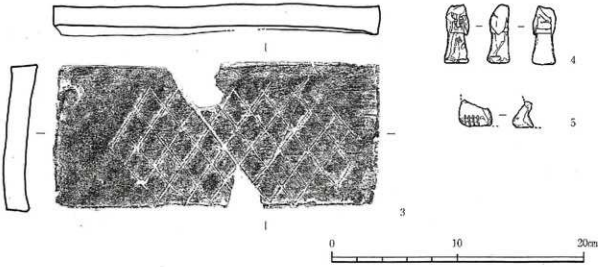
遺構は土壙群の中央北寄りに位置し、17号土壙に切られる。平面プランは推定で1.0×1.0mの円形を呈すると思われる。

1号土壙



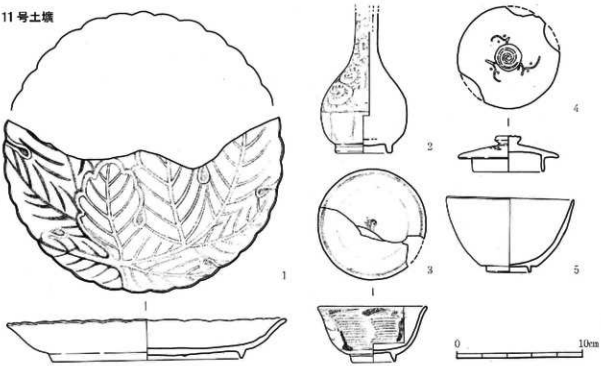
7号土壙

8号土壙



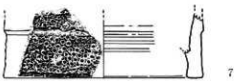
第35図 野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群土遺物実測図(1)

11号土壙



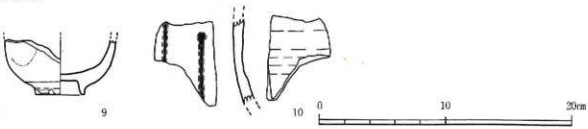
12号土壙

14号土壙



15号土壙

17号土壙



第36図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群土遺物実測図（2）

遺物は備前焼の擂り鉢の破片が1点出土した。

(8) 17号土壙（第36図9～10）

遺構は15号土壙のすぐ南に位置する。平面プランは1.2×0.9mの楕円形を呈する。

遺物は陶磁器2点が出土している。9は18世紀前半の陶胎染付の底部で、1／4が残存。底径は復元すると4.0cmである。内外面ともに白色で外面に鼠須の文様がある。10は陶器の甕の胴部と思われる。内外面共に施釉されており、外面には黒色の釉だれが見られる。外面は暗赤褐色、内面は灰オリーブ色を呈する。

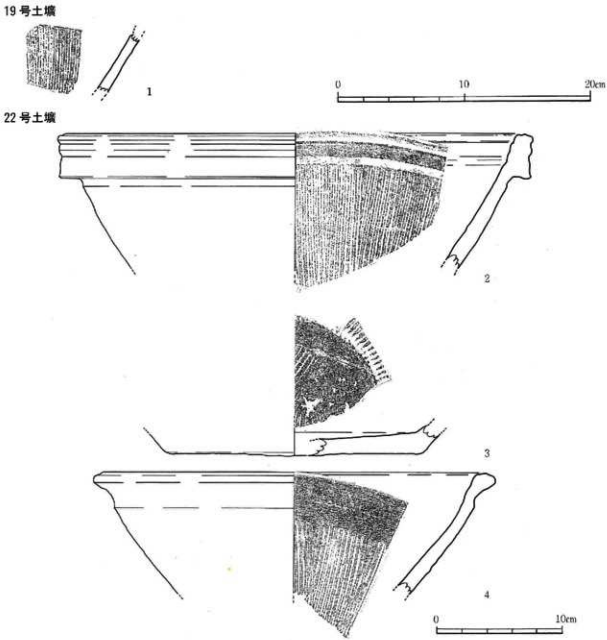
(9) 19号土壙（第37図1）

遺構は土壙群のほぼ中央に位置し、平面プランは1.2×1.2mのほぼ円形を呈する。

遺物は備前焼の擂り鉢の小破片が出土した。

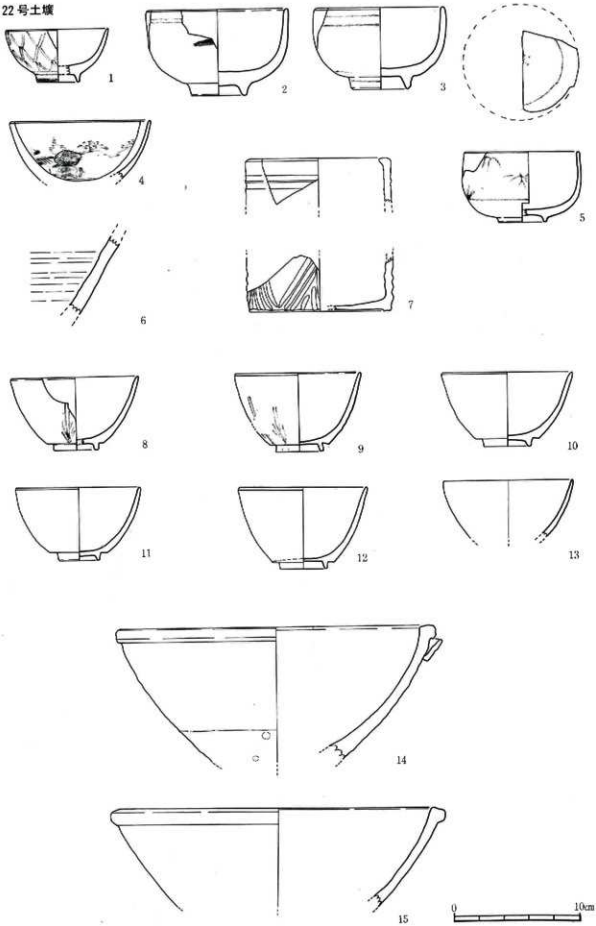
(10) 22号土壙（第37図2～4・第38・39図）

遺構は土壙群のほぼ中央19号土壙の南西に隣接している。土壙群の中では比較的規模が大きく、



第37図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群土遺物実測図（3）

22号土壙



第38図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群土遺物実測図（4）

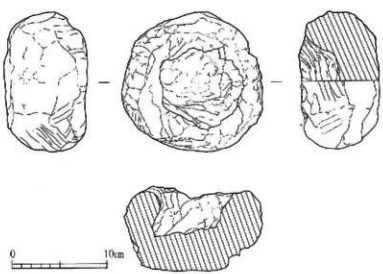
平面プランは長軸2.7m、短軸2.3mの不定楕円形を呈する。

遺物の出土は土壙群の中で一番多く、備前焼の擂り鉢や近世陶磁器などが一括廃棄されている。

第37図2～4は備前焼の擂り鉢である。2は口縁部片で復元口径36.1cm、3は底部片で底径19.6cm、4は口縁部片で復元口径30.1cmを測る。

第38図1は17世紀後半の肥前焼きの小碗で、口径8.2cm、器高4.2cm、底径3.4cmを測る。外面に二重網目文を施す。2は口径11.4cm、器高6.8cm、底径4.45cmを測る。3は口径10.6cm、器高6.5cm、底径4.8cmを測る。4は復元口径11.2cmを測り、外面に山水を描く。5は染付碗で復元口径9.4cm、器高5.55cm、底径3.9cmを測る。外面に松竹梅、内面に五弁花崩れを描く。6は陶器の小破片である。7は復元口径11.6cm、底径11.2cmを測る。8，9は共に外面に若松を描く、陶器碗である。8は復元口径10.2cm、器高5.75cm、底径3.4cm、9は口径10.0cm、器高6.25cm、底径3.8cmを測る。10～12は信楽系の陶器碗で、底部は露胎である。10は復元口径10.4cm、器高5.8cm、底径3.8cm、11は復元口径10.0cm、器高5.7cm、底径3.3cm、12は復元口径10.2cm、器高6.4cm、底径3.8cmを測る。13は関西系陶器碗で復元口径5.2cm、内外面ともに白色釉がかかる。14は復元口径23.6cmで胴部過半から底部にかけて露胎となる。15は復元口径24.4cmである。

第39図は凝灰岩製の使途不明遺物である。重さ1kg、直径14.5cmのほぼ円形を呈し、高さ8.4cmを測る。中央部に径9.5～10.5cm、深さ4cm強の掘り込みがある。



第39図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅰ区土壙群22号土壙出土石造品実測図

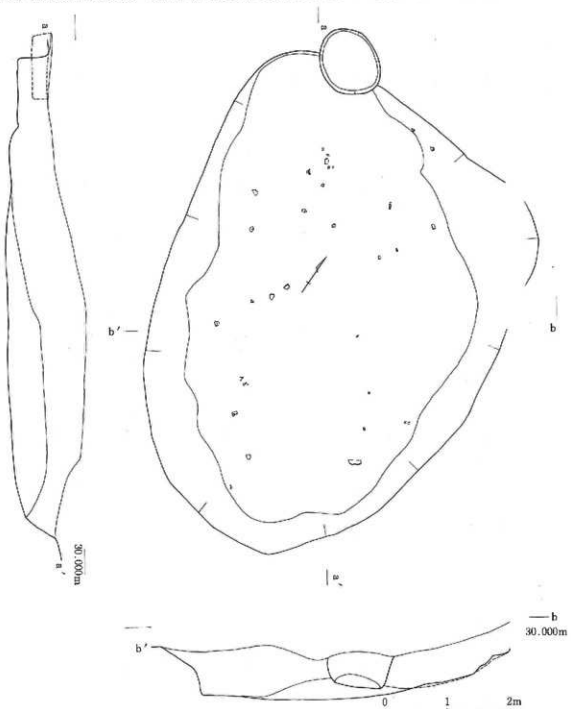
2．Ⅱ区１号大型土壙

(1) 遺構（第40図）

遺構はⅡ区の中央より西側に位置する。長軸8.1m、短軸6.0m、深さ1.3mを測る、平面不定形長楕円形を呈する大型の土壙である。大規模な掘削の後、埋められたと考えられる。遺物は京都系土師器や在地系のロクロ成形による土師器、土師質の擂り鉢、陶磁器などが出土している

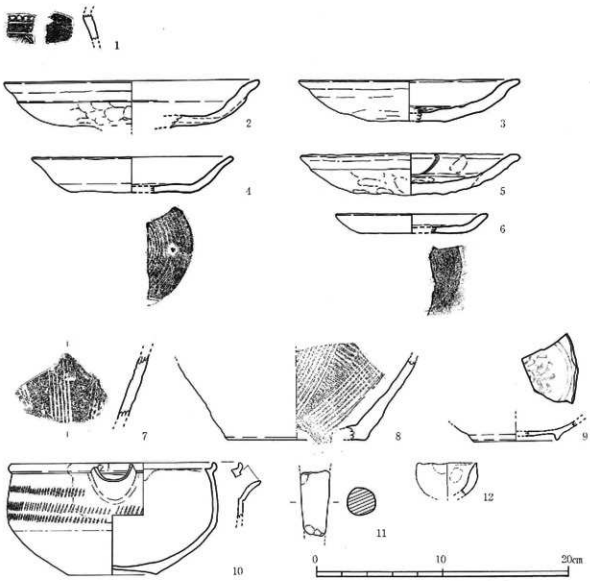
(2) 遺物（第41図）

１は縄文時代後期の西平式土器の破片である。胎土には微細な砂粒と角閃石・長石を含み、色調は暗茶褐色を呈する。外面には縄文が施されている。２～４は京都系土師器である。２は復元口径20.2cm、器高3.6cmを測る。色調は内外面ともに黄褐色である。３は復元口径17.6cm、器高3.1cmを



第40図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区１号大型土壙実測図

測る。色調は内外面ともに黄橙色である。4は口径17.2cm、器高3.4cmを測る。色調は外面灰黄褐色、内面暗灰黄色である。内面になで上げの跡が見られる。5～6は底部糸切り離しの土師器坏である。5は復元口径15.8cm、底径9.8cm、器高2.8cmである。色調は黄橙色である。6は復元口径12.0cm、底径8.0cm、器高1.5cmである。色調は黄橙色である。7～8は土師質の擂り鉢で、7は胴部破片、8は底部破片で、底径10.8cmである。9は染付皿で、底径6.8cmで見込みに花を描く。10は当平鍋である。口径16.6cm、器高8.8cm、底径7.0cmを測る。外面上半分に3段にわたる飛びガンナが施され、ほぼ胴部下半に煤が付着している。11は土鍋の脚である。色調は淡橙褐色である。12は手づくね成形によるミニチュアの土師質土器である。復元口径は4.6cm、器高は3cm強である。内外面とも指押さえによる調整が見られる。



第41図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区1号大型土壙出土遺物実測図

3．Ⅲ区１号土壙

(1) 遺構（第42図）

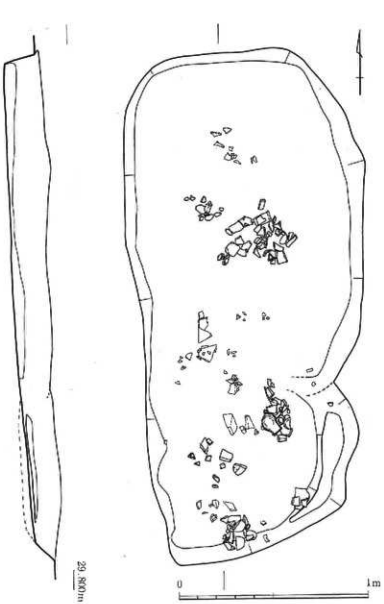
遺構はⅢ区の南に位置する。規模は5.3×2.4m、深さ40cmを測る。検出時には確認できなかったが遺物の出土状況や遺構の壁の状態から二つの遺構が切り合っていることが実測段階で判明した。しかしながら切り合い関係を明確に判断することができず、ここでは一つの遺構として報告する。

遺物は主に２箇所に集中して出土した。北側の遺物集中部と、南側の集中部では遺物の組成には大きな変化が見られない。

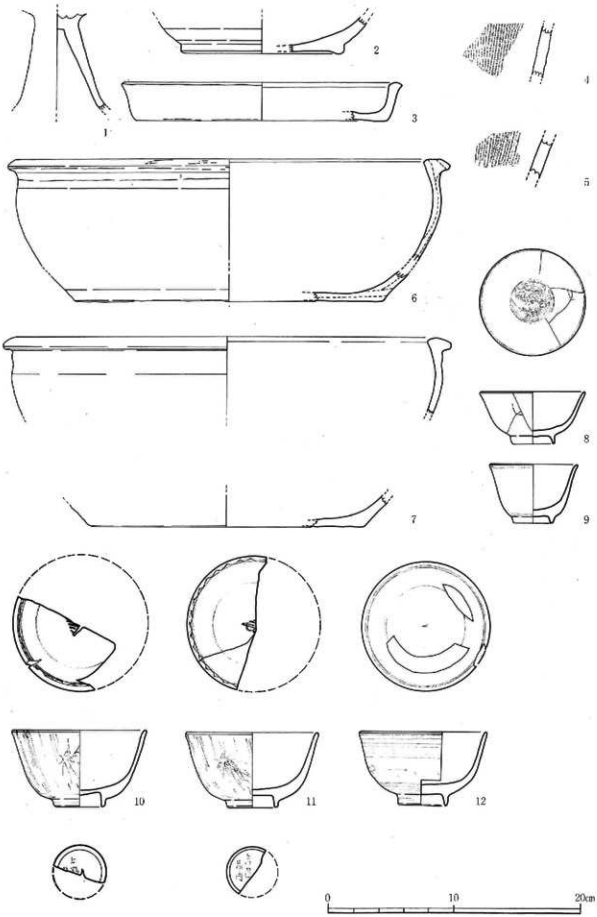
(2) 遺物（第43・44図）

第43図の１は高坏の脚部である。胎土に石英・長石・角閃石を含み、器面調整は内外面ともナデ調整である。色調は内外面ともににぶい橙色である。２は陶器で鉢と思われるものの底部である。底径12.8cmを測り、色調は外面浅黄色、内面灰白色である。３はロクロ成形の土師質土器である。復元口径22.0cm、器高3.0cm、底径20.0cmを測る。４～５は備前系擂り鉢の胴部片である。６は瓦質の鍋である。復元口径35.0cm、底径24.4cmを測る。７は瓦質の火鉢である。復元口径33.3cm、器高6.0cm、底径21.5cmを測る。８は瀬戸美濃系の染付小碗である。口径8.4cm、器高4.15cm、底径3.4cmを測る。口縁部端は口銹で見込に風風がスタンプされている。焼継されている。1850～1870年代に作られたと考えられている。９は染付小碗で復元口径7.0cm、器高4.65cm、底径3.2cmを測る。10～12は染付碗である。10は復元口径10.6cm、器高6.05cm、底径4.2cmを測る。11は復元口径10.6cm、器高5.95cm、底径4.0cmを測る。10・11ともに外面に竹笹、内面は輪つなぎ、見込に寿崩しの文様を持ち、高台内には「うえのむらとうない」と読める焼継文字が見られる（10は「上の色藤内」、11は「上野□□(藤)□」）。12は口径10.2cm、器高5.9cm、底径3.95cmを測る。外面に花唐草を描く。

第44図の１は染付皿で、復元口径13.4cm、器高3.9cm、底径7.4cmを測る。外面に折草、内面見込部分に鞭を描く。また高台内は段を持ち、内側は施釉されているが、外側は蛇の目釉剥ぎである。２は陶器の壺である。口径12.25cm、返

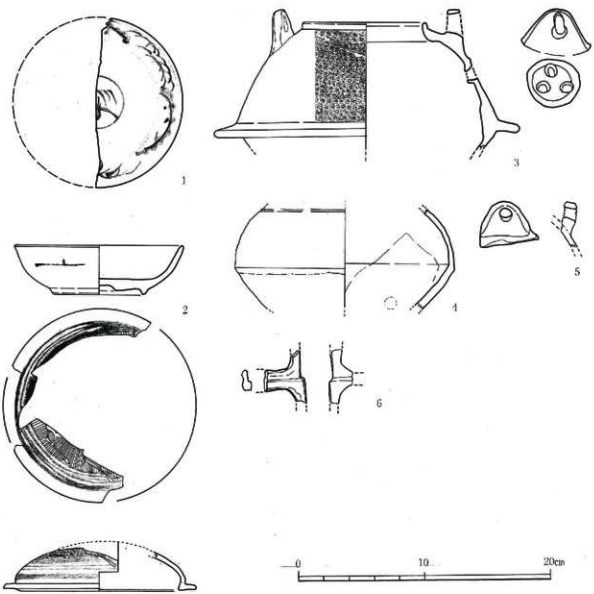


第42図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区１号土壙実測図



第 43 図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区 1 号土壙遺物実測図（1）

り径15.3cm、器高3.1cm以上を測る。イッチン掛けによる文様が施されている。3は瓦質の茶釜である口径9.8cm、最大径14.2cmを測る。器高は胴部過半が欠損しているため定かではないが10.3cmが残存している。外面は型押し成形による菊花文が施され、煤が付着している。胎土は灰白色で、色調は外面暗灰色、内面灰色である。4は陶器で上瓶か雪平鍋であろう。外面上部に施釉されており、下部は露胎である。胴部7.9cmが残存。5は茶釜もしくは土瓶の耳である。6は陶器で茶色の釉がかかる。器種は小破片のため特定できないが向付などの一部などと考えられる。



第44図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区1号土壙出土遺物実測図（2）

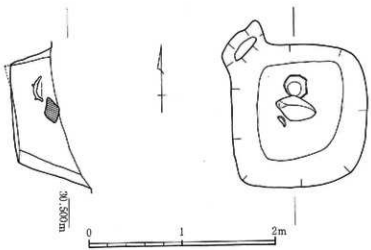
4．Ⅱ区拡張区１号土壙

(1) 遺構（第45図）

遺構はⅡ区拡張部の中央部南側の壁際に位置する。平面プランは隅丸方形を呈する。規模は70×70cm、深さ30～40cmを測る。遺構中央やや北寄りに約40cm大の礫があり、その下に口縁部を意図的に打ち欠かれた白磁碗が伏かれている。

(2) 遺物（第46図）

第46図1は12世紀代の中国白磁で口縁部は意図的に打ち欠かれている。底径は7.55cmである。高台から高台内を除き、内外面とも灰白釉で施釉されている。また内面の見込みに近い部分と外面の高台に近い部分に沈線を持つ。



第45図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区１号土壙実測図

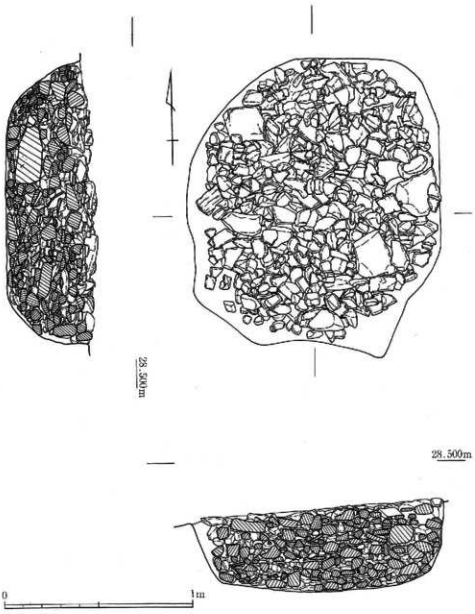
第46図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区１号土壙出土遺物実測図

5．Ⅲ区集石土壙

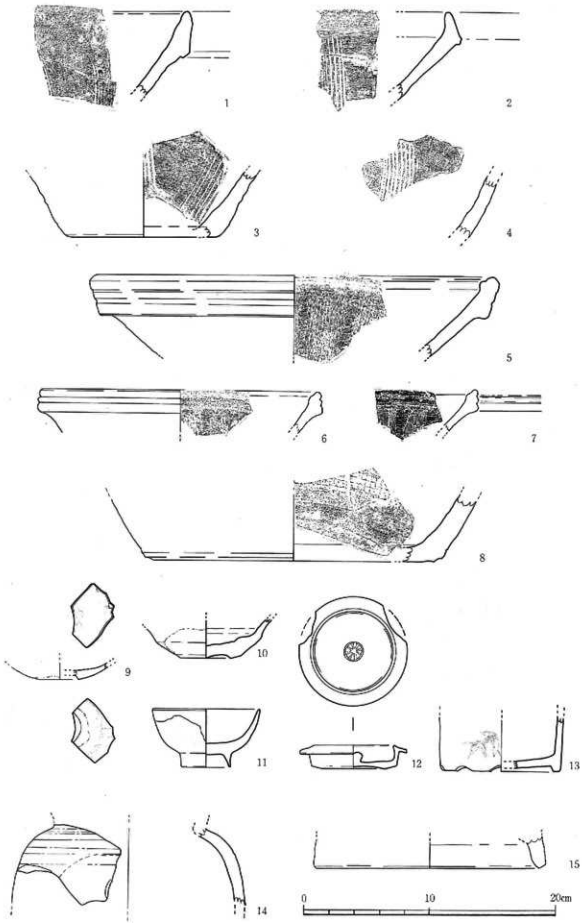
(1) 遺構（第47・49図）

集石土壙は、Ⅲ区の南西部で検出された。土壙の規模は、検出面で南北135cm、東西もほぼ135cmの円形に近い平面観を見せる。検出面から約50cmで、平坦な底面に達し、その規模は、南北110cm、東西105cmの隅丸方形に近い形状をしている。

土壙内からは、大小さまざまな礫が隙間なく、充填された状態で検出された。石の種類は、阿蘇溶結凝灰岩・安山岩・チャートなど各種類が見られる。また、これらの礫に混じって、遺物が出土している。その時期と種類は。縄文土器・弥生土器・土師器をはじめ、中世・近世の陶器・磁器であった。すなわち、野村台遺跡飛車丸地区で出土した、各時期の遺物が含まれている。このため、この遺構の掘られた時期は、近世と言える。



第47図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区集石土壙実測図



第48図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区集石土壙出土遺物実測図

(2) 遺物（第48図）

第48図に図示した資料は、出土した中世・近世の陶器・磁器に限り報告する。

1は、備前焼の擂鉢である。口縁部の断面は二等辺三角形じょうになる。内面には擂り目があり、外面は横撫でである。15世紀後半代と考える。2も、備前焼の擂鉢である。内面の擂り目は放射状に付けられ、外面は横撫でである。口縁部は断面二角形で、15世紀後半代と推定される。3は、底径12.1cmの擂鉢で、間隔を置いて、放射状の擂り目が付けられている。4は1～3の擂鉢と同類と考える。

5は、擂鉢で、内面に約1cm間隔で、放射状の擂り目が付けられている。口径は、31.1cmで、外面には2条の平行沈線が巡る。6は、備前焼の擂鉢で、内面には放射状に擂り目がある。口径21.7cmで、口縁部外面には2条の平行沈線が巡る。7は、備前焼の擂鉢である。内面には、約1cmの間隔で13本の擂り目が放射状に入れられている。口縁部外面には2本の平行沈線が巡る。色調は暗茶褐色で、焼成は良い。6と同一個体の可能性が強い。

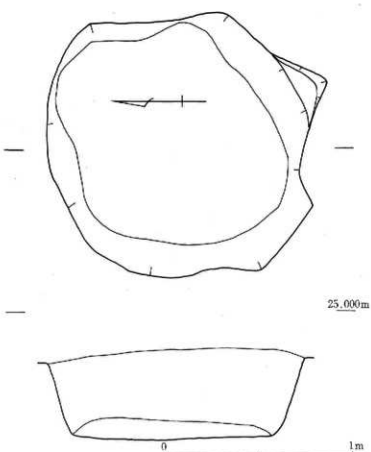
8は、底径22.1cmの甕の底部で、外面は横撫でであるが、内面には格子目叩きの跡が残る。

9は、碁笥底の皿である。内面は花弁、外面は芭蕉葉文がある。底径は3.2cmで、16世紀中頃と考える。10は、内面に胎土目のある唐津系陶器皿である。灰釉で、底部周辺は露胎となっている。16世紀末から17世紀初頭と考える。11は、全面施釉の染付け小碗である。口径8.6cm、器高4.65cm、底径4.0cmである。12は、ほぼ完形品の陶器の蓋である。外面は施釉されているが、内面は露胎である。土瓶の蓋であろうか。

13の外面は笹模様の染付けのある陶器の鉢である。内面と底部は回転撫で仕上げで、底径は9.5cmである。14は、暗褐色の施釉陶器で、露胎の色調は灰褐色である。胎土に砂粒は少なく、ロクロ仕上げである。15は、底径17.4cmの高台部分である。畳付部まで含め、施釉されている。

第58図7は、陶胎染付けの碗である。畳付の部分以外は施釉されている。焼成は良好で、胎土は灰黄色である。18世紀前半と考えられる。

以上の遺物から、この遺構は、18世紀前半と考える。

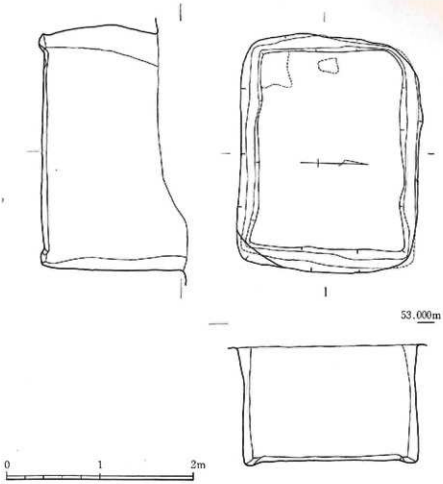


第49図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅲ区集石土壙完掘状況実測図

6．Ⅱ区4号土壙(第50図)

遺構はⅡ区の東側の境際に位置する。平面プランは長方形で規模は2.4×2.0m、深さ2.5～3mを測る。床の周りに幅約10cmの溝が切られており、北西部分には梁床と思われる粘土を充填した痕が見られる。

遺物は小破片が多く出土したが、備前焼の擂り鉢の胴部が出土しており、中世中頃の遺構と推定する。

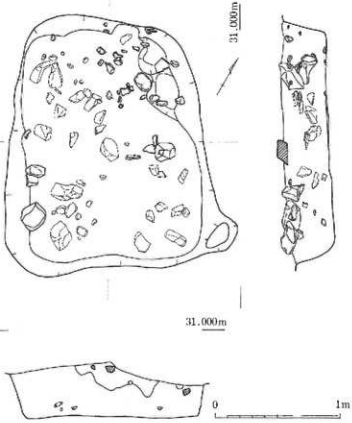


第50図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区4号土壙実測図

7．Ⅱ区拡張区1号土壙(第51図)

遺構はⅡ区からすぐ東に拡張区へ入ったところに位置する。平面プランは長辺2.1m、短辺1.1mの不定形の長方形を呈し、深さ38cmを測る。

遺構内からは多数の角礫が流れ込んだ状態で出土した。

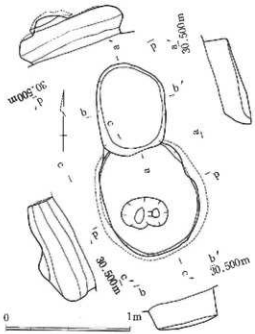


第51図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区1号土壙実測図

8．Ⅱ区袋状竪穴遺構（第52図）

遺構はⅡ区の北に位置する。二つの土壙が切り合っており、袋状の土壙は西側の土壙に切られている。

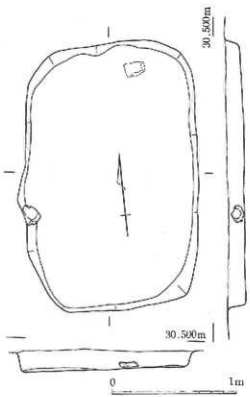
西側の土壙は平面楕円形のプランを呈し、長軸約80cm、短軸約60cmで深さ約25cmを測る。袋状の遺構の平面プランは楕円形を呈し、長軸は推定で約1.0m、短軸約80cmを測り、深さは約30cmを測る。また、検出面より深さ10cmのところで長軸最大径は推定1.05m、短軸最大径90センチを測る。床面に深さ約15cm～20cmの掘り込みがある。



第52図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区袋状竪穴実測図

9．Ⅲ区1号土壙（第53図）

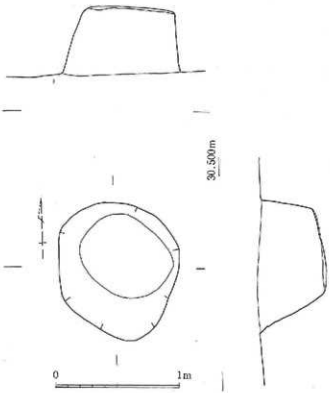
遺構はⅡ区のほぼ中央北寄りに位置し、平面プランは長方形を呈し、規模は2.15×1.4m、深さ15cmを測る覆土には炭化物や焼土のブロックが多く含まれている。遺物は覆土中から出土しているが、小破片ばかりである。



第53図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区1号土壙実測図

10. Ⅱ区拡張区３号土壙（第54図）

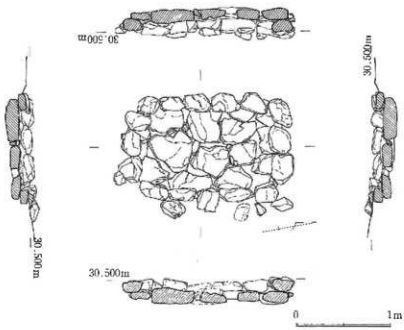
遺構はⅡ区の拡張区、住居跡の東に位置し、平面プランは1.1m×95cmの楕円形を呈する。深さは55cmを測る。遺物は小破片ばかりが出土した。



第54図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区拡張区３号土壙実測図

11. 石組遺構（第55図）

遺構はⅡ区の中央やや北よりⅡ区１号土壙墓の南側に位置する。規模は1.9m×1.4m、深さ30cmを測る。床面には平らなチャートを全面に敷き詰め、周囲の壁も最低２段のチャートを組んで壁面を形成する。ほとんどの石は熱による赤変が見られる。遺物は小破片のみの出土で、明確な時期は確定できないが遺構の形態から中世段階におけるかと思われる。



第55図　野村台遺跡飛車丸地区Ⅱ区石組遺構実測図

第６節　野村台遺跡飛車丸地区各地区出土遺物

１．弥生・古墳時代

(1)　土器（第56図）

第56図に図示した資料は、野村台遺跡飛車丸地区の遺構検出中、または明らかに新しい遺構から他の遺物に混在して出土したものである。ただ、１と５は、Ⅱ区拡張区で検出した円形の貯蔵穴出土土器で、すでにその項で報告している。

２は、Ⅲ区出土の甕形土器の口縁部である。口縁部は、端部に沿って断面三角形の突帯を巡らせ形成している。さらに、その下位に同じく、断面三角形の突帯を巡らせ、その頂部には、細かい刻み目を加えている。器面調整は、内外面とも横撫でである。色調は黄褐色で、胎土に砂粒を含み、焼成は良くない。

３・４は、口縁部の断面が「コ」の字になる甕形土器である。口縁部下位に１条の断面三角形の突帯が巡り、その頂部には連続した刻み目が加えられる。３には、この施文作業の際、口縁外端部の一部にも刻み目がおよんでいる。３の器面調整は、口縁部から外面にかけては横撫でであるが、内面は斜め方向のヘラ磨きである。色調は橙褐色で、胎土に角閃石を含み、焼成も良い。４の器面調整は、口縁部から突帯部にかけて、横方向の撫でであるが、内面は斜め方向の刷毛目、突帯部下位は縦方向の刷毛目である。色調は茶褐色で、胎土に角閃石を含み、焼成は良好である。突帯と口縁部の間にススが付着している。

６は、復元口径19.6cmの甕形土器である。器形は３・４と同様平底から外傾して直線的に立ち上がる。口縁部は外端部が肥厚し、その下位には断面三角形の突帯が巡り、刻み目が加えられている。器面調整は、内面から口縁部の刻み目突帯周辺までは撫で仕上げであるが、それ以外は縦方向の刷毛目である。色調は暗茶褐色で、胎土には角閃石と石英が含まれる。焼成は良好である。胴部外面にはススが付着している。

７は、Ⅲ区集石上壙出土の甕形土器である。近世の陶磁器と一緒に出土した。頸部から口縁部を欠くが、胴部は球状に張り、底部はやや尖り気味の丸底である。器面調整は、内面の上位は刷毛目の後撫で、下位は指圧痕や刷毛目工具による押さえ痕が認められる。外面は、粗い刷毛目が密に全面調整されている。器壁を観察すると、幅約３cmの粘土帯の積み上げ痕が認められる。色調は、橙褐色で、胎土に角閃石・赤色粒が含まれ、焼成は良好である。

(2)　石器（第60図）

第56図の土器と同様、遺構検出中や、明らかに新しい遺構から出土した石器を第60図に図示し、報告する。

１は、Ⅱ区から出土した磨石である。長さ9.2cm、幅7.1cm、厚さ4.7cmの掌中に入る程度の大きさの安山岩の円礫を素材にしている。円礫の周辺は、全面に渡り、敲打痕が認められるが、使用のためか、整形のためかは不明である。円礫の両面に使用のための擦加痕が観察できる。

２もⅡ区から出土した磨石である。一部を欠くが、これも掌中に入る程度の大きさの安山岩を素材にしている。残された長さは、8.2cm、幅7.2cm、厚さ3.6cmである。使用面は１面のみである。

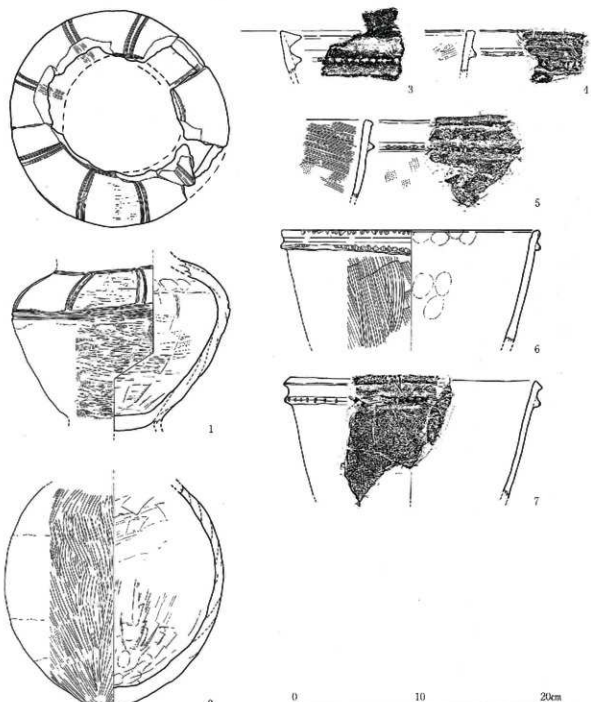
１・２のような磨石は、縄文時代早期から古墳時代前期まで、あまり形態を変えずに存続するため、縄文早期か、弥生前・中期の遺物が出土するこの地区では磨石の所属する時期は不明である。

３は、１区の土壙群の11号土壙出土の石器である。長さ21.4cm、最大幅3.7cm、厚さ2.1cmの緑色片岩製である。図の下位の側縁に敲打痕が残り、何らかに使用はされたものと推測できる。時期は不明である。

2．中　世（第57図）

第57図には中世に属すると考えられる遺物を図示した。

1は、口縁部がいびつで楕円形に近い。このため口径は、12.3～13.3cmで、器高は、3.7cm、底径は、9.8～10.5cmである。底部から口縁部にかけて、先端が尖るようになっている。器面調整は、ロクロ成形のため、全面横撫でで、底は糸切りが見られる。色調は黄褐色で、砂粒は少なく角閃石を含み、焼成は良好である。



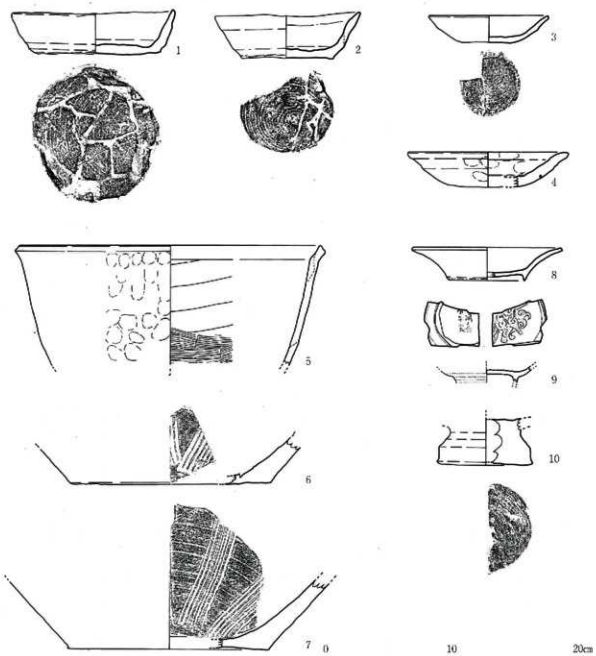
第56図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図（1）

2は、復元口径が、11.4cmで、器高は、3.3cm,底径は、7.2cmである。底部から口縁部にかけて、斜めに立上げ、先端が尖るようになっている。器面調整は、ロクロ成形のため、全面横撫でで、底は糸切りが見られる。色調は黄褐色で、砂粒は少なく石英・角閃石を含み、焼成は良好である。

3は径9.6cm、器高2.1cm、底径3.8cmの糸切り底の土師器で、色調は茶褐色、胎土に石英・角閃石を含み、焼成は良好である。

4は、非ロクロ系の京都系土師器である。法量は、口径は12.4cm、器高は2.7cmである。器面調整は横撫でと指圧痕が残り、特に口縁部外面は強い横撫でで、口縁部の外反を強調している。色調は淡黄褐色で、胎土に角閃石,・斜長石を含み、焼成は良好である。

5は、Ⅰ区出土の資料で、復元口径は23.6cmを測る。口縁部が屈曲し外傾する土鍋である。器面調整は、口縁部周辺は横撫でであるが、外面には指圧痕が多数残り、内面は上位が弱い指圧痕の痕



第57図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図（2）

撫でで、下位は刷毛目が残る。色調は、暗褐色で、胎土に角閃石・斜長石・金色の雲母を含む。焼成は良好で、外面にはススが付着している。

6・7は、擂鉢の底部である。2点とも、ロクロ成形のため器面は横撫でで、その後、内面に放射状の擂り目が加えられている。7の底径は15.7cmである。

8は、口径12.0cm、底径16.0cm、器高2.6cmの白磁皿である。全面施釉されているが、畳付部は釉の掻き取りが見られる。

9は、青花皿である。内面の見込み部に花文、底部に「大明嘉靖年製」が見える。

10は、底径8.4cm、器高約3.6cmで、上面の鍔状の張り出し部が欠けている。ロクロ成形で、底部には糸切り痕が残る。色調は灰褐色で、胎土に斜長石・赤色粒を含み、焼成は良好である。燭台と推測される。

3．近　世

(1)　陶磁器（第58・59図）

近世の陶磁器は第58図に図示し、報告する。

第58図1は、内面は灰色の施釉であるが、外面は無釉である。底部は糸切り底で、胎土は黄褐色である。唐津系陶器の小杯で、17世紀前半と考える。2は、高台部径約4.9cmで、見込みには花文様が見られる。16世紀後半の景徳鎮窯の鐛頭心タイプである。畳付部の釉は掻き取られている。3は、底径9.8cmの褐釉陶器である。胎土は灰色で、底面以外は褐色の施釉であるが、器面は光沢がない。4は、口径11.4cm、器高5.8cm、底径4.6cmの見込み部に昆虫、外面に笹の染付け碗である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。

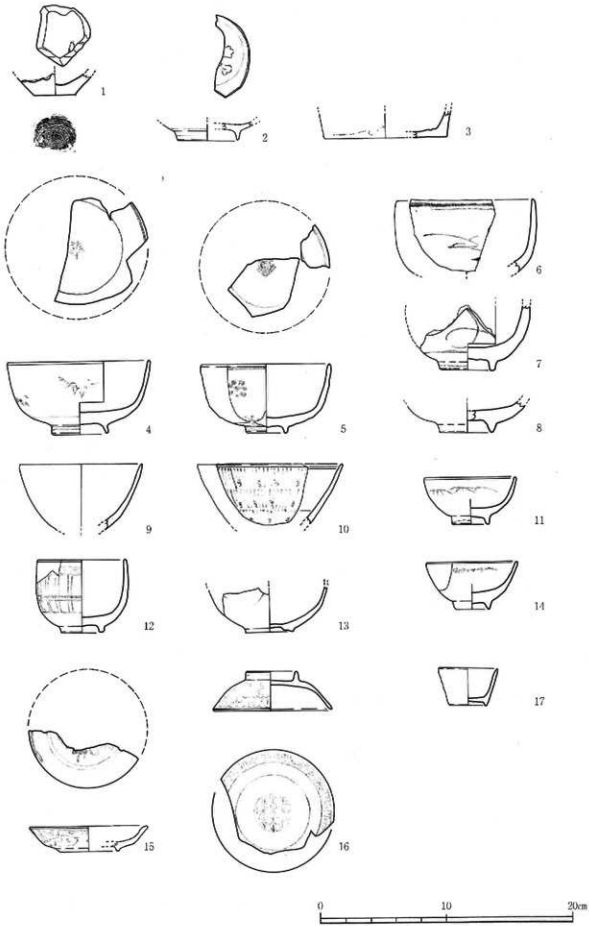
5は、口径10.5cm、器高5.5cm、底径3.1cmの見込み部に梅花文、外面に五弁花の染付け碗である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。

6は、復元口径10.8cmで、全面を明灰色の釉が施釉されている。胎土は灰黄褐色で、18世紀前半の肥前系陶胎染付碗と考える。7も同様で底径4.5cmの陶胎染付碗である。8は、底径4.2cmの陶胎染付け碗である。全面に淡灰色の釉が施釉されるが、畳付の部分は無釉である。胎土は灰黄褐色で、18世紀前半と考える。9は、口径9.6cmで、全面淡黄白色の釉が施釉されている。18世紀前半の関西系陶器の可能性が強い。10は、口径11.4cmで、外面に暦文、内面は口縁部に平行に2条、底部近くに1条の文様が描かれている。18世紀後半の肥前磁器染付と考える。

11は、口径7.4cm、器高3.7cm、底径3.0cmの笹文様の染付け小碗である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。紅皿の可能性がある。12は、口径7.4cm、器高5.8cm、底径3.5cmの格子目の染付け碗である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。13は、底径3.8cmの碗で、内外面とも透明釉がかけられているが、高台から内側は霧胎である。外面の文様は暗オリーブ色である。18世紀後半の信楽系陶器の可能性が強い。14は、口径7.3cm、器高3.7cm、底径2.7cmの笹文様の染付け小碗である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。紅皿の可能性がある。11と同類である。15は、口径9.4cm、器高2.0cm、底径4.8cmで、外面唐草、内面花唐草の染付け小皿である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。

16は、口径9.5cm、器高3.2cm、底径4.2cmで、外面・内面雷文崩れの染付け蓋である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。17は、口径4.6cm、器高2.9cm、底径2.8cmの白磁の猪口である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。

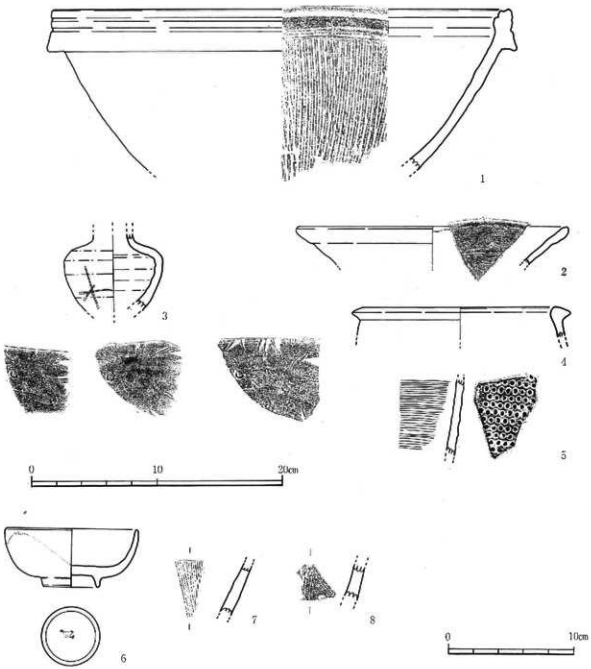
第59図1は、口径36cmの備前焼の擂鉢である。口縁部は肥厚し、外面に2条の沈線が巡る。内面は全面密な擂り目が入る。2は、口径22cmの擂鉢である。口縁部周辺は横撫でで、内面は口縁端部から間隔をおいて、擂り目がある。3は、胴部最大径7.8cmの備前系陶器の小壺である。色調は暗茶



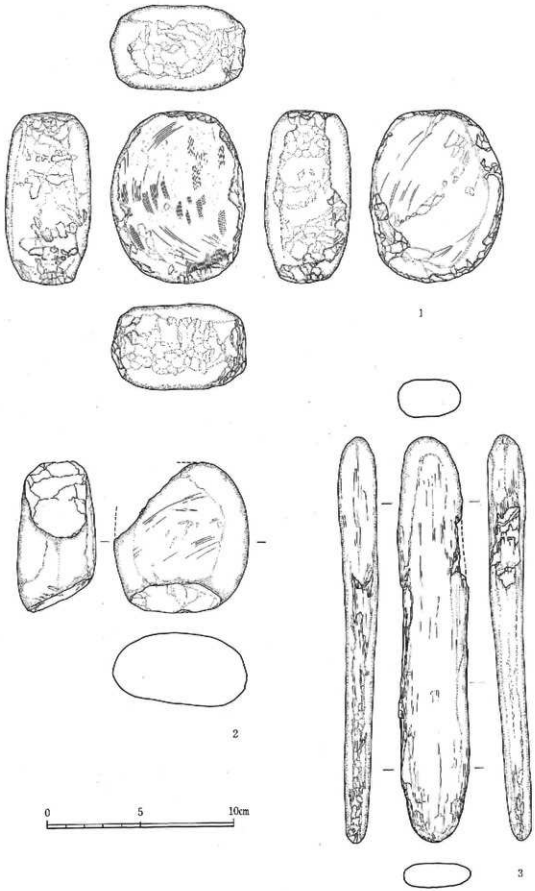
第58図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図（3）

褐色で、胎土に灰色・黒色粒を含む。肩部と内面に自然釉があり、胴部下位にヘラ記号も見られる。

4は、口径17.3cmの焼締め陶器の小鉢である。口縁部は外面を肥厚させ、暗赤褐色を呈する。5は、1区出土で、器面を円形の刺突文で埋めた瓦質土器である。内面は刷毛目調整で、色調は暗灰色で、砂粒は少なく、焼成は良好である。6は、口径10.6cm、器高4.7cm、底径4.6cmの染付け碗である。外面には梅樹、底面に大明年製崩れ銘がある18世紀後半の肥前系のくらわんか碗である。全面に施釉されるが、畳付の部分は無釉である。7・8は、擂鉢の破片である。



第59図　野村台遺跡飛車丸地区出土遺物実測図（4）

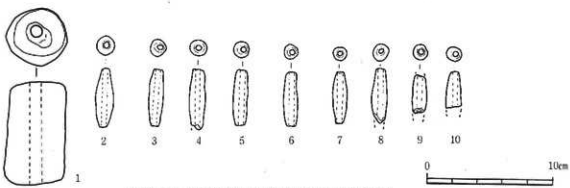


第60図　野村台遺跡飛車丸地区出土石器実測図

(2) 土錘（第61図）

第61図は野村台遺跡飛車丸地区各遺構出土の土錘である。1は、長さ8.0cm、幅4.8cm、重さ171.0gで、穴の直径は1.0cmである。2・3・4・7・8・9・10はⅡ区1号大型土壙出土である。2は紡錘形の土錘で、長さ4.7cm、最大径1.4cm、重さ6.9gで、淡褐色をしている。3は、円筒形に近く、長さ4.5cm、最大径1.2cm、重さ6.5gで、橙褐色をしている。4は、やや紡錘形で、長さ4.7cm、最大径1.3cm、重さ6.3gの淡褐色である。5は、円筒形に近く、長さ4.4cm、最大径1.2cm、重さ6.3gの橙褐色である。6は、Ⅱ区1号土壙出土で、円筒形に近く、長さ4.3cm、最大径1.2cm、重さ5.6gの橙褐色である。

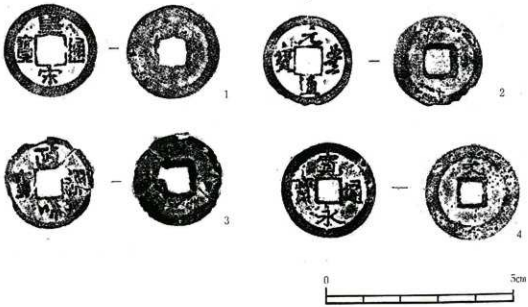
7は、紡錘形の土錘で、長さ4.2cm、最大径1.1cm、重さ4.2gで、淡橙褐色をしている8は、紡錘形の土錘であるが一部を欠く。長さ4.3cm以上、最大径1.3cm、重さ5.1g以上で、淡黄褐色をしている。9は、両端部を欠く。長さ3.0cm以上、最大径1.2cm、重さ4.1g以上で、淡黄褐色をしている。10は、端部を欠く。長さ3.3cm以上、最大径1.3cm、重さ4.1g以上で、橙褐色をしている。



第61図　野村台遺跡飛車丸地区出土土錘実測図

(3) 銅銭（第62図）

第62図に図示した銅銭は野村台遺跡飛車丸地区各遺構出土である。1は、Ⅱ区1号大型土壙出土で、径2.5cm、孔辺は1辺0.8cmの「皇宋通寶」である。2は、Ⅱ区1号土壙出土で、径2.4cm、孔辺は横0.65、縦0.7cmの「元豊通寶」である。3は、Ⅱ区2号大型土壙出土で、径2.4cm、孔辺は一辺0.7cmの「政和通寶」である。4は、Ⅰ区土壙群15号土壙出土で、径2.5cm、孔辺は横0.55、縦0.6cmの「寛永通寶」である。

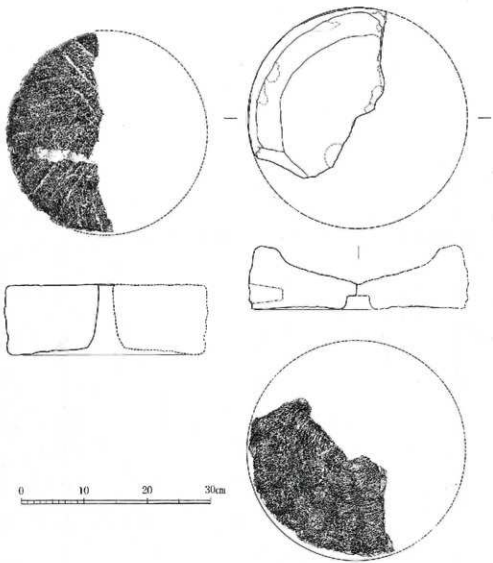


第62図　野村台遺跡飛車丸地区出土銅銭実測図

(4) 石臼（第63図）

1は、下臼で、磨り面の径は32.0cm、下面の径は30.0cm、厚さは11.0cmで、半分弱の遺存状態であるが、7kgの重量がある。磨り溝は4本単位で、硬質の凝灰岩を素材としている。

2は、上臼である。遺存状況は半分弱で、磨り面の直径34.6cm、最大厚10.0cmで、重量は4.3kgである。側面には、臼を廻すための把手を装着するための穴が穿かれている。素材は硬質の凝灰岩である。



第63図　野村台遺跡飛車丸地区出土石臼実測図

第３章　野村台遺跡田井ヶ迫地区の調査

第１節　調査の概要

１．立　地

野村台遺跡の主体は、標高約 30 数ｍの平坦部を持つ、独立性の強い阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする台地が占める。野村台遺跡田井ヶ迫地区は、この台地の南西部側斜面にあたる。この地区の前には、臼杵市と津久見市の南側境になる標高 536 ｍの鎮南山から北に流れる田井ヶ迫川の沖積作用で形成した谷底平野が広がる。この谷底平野は水田となっており、標高は約５ｍである。

２．遺構配置（第 64 図）

この地区には横穴墓の存在が知られているため、確認調査を実施した。その結果、台地の斜面に横穴墓が３基確認された。また、裾部の平坦部分では中世の廃棄土壙や被熱硬化した埋土を含む土壙が若干確認されたが、大部分が縄文から古墳にかけての包含層である。

第64図　野村台遺跡田井ヶ迫地区遺構配置図

第２節　古墳時代の調査

(1)　１号横穴墓（第 65 図）

前面に築かれた石垣により当初はその存在が、確認できなかった。石垣の前面で須恵器の坏や高坏等の一括遺物が出土し、横穴墓の存在が疑われた。そのため、人力により石垣の除去をしたところその裏から羨門が姿を現し、横穴墓の存在が明らかなものとなった。

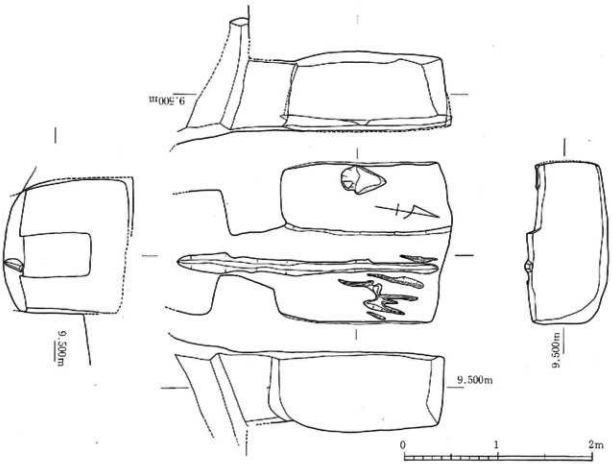
横穴部は既に開口しており、玄室内の遺物のから少なくとも中世の時期には開口していたと考えられる。

羨門部分は深さ５cmの額縁状の掘り込みを設け、その内側に高さ 70cm、幅 45cmの羨門が穿たれている。羨道は長さ 60cmで幅は玄門部分で 64cmとやや八の字状に開く。玄室の床面は 1.6 × 1.6 mのほぼ方形プランを呈し、天井までの高さは約 60cm～ 80cmを測る。

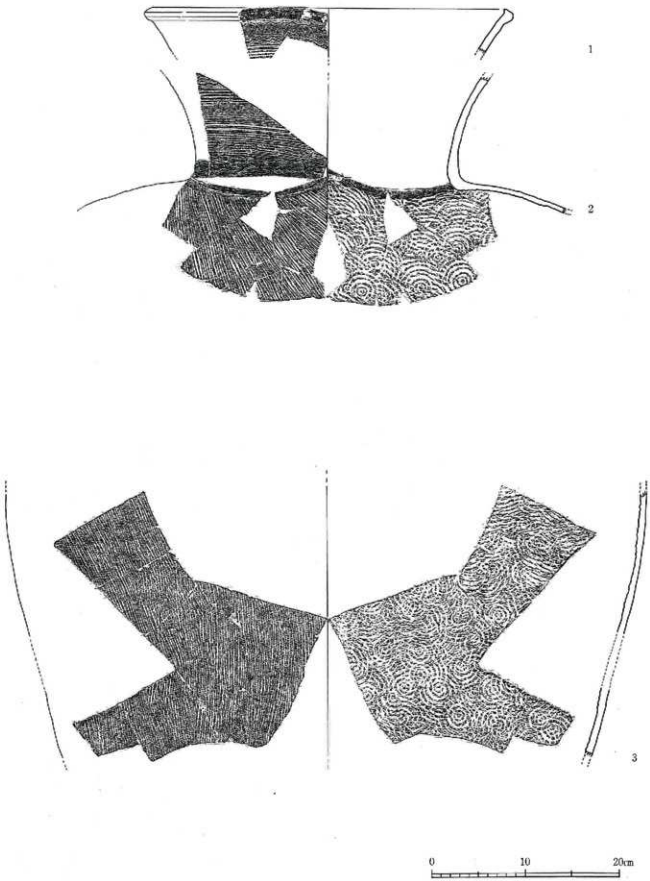
玄室西側に高さ約 20cmの屍床を持ち、中央やや東よりに排水溝を持つ。

玄室内部からは中世～近世の遺物が出土し、少なくとも中世段階で開口していたと考えられる。

前述の石垣全面出土の須恵器群は、墓前祭祀の跡とも考えられるが断言できるものではない。また、石垣除去時に数点の須恵器類を確認したが、明確に１号墓との関連を示せる出土状況ではなかった。そのため時期を明確に時期比定する資料はないが、石垣の裏込や１号周辺から出土した遺物と横穴墓の形態から、６世紀中頃～後半の時期に比定できる。



第 65 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区１号横穴墓実測図

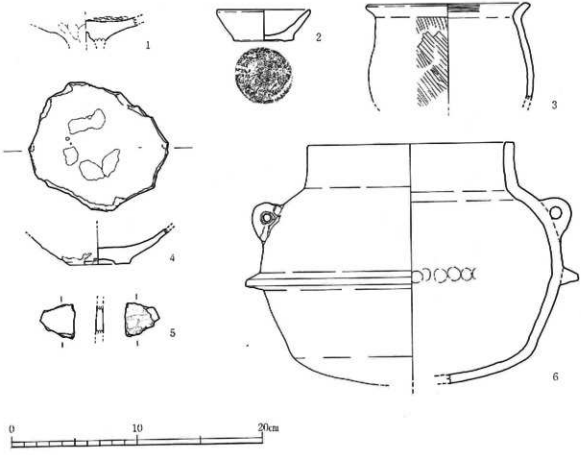


第66図　野村台遺跡田井ヶ迫地区1号横穴墓出土遺物実測図（1）

1号横穴出土遺物（第66・67図）

第66図の1は須恵器の大甕の口縁部片である。復元口径37.0cmで、胎土に白色粒を多く含み、微量の赤色酸化粒を含む。色調は内面灰褐色、外面暗茶褐色である。外面に波状紋を施し、内面は同心円状のアテ具痕が残る。2は須恵器の大甕の頸部から肩部の破片で、復元頸部径29.0cmである。色調は内面灰褐色、外面暗茶褐色である。外面に波状紋を施し、内面は同心円状のアテ具痕が残る。3は須恵器の大甕の破片で、復元最大胴部径68.0cmである。色調は外面茶褐色、内面明茶褐色である。外面はタタキ調整、内面は同心円状のアテ具痕が残る。

第67図の1は高坏の頸部片で、頸部径3.0cmである。胎土に角閃石をわずかに含み砂粒は少ない。色調は内外面とも明橙褐色である。外面に指圧痕が残り、内面はヘラミガキの調整を行っている。2は糸切り離しの土師器の坏である。口径7.25cm、器高2.5cm、底径4.6cmで胎土に石英・長石・角閃石・金雲母を含む。色調は外面にぶい黄橙色、内面橙色である。3は土師器の甕形土器で口径12.1cmである。胎土に石英・長石・角閃石を含み、色調は外面橙色・褐灰色、内面橙色・褐灰色である。口縁部外面と胴部内面はナデ調整、胴部外面と口縁部内面はハケ調整である。4は陶器の底部で、高台径4.25cmである。外面は胴部下半から高台内にかけて露胎になっており釉だれが見られる。内面は一部露胎の部分があり、見込み部分には目跡がみられる。5は呉須染付の破片である。6は瓦質の茶釜である。復元口径16.2cm、胴部最大径26.2cmで、胴部下半に煤が付着する。



第67図　野村台遺跡田井ヶ迫地区1号横穴墓出土遺物実測図（2）

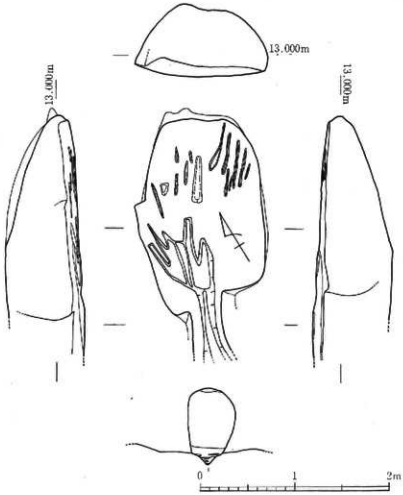
(2)　2号横穴墓（第68図）

2号横穴墓は1号横穴墓より南側の台地斜面中段に位置し、後世の石切のため羨門から羨道部の一部は削平を受けているがほぼ復元できる。羨門は復元すると、推定高約70cm、幅約50cmとなる。玄門部から羨門部に向かって幅24cm、長さ80cmの排水溝が残されている。玄室は不整隅丸長方形を呈し、長さ1.80m、幅1.26m、中央の高さ0.66mである。天井の形態はアーチ形である。

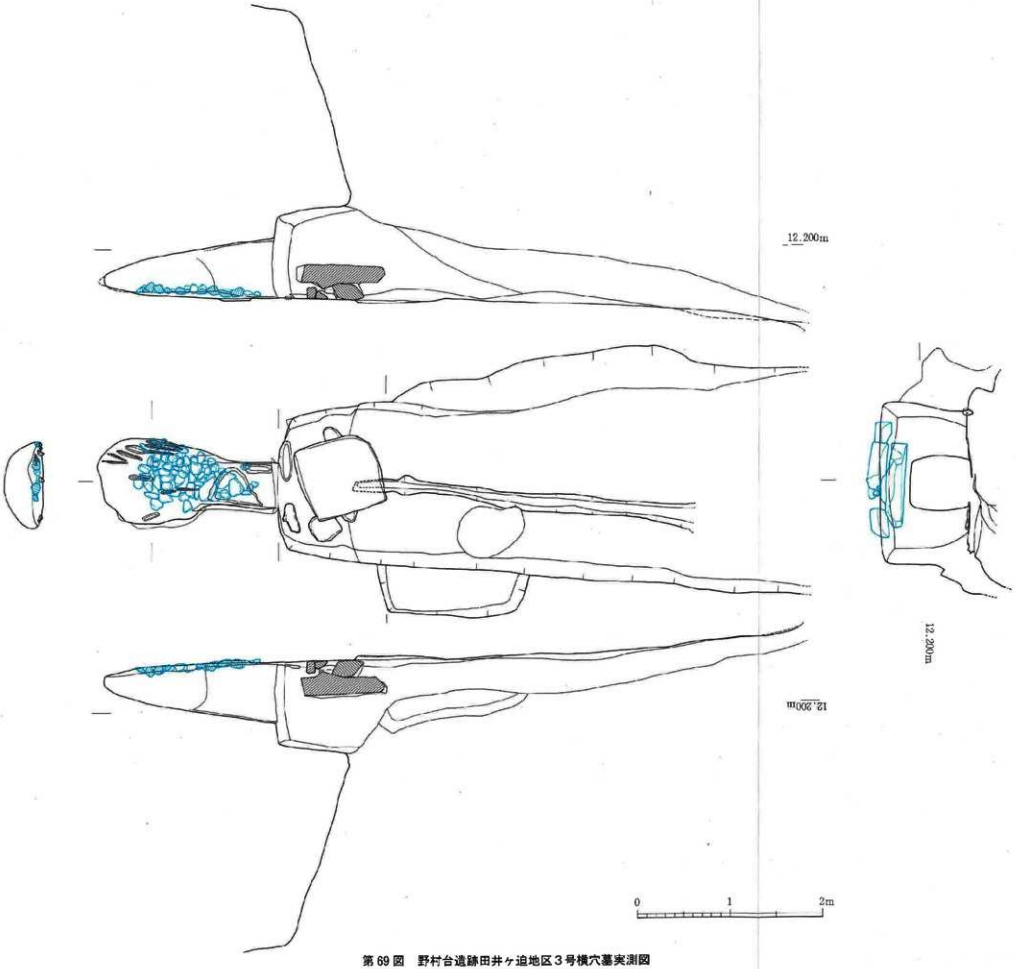
玄室内からの遺物の出土は無いが、横穴墓の形態から6世紀後半の時期を考える。

(3)　3号横穴墓（第69・70図）

3号横穴墓は、調査区の東側斜面の南側、中ほどに位置し、長い墓道を持つ。墓道は全長4.2m、幅は入り口で上部幅2.4m、羨門部で上部幅1.4m、底部幅1.2mを測る。また、中央には長さ3.5mにわたって排水溝が掘られている。羨門前面に地山を切り出した凝灰岩の一枚石の蓋石が残されていた。（第70図）この蓋石は羨門の前の前底部に倒された状態で検出した。この石蓋が床面からやや浮いた状態にあることから、被葬者の埋葬時期からやや時間がたってから盗掘の際に倒口され放置されたものと考えられる。風化により剥落している部分はあるが、形態は、約90×90cmのほぼ正方形で厚さ20cmあり、表側中央部分には長さ56cm、幅20cm、高さ9cmの短冊形の浮き彫りの陽刻が施されている。このような石蓋は大分市の木ノ上峠横穴墓群で2例、岡下横穴群群で1例確認されている。また、九州の横穴式石室の閉塞石に数例見られるほか、出雲地方の石棺式石室や横穴墓の閉塞石に数例見られる。



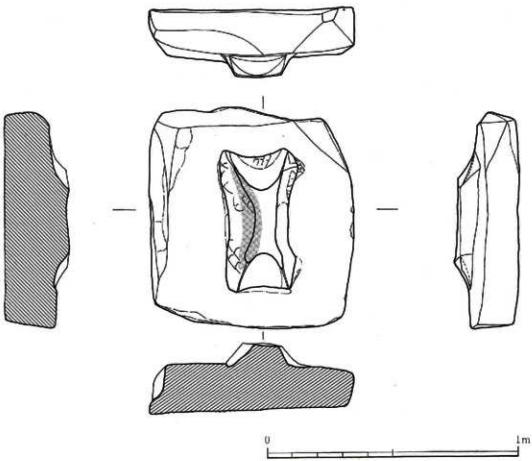
第68図　野村台遺跡田井ヶ迫地区2号横穴墓実測図（1/40）



第69図　野村台遺跡田井ヶ迫地区３号横穴墓実測図

羨門の規模は高さ60cm、幅56cmを測る。羨道は長さ80cm、玄門幅50cm、玄門高54cmを測る。玄室は不整胴張り隅丸長方形、長さ1.2m、中央幅0.9m、高さ0.5mで、床面は奥壁に向かって緩やかに立ち上がる。玄室床面には10cm前後の敷石が一部残されている。天井の形態はアーチ形である。

墓道・玄室内からの遺物の出土はないが、横穴墓の形態から6世紀末から7世紀前半の時期を考える。



第70図　野村台遺跡田井ヶ迫地区3号横穴墓閉塞石実測図

第3節　包含層出土遺物

1．縄文時代（第71図）

野村台遺跡田井ヶ迫地区の遺物包含層から出土した縄文土器は第71図に図示した。

1は、口縁部が波状になる深鉢形土器と考えられる。口縁部は肥厚し、沈線が1条巡る。器面調整は、口縁部周辺は横撫でであるが、それ以外は、横方向の巻貝条痕で平滑に仕上げている。色調は黄褐色で、胎土に角閃石と砂粒を含み、焼成は良好である。2は、口縁部がやや内湾する鉢形土器である。口縁部はやや肥厚し、縄文施文後に太い平行沈線を2条加えている。器面は、口縁部文様帯以外は横方向の巻貝条痕で平滑に仕上げている。色調は、黄褐色で、胎土に角閃石・斜長石・砂粒を含み、焼成は良好である。3は、口縁部が緩い波状になる鉢形土器である。口縁部はやや肥厚し、縄文施文後に太い沈線で同心円文と、その下位に入り組み文を加えている。器面は、口縁部文様帯以外は横方向の巻貝条痕で平滑に仕上げている。色調は、暗褐色で、胎土に角閃石・砂粒を含み、焼成は良好である。4は、胴部の資料である。文様は、縄文施文後に沈線が加えられている。器面調整は、内面が条痕である。色調は橙褐色で、胎土に角閃石・砂粒を含み、焼成は良好である。

5は、復元口径26.6cmの、底部から直線的に外傾する精製の鉢形土器である。外面は、縄文施文後に平行する2条の太い直線的な沈線を加え、それ以外の部分は、入念なヘラ磨きで仕上げている。内面も、上位は横方向、中位から下位にかけて斜めから縦方向のヘラ磨きで器面調整している。色調は暗褐色で、胎土に角閃石と砂粒を含み、焼成は良好である。6は、5と器面調整や色調、胎土・焼成が類似しており、同一個体の底部に近い資料の可能性が強い。文様の施文方法も、縄文施文後に平行する2条の太い沈線で入り組み文を描き、それ以外の部分は、入念なヘラ磨きで仕上げている。

7は、精製の無文の鉢形土器である。底部は上げ底状になり、口縁部にかけて直線的に外傾する。法量は、口径19.8cm、底径10.0cm、器高14.2cmで、器面調整は、口縁部周辺と底部外面は横撫でであるが、胴部の内外面は横方向のヘラ磨きである。色調は明褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石を含み、焼成は良好である。

2．弥生時代（第72・73図）

野村台遺跡田井ヶ迫地区の遺物包含層から出土した弥生土器は第72・73図に図示した。

第72図1・2は、口縁部の下位に2条の突帯が巡り、刻み目が加えられている甕形土器である。1は、内外面横方向の撫でで、色調は黄褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石を含み、焼成は良好である。2の色調は、橙褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石を含み、焼成は良好である。3・4は、1条の刻み目突帯が巡る甕形土器である。器面調整は、2点とも口縁部周辺から内面が撫で、刻目突帯下位は、縦方向の刷毛目で仕上げている。3の色調は橙褐色で、胎土には石英・斜長石を含み、焼成は良好である。4は、復元口径25.0cmで、色調は橙褐色、胎土に石英・斜長石・角閃石・赤色粒を含み、焼成は良好である。

5・6は、甕形土器の底部である。5は、底径7.1cmで、器面調整は外面が縦方向の刷毛目で、内面は撫でである。色調は橙褐色で、胎土に砂粒・角閃石・斜長石を含み、焼成は良好である。二次焼成を受けている。6は、底径6.4cmで、器面調整は外面が縦方向の刷毛目で、内面は剥落し、不明である。色調は淡灰褐色で、胎土に石英・角閃石を含み、焼成は良好である。

7・8は壺形土器の底部である。7は、底径8.6cmで、器面調整は、剥落が著しいため不明である。色調は淡黄褐色で、胎土に石英・斜長石を含み、焼成は良くない。8は、底径8.4cmで、器面調整は、内外面とも撫でである。色調は淡橙褐色で、胎土に斜長石を含み、焼成は良好である。9は、高坏

の一部である。脚部の径は6.2cmで、器面調整は、坏部の内面はヘラ磨きで、外面は撫で、脚部の内面は撫でで、外面は刷毛目が見られ、外面は赤色顔料が塗布されている。色調は淡黄褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石を含み、焼成は良好である。

10・11は複合口縁の帯形土器の資料である。2点とも頸部と胴部の境に突帯が巡り、「×」状の刻み目を加えている。器面調整は、内面が撫でで、外面は刷毛目である。10の色調は橙褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石・雲母を含み、焼成は良好である。11の色調は淡橙褐色で、胎土に石英・斜長石・赤色粒を含み、焼成は良好である。

12は、口径16.3cmの複合口縁の壷形土器である。器面は、外面に櫛描波状文が施文され、それ以外の部分は横方向の撫で仕上げである。色調は橙褐色、胎土に石英・斜長石・赤色粒を含み、焼成は良好である。13は、口径14.3cmの複合口縁の壷形土器である。器面は、外面に櫛描波状文と口縁外端部に刻み目が施文され、それ以外の部分は横方向の撫で仕上げである。色調は橙褐色、胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。14は、口径22.6cmの複合口縁の壷形土器である。器面は、外面に櫛描波状文が、口唇部には竹管刺突文が施文されている。それ以外の部分の器面調整は、内外面とも横方向の刷毛目調整である。色調は橙褐色で、胎土に石英・斜長石・角閃石を含み、焼成は良好である。

第73図1は、復元口径11.6cmの帯形土器である。本来は、2のような複合口縁の壷形土器であるが、口縁部が削られ擬似口縁となっている。肩部には断面三角形の突帯が3条巡る。器面調整は、全面撫で仕上げである。色調は橙褐色で、胎土には石英・斜長石・角閃石を含み、胎土は良好である。2は、復元口径16.3cmの壷形土器である。口縁部の外面は鋸歯状の文様が加えられている。また、肩部には断面三角形の突帯が4条巡り、最下段の突帯に接して連続刺突文が施文されている。さらに、胴部最大径部にも同様な突帯が見られる。器面調整は、全面撫で仕上げである。色調は橙褐色で、胎土には石英・斜長石・角閃石を含み、胎土は良好である。

3は、口縁部が外反する甕形土器である。器面調整は口縁部周辺から内面にかけては撫でで、外面の胴部は縦方向の刷毛目である。色調は暗褐色で、胎土には石英・斜長石を含み、焼成は良好である。4は、口縁部と底部を欠くが、胴部最大径が18.2cmの球状に張る甕形土器である。器面調整は、外面が撫でで、内面は撫でと削りにより仕上げられている。色調は橙褐色で、胎土には石英・斜長石・角閃石・雲母を含み、焼成は良好である。外面にはススが付着している。5は、口縁部を欠くが、胴部最大径が16.4cmの長胴の甕形土器である。口縁部は外反し、底部は小さな平底が残る。器面調整は、内外面ともに撫でで、仕上げられている。色調は淡橙褐色で、胎土には石英・斜長石・角閃石を含み、焼成は良好である。

6～11は底部の資料である。いずれも小さな平底が残る形態であるが、器種は8・11が壷形土器の可能性が強く、他は甕形土器と考える。6の器面調整は、外面が板状工具による撫で、内面は撫でで指圧痕が残る。色調は橙褐色で、胎土に石英・角閃石を含む。7は、底径4.0cmで、器面調整は、内外面とも撫でである。色調は橙褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石・雲母を含む。8は、底径約4.0cmで、器面調整は、内外面とも撫でである。色調は淡黄褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石・雲母を含む。9は、底径4.0cmで、器面調整は、内面は強い指押さえによる縦方向の撫でで、外面は刷毛目である。色調は橙褐色で、胎土に石英・角閃石を含む。10は、底径2.0cmで、器面調整は、内面は強い指押さえや撫でで、外面は刷毛目である。色調は橙褐色で、胎土に角閃石を含む。11丸底に近く、底径4.0cmである。器面調整は、内外面撫でである。色調は橙褐色で、胎土に石英・斜長石を含む。12は、脚部である。器面調整は、内外面撫でである。色調は橙褐色で、胎土に石英・斜長石・角閃石・雲母を含む。

以上の底部の焼成は良好である。

3．古墳時代（第74～76図）

第74図に図示した資料は、古墳時代の土師器と考える。

1は、坏部口径16.5cmの高坏である。坏部の外面下位には段が生じており、口縁端部は尖っている。内面には放射状のヘラ磨きによる暗文が見られる。色調は明褐色で、胎土は精選されており、焼成は良好である。2・3は、口縁部が外反し、端部が丸くなる同じタイプの甕形土器である。2点とも、器面調整は横方向の撫でを基本としている。2の復元口径は18.6cmで、色調は淡褐色を呈し、胎土には石英・斜長石を含む。3は、復元口径は19.6cmで、色調は樫褐色を呈し、胎土には石英・斜長石・角閃石を含む。2点とも焼成は良好である。

4は、球状に膨らむ胴部の先端が外反し、復元口径11.2cmの口縁部を形成する甕形土器である。器面調整は、口縁部周辺から内部は横撫で、外面も撫で調整であるが、頸部は、外反させるための指圧痕が残る。色調は明赤褐色で、胎土に石英・斜長石を含み、焼成は良好である。5は、復元口径33.9cmの甕形土器であるが、胴部の張りは小さい。器面調整は、4と同様、口縁部周辺から内部は横撫で、外面も撫で調整であるが、頸部は、外反させるための指圧痕が残る。色調は淡褐色で、胎土に石英・斜長石を含み、焼成は良好である。

6は、復元口径33.8cmで、口縁部が内面に稜を生じて屈曲外反する。器面調整は、口縁部周辺は横撫で、他の内外面も撫で調整である。色調は樫褐色で、胎土に石英・斜長石・雲母を含み、焼成は良好である。7は、復元口径30.2cmで、口縁部が内面に稜を生じて直線的に屈曲外傾する。器面調整は、口縁部周辺は横撫で、胴部の内外面も撫であるが、外面には指圧痕が残る。また外面の底部近くは刷毛目調整である。色調は樫褐色で、胎土に石英・斜長石・金色の雲母を含み、焼成は良好である。

8・9は同じ形態の甑形土器の把手である。いずれも手捏ねで、指圧痕が明瞭に残る。7の色調は樫褐色で、胎土には石英・角閃石を含む。8の色調は淡褐色で、胎土には角閃石・雲母を含む。いずれも焼成は良好である。

第75図は須恵器の資料である。1～5は坏蓋と考える。1・2・3の器面は、口縁部周辺が回転横撫で、天井部はヘラ切りの痕跡が残る。胎土に砂粒は少ない。1は口径11.8cm、器高3.4cm、色調は淡灰色である。2は、口径10.4cm、器高2.9cmで、色調は青灰色である。3の口径は13.4cm、器高4.1cmで、色調は淡青灰色である。

4は身の可能性も強いが、天井部につまみ部の痕跡があるため蓋として取り扱う。口径は9.1cmで、蓋受け部の径は11.0cm、器高は2.8cmである。器面は、口縁部周辺が回転横撫で、天井部はヘラ切りの痕跡が残る。色調は淡青灰色で、胎土に砂粒は少ない。5は、宝珠形のつまみが付く完形品の蓋である。口径は8.8cm、蓋受け部の径は10.8cmで、器高はつまみ部を含め3.6cmである。器面は、口縁部周辺が回転横撫で、天井部はヘラ切りの痕跡が残る。色調は青灰色で、胎土に砂粒は少ない。

6～12は坏身と考える。器面は、口縁部周辺が回転横撫で、底部はヘラ切りの痕跡が残る。胎土に石英を含む。6は、口径は9.2cmで、蓋受け部の径は11.0cm、器高は2.7cmである。色調は青灰色で、胎土に石英を含む。7は、口径は9.2cmで、蓋受け部の径は11.4cm、器高は3.6cmである。色調は淡青灰色で、胎土に石英を含む。8は、口径は8.2cmで、蓋受け部の径は10.4cm、器高は2.4cmである。色調は淡灰色で、胎土に角閃石・斜長石を含むが、砂粒は少ない。9は、口径は8.8cmで、蓋受け部の径は11.0cm、器高は2.6cmである。色調は淡青灰色で、胎土に石英を含む。10は、口径は8.3cmで、蓋受け部の径は10.8cm、器高は3.0cmである。色調は淡灰色で、胎土に石英・角閃石・斜長石を含む。11は、底部のヘラ切りが水平に行われ、平底状になっている。口径は8.8cmで、蓋受け部の径は11.0cm、器高は2.6cmである。色調は淡灰色で、胎土に石英・角閃石・斜長石を含む。12は、蓋受け部のない坏身と考える。口径は14.6cmで、色調は緑灰色、胎土に白色粒を含む。

13・14は、大甕の口縁部と考える。13の口径は19.0cmで、器面調整は回転横撫でである。色調は黄灰色で、胎土に角閃石を含む。14の口径は18.6cmで、器面調整は外面が回転横撫でであるが、内面には強い指撫で痕が残る。色調は暗灰色で、胎土に石英・斜長石を含む

15は、小壺の胴部と考える。胴部最大径は15.0cmで、その上位に平行沈線が1条巡る。器面は回転横撫でで、色調は暗褐色、胎土に砂粒は少なく、焼成は不良である。16は、器種不明であるが、底径12.8cmの須恵器の底部である。器面は回転横撫でで、色調は灰黄褐色、胎土に角閃石・斜長石を含む。焼成は良くない。

第76図の1・5も須恵器である。1は平瓶の口縁部と考える。器面は内外面撫でで、色調は青灰色、胎土に角閃石を含む。2は、高坏である。脚部と坏部の接合部は横撫でで、その上位は回転篦削りである。色調は淡灰色で、胎土に斜長石を含む。3は、高坏の脚と考える。外面には凹線が1条巡る。器面調整は、内外面とも回転横撫である。色調は青灰色、胎土に石英・角閃石・斜長石を含む。4は、口径9.8cm、脚部径8.5cm、器高7.6cmの高坏である。器面は全面横撫でで、坏部外面に3ヶ所、篦記号がある。色調は暗灰色で、胎土に石英・角閃石・斜長石を含む。5は、高坏の脚と考える。脚端部は径8.2cmで、細くなっている。器面は、内面は回転横撫で、外面は掻き目がある。色調は灰黄色、胎土に石英が多く、角閃石も含む。

6・8は、甕形土器の口縁部である。6の口縁部周辺は横撫でであるが、胴部外面は刷毛目である。色調は橙褐色で、胎土に石英・斜長石を含む。8は、口縁部が外反し、胴部は張らない。全面横撫でで、色調は淡橙褐色で、胎土に石英・斜長石を含む。7は、小壺の口縁部と考える。口縁端部はわずかに肥厚する。器面調整は回転横撫でで、胎土に斜長石を含む。

9は、口径22.0cmの甕形土器である。胴部は張らず、口縁部は内面に稜を生じ屈曲する。器面調整は、口縁部周辺と内面は撫でであるが、胴部外面は縦方向の刷毛目である。色調は、赤褐色で、胎土に石英・角閃石・斜長石・金雲母を含む。

4．中　世（第76・77図）

10～14・16・17は、瓦器椀である。底部は糸切りで、内面は入念に篦磨きされている。

10は、口縁部周辺は横撫でであるが、それ以外は横方向の篦磨きである。法量は口径16.0cm、高台径4.2cm、器高5.6cmで、色調は灰褐色、胎土に石英・斜長石を含む。11は、口縁部を欠くが、高台径6.5cmの瓦器椀で、器面調整は、全面篦磨きである。色調は灰白色、胎土に斜長石を含む。12は、口縁部の内外面に1条づつ沈線が巡る。器面調整は前面篦磨きである。口径13.8cm、の瓦器椀で、色調は灰白色、胎土に角閃石・斜長石を含む。13は、口径15.6cm、高台径5.0cm、器高5.3cmの瓦器椀で、器面調整は、全面横撫でで、底部近くは指圧痕がある。色調は暗褐色、胎土に石英・角閃石・斜長石を含む。14は、口縁部を欠くが、高台径6.6cmの瓦器椀で、器面調整は、全面横撫でである。色調は灰白色、胎土に斜長石を含む。

15は、外面に沈線が1条巡る須恵器である。器面調整は回転横撫でで、色調は淡灰色、砂粒は少ない。

16は、口縁部を欠くが、高台径4.8cmの瓦器椀で、器面調整は、全面横撫でで、底部近くは指圧痕がある。色調は薄灰色、胎土に石英・角閃石・斜長石を含む。17は、口縁部を欠くが、高台径6.6cmの瓦器椀で、器面調整は、全面横撫でで、底部近くは刷毛目がある。色調は灰白色、胎土に斜長石を含む。18は、口径28.4cmの瓦質の土鍋である。口縁部は外側に厚く肥厚し、器面調整は口縁部周辺が撫でであるが、内面は刷毛目、外面は斜め方向の撫でである。色調は灰褐色で、胎土に角閃石を含む。

第77図は輪入陶磁器を中心に図示した。1～11は、形態はほぼ同じの、口縁部が玉縁状になる

白磁の景德鎮系の碗である。図上で完形に復元できた10を観察すると、内面と外面の下位までは施釉されているが、底部付近は露胎である。露胎部を見ると、外面は箆の削り状調整で、胎土は白灰色である。

1の口径は14.0cmで、2は口径16.0cmを測る。3は、口径15.5cm、4は口径18.0cmである。5は口径15.4cm、6は口径16.6cmで、7・8は口径15.6cmで、4点とも外面に釉垂れがあり、外面下位は露胎となっている。9は口径15.5cmで、見込み近くに小さな段があり、外面も胴部中位から底部にかけて露胎となっている。10は、口径15.5cm、底径5.8cm、器高6.8cmで、見込み部に沈線が1条巡る。11は白磁で、内面に1条沈線があることから、1～10の底部と考える。底径6.6cmで、外面は露胎となっている。

12は、口径14.8cm、底径5.5cm、器高5.6cmの瓦質土器の碗である。ほぼ全面横撫でであるが、外面の底部近くは削り痕がある。色調は灰褐色で、胎土に斜長石を含む。

13は、同安窯系の磁器である。14は口縁端部が外反する白磁の碗である。15は、口径14.5cmの青磁の碗である。口縁部外面には沈線状の窪みが2条めぐる。全面施釉されている。16は染付けが見られる。一面は露胎である。17は、口径8.1cm、底径3.6cm、器高1.8cmの同安窯系の小皿である。見込み部に文様があり、底面は露胎である。

18は、香炉の可能性のある陶器である。肩部径は10.4cmで、外面に数条の平行沈線が施文され施釉されている。内面と底部近くは露胎である。

19・20は、須恵器の壺である。19は、口径9.8cmの口縁部で、器面調整は回転横撫で、色調は赤灰色、胎土に砂粒は少ない。20は、底部近くの胴部の資料である。内外面とも回転横撫でで、外面にはさらに叩き痕があり、厚く自然釉がかぶっている。色調は薄灰色で、胎土に砂粒は少ない。

5．近　世（第78図）

第76図は野村台遺跡田井ヶ迫地区の横穴墓を検出する際、急斜面の段々畑の石垣の裏込めから出土したものである。

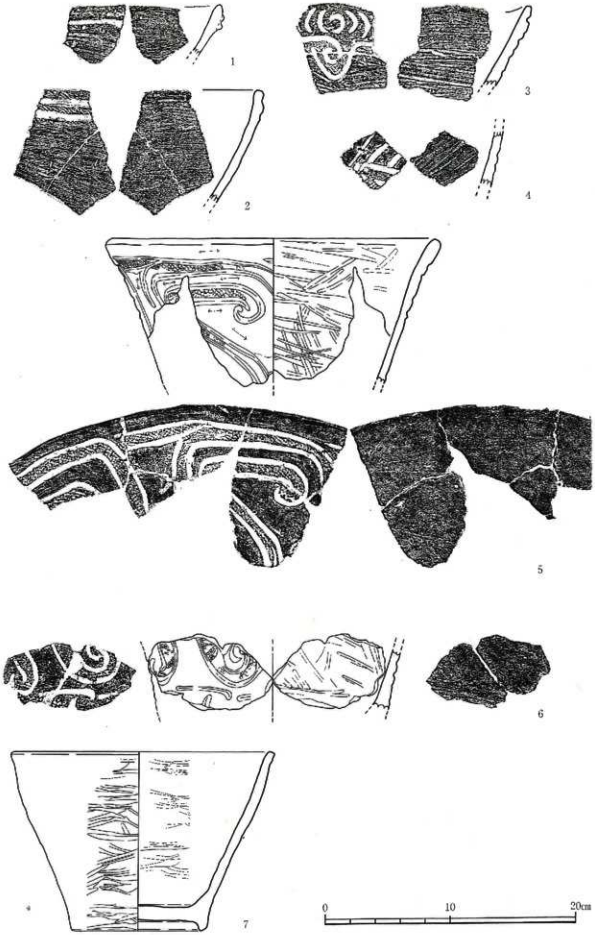
1は、底径5.2cmの龍泉窯系青磁碗の底部である。高台から内側が露胎であるが、それ以外は施釉されている。2は、高台の内側に「角福」の染付けのある景德鎮窯系の碗である。3・4は、内面にハマ痕のある唐津系碗の底部である。高台周辺は露胎となっているが、それ以外は施釉されている。2点とも底径は、4.8cmである。5は、高台との接合部に染付けの3条の平行線が描かれ、施釉されている。6は、外面に芭蕉葉文の染付けの磁器である。7は、外面に磨文、内面の口縁部と見込み部に平行線の染付けが見られる。口径は10.2cmで肥前系の磁器である。

8は、口径10.7cmで、外面に多数の平行線・蕾文？が、内面は口縁部と見込み部に平行線の染付けが施文されている。9は、口径9.5cm、高台径3.8cm、器高5.0cmの碗である。外面には梅樹雪輪の染付けがあり、全面施釉されるが、畳み付き部は露胎となっている。10は、外面に「紅？」の染付けがある。11は、瓶の頸部である。内面は露胎であるが、外面は染付けが見られる。18世紀後半の備前系の陶磁器である。12は、口径11.6cm、高台径4.2cm、器高5.7cmの碗である。外面には円形を沈線で埋めるような文様、内面は平行線と見込み部には五弁花の染付けがある。全面施釉されるが、畳み付き部は露胎となっている。13は、口径10.9cm、器高1.9cm、底径6cmの染付皿である。

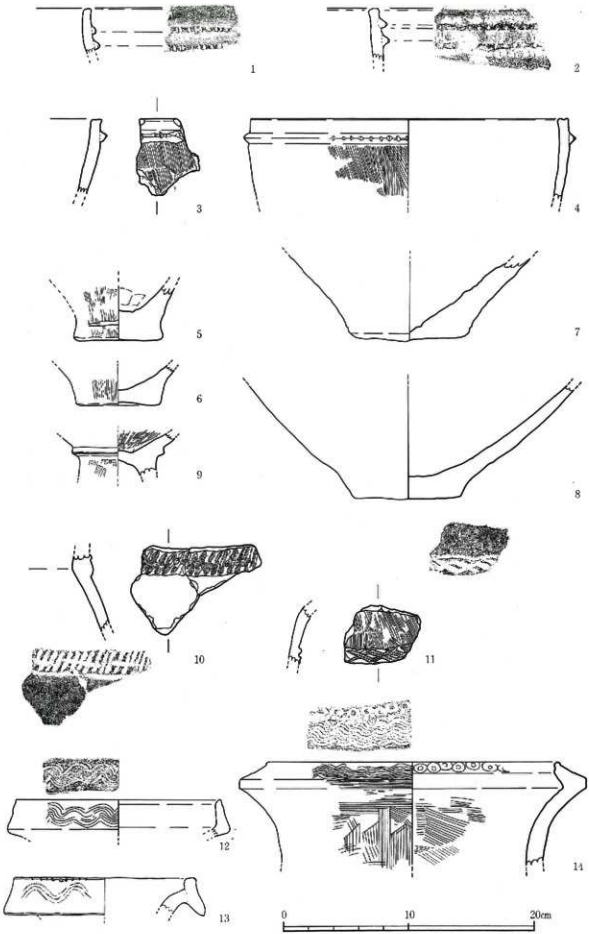
6．石器・石製品・土製品（第79～81図）

第79図1は、長さ2.3cm、幅2.7cm、重さ20.8gの球形の十錘である。橙褐色をしている。2は、長さ5.1cm、幅4.9cm、厚さ4.5cm、重さ124.8gの石製品である。

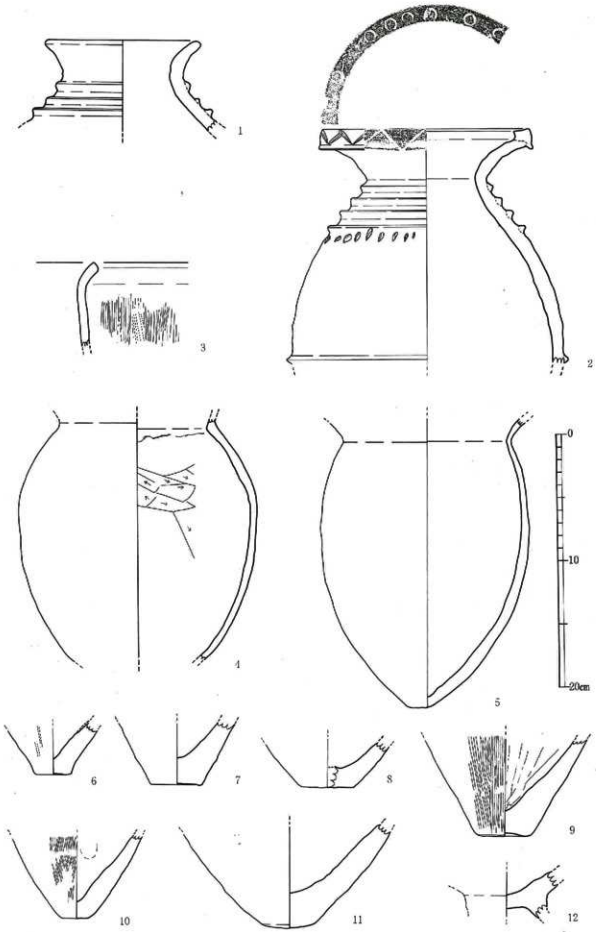
3は、支柱と考える。長さ20.5cm、底径9.0cm、厚さ約6.5cmで、器面調整は撫でで、指圧痕が残



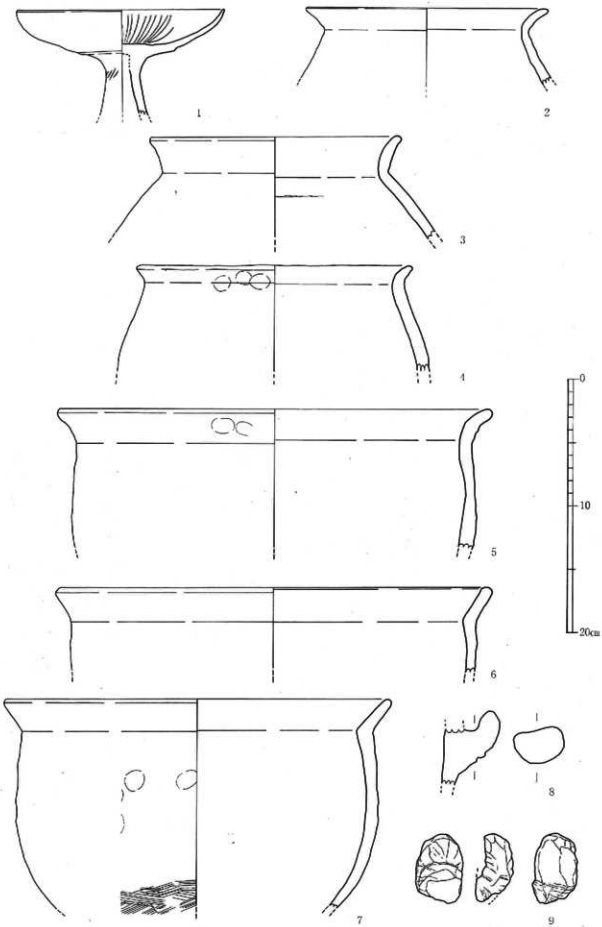
第 71 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（1）



第 72 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（2）



第 73 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（3）

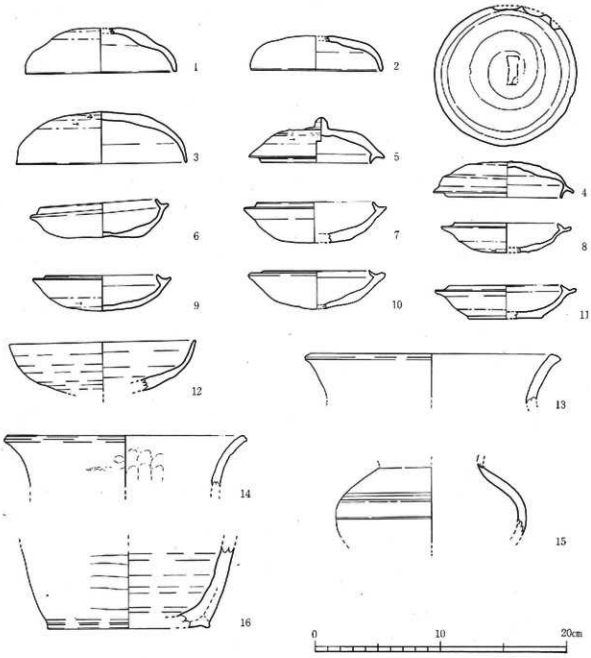


第 74 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（4）

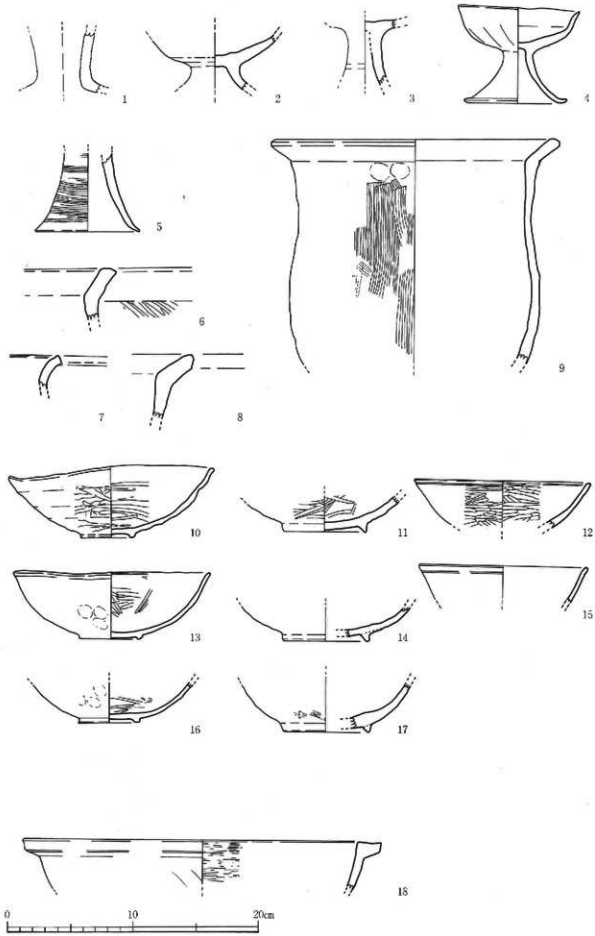
る。色調は赤褐色で、胎土に斜長石を含む。

4・5は、砥石である。遺存している大きさは、4が、長さ7.6cm、幅5.8cm、厚さ1.0cm、重さ97.4gで、石質は粘板岩である。5は、長さ10.0cm、幅4.7cm、厚さ5.0cm、重さ463.9gで、石質は密な砂岩で、四面が使用されている。

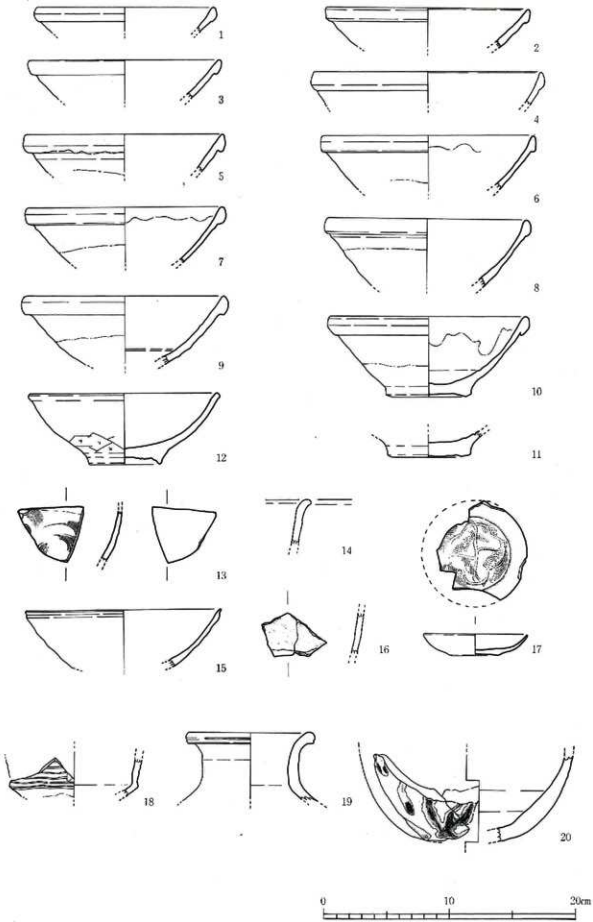
第80図は石臼である。1は下臼、2は上臼である。遺存している大きさは、1は、径13.2cm、厚さ5.2cmで、下位の周辺に鍔が巡る。2は、上面が大きく窪み、径16.4cm、厚さ10.0cm、重さ1.4kgである。第81図は、上臼で、直径36cm、厚さ10cmを測り、側縁には、上臼を回転させるための把手の取り付け穴が穿孔されている。



第75図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（5）



第 76 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（6）

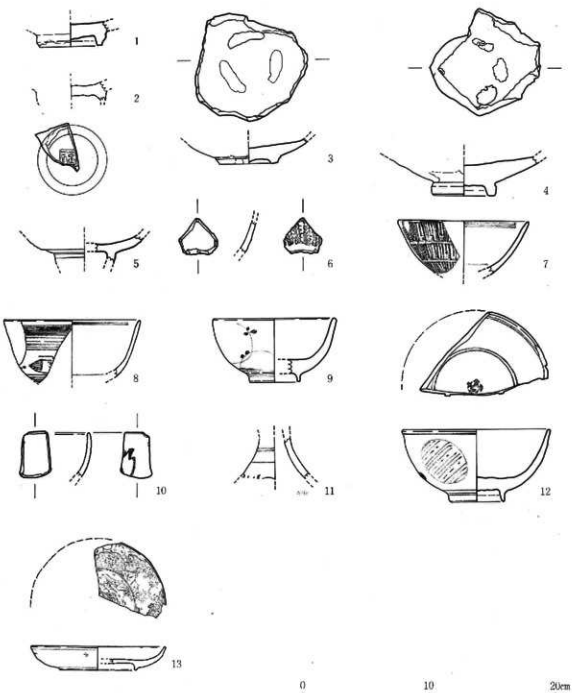


第77図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（7）

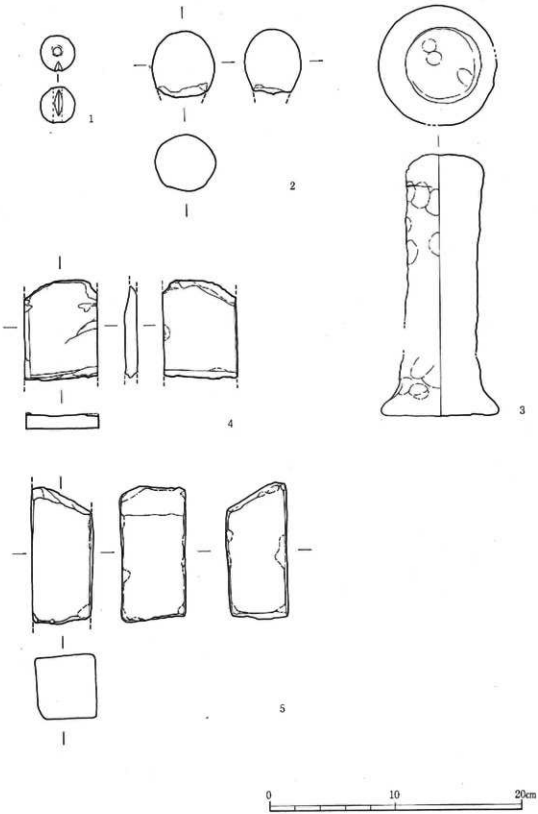
7．土　錘（第82図）

1は、長さ6.6cm、幅5.0cm、重さ209.5gで、色調は橙褐色を呈する。2は、長さ4.8cm、幅2.3cm、重さ18.9gで、色調は淡黄褐色を呈する。3は、長さ5.6cm、幅1.5cm、重さ10.3gで、色調は黄褐色を呈する。4は、長さ4.5cm、幅1.5cm、重さ7.0gで、色調は黄褐色を呈する。5は、長さ5.0cm、幅1.2cm、重さ5.4gで、色調は淡黄褐色を呈する。

6は、長さ3.6cm、幅1.2cm、重さ4.4gで、色調は淡褐色を呈する。7は、長さ4.6cm、幅1.3cm、重さ7.5gで、色調は暗灰色を呈する。8は、長さ4.2cm、幅1.3cm、重さ6.0gで、色調は黄褐色



第78図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（8）



第79図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土遺物実測図（9）

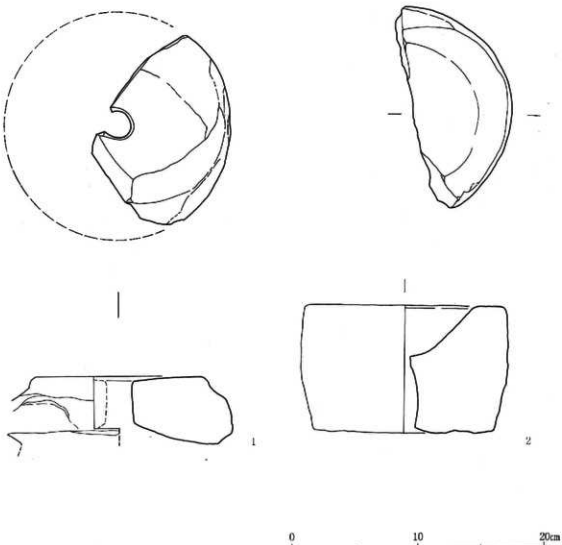
を呈する。9は、長さ3.9cm、幅1.2cm、重さ6.2gで、色調は黄褐色を呈する。10は、長さ3.4cm、幅1.2cm、重さ4.5gで、色調は黄褐色を呈する。

11・12は半分しか遺存しないが、1～10の上錘の形態とは異なり、両端に穿孔があるタイプである。11は、長さ3.3cm、幅1.0cm、重さ3.5gで、色調は黄褐色を呈する。12は、長さ2.5cm、幅1.2cm、重さ4.1gで、色調は黄褐色を呈する。

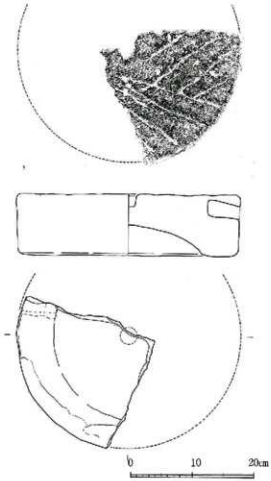
13は、長さ2.0cm、幅0.9cm、重さ1.1gで、色調は黄褐色を呈する

8．煙　管（第83図），

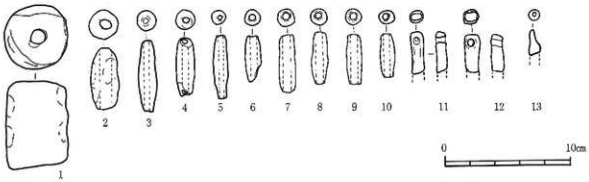
第81図は、金銅製の煙管である。1は、雁首の長さ6.8cm、火皿の径1.5cmで、羅宇との小口は1.0cmである。2は、雁首の長さ7.0cm、火皿の径1.5cmで、羅宇との小口は1.0cmである。



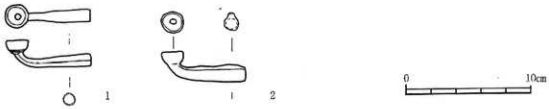
第80図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土石臼実測図（1）



第 81 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土石臼実測図（2）



第 82 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土土錘実測図



第 83 図　野村台遺跡田井ヶ迫地区出土煙管実測図

第4章　ま　と　め

第1節　野村台遺跡とその周辺の変遷

1．野村台遺跡の調査

野村台遺跡では、これまでに臼杵市教育委員会が平成4年から5次にわたり調査しており、本報告は6次調査にあたる。その結果、縄文時代から近世に至る遺構や遺物が検出されている。

平成4年度

台地の東北部縁辺を農道建設に伴い調査を実施。その結果、逆台形の溝が2条検出された。その規模は、幅4m、深さ1.5mで、台地を分析するように南北方向に続いている。時期は、13世紀～14世紀前半で、多量の遺物が出土している。

平成5年度

平成5年度の調査は平成4年度調査した農道の西側延長部を実施している。

平成6年度

平成6年度は2ヶ所調査を実施している。1ヶ所は、平成11年度調査のⅡ区とⅢ区の間の農道部の調査であり、弥生時代後期後半の環濠の一部を検出している。もう1ヶ所は、台地南西部の平坦地で、農道建設に伴う調査である。この調査では11世紀後半から12世紀前半の遺物が出土する溝が検出されている。

平成8年度

平成8年度は、台地の中央北部で、宅地開発に伴い調査をした。この地区からは、14世紀後半～16世紀の墓地が検出された。

平成11年度

本書のとおり、台地西端の飛車丸地区と南西斜面の山井ヶ迫横穴墓群を調査した。飛車丸地区では、縄文時代早期の包含層、弥生時代の中期初頭の貯蔵穴、後期後半の環、溝、古墳時代前期の住居跡、15世紀～18世紀の各種竪穴遺構が検出された。

以上の調査成果から野村台遺跡の各時代の変遷を周辺の遺跡を含め、追ってみる。

2．弥生時代～古墳時代前期

野村台の台地での最初の安定した定住生活は弥生時代中期初頭に始まる。飛車丸地区で検出された円形の貯蔵穴はその証しで、大分平野や宇佐平野で明らかにされている遺構と同じである。この時期は、大陸から伝播した稲作が日本列島で本格的に開始しており、野村台遺跡周辺でも当然、稲作栽培が行われていたと考えられる。その候補地としては、水田遺構が検出されている福岡県板付遺跡や佐賀県名畑遺跡の例などから、台地周辺の山井ヶ迫川や台地南側の谷間の低湿地部が想定される。

その後、定住化は進行したと考えられ、弥生時代後期後半に環濠遺構が構築される。規模は、約1300㎡の面積で、著名な佐賀県吉野ヶ里遺跡や大分県内で想定されている下郡遺跡などに比較すると小さい。類似する遺跡は福岡県苅田町葛川遺跡がある。その規模は地形に沿って卵形をしており、57m×43mを計り、約1800㎡である。立地も低地を見下ろす台地の先端に築かれている。

飛車丸地区の環濠遺構も、リアス式海岸の臼杵湾に流れ込む臼杵川とその周辺の沖積地を見下ろす台地上に築かれている。この地域は今日でも臼杵市と内陸部を結ぶ国道502号線が通っており、交通の要衝となっている。弥生時代後期においても、臼杵川沿いは内陸部の大野川流域とを結ぶ重要なルートであったことは地形的な状況から見ても理解できる。この環濠遺構もこうした地理的状

況とかかわり、重要な地域であったものと考える。

弥生時代後期の状況は古墳時代前期でも同様と考えられ、台地の西端にもかかわらず、飛車丸地区で住居跡や竪穴遺構が検出されている。

3．古墳時代後期～古代

古墳時代後期から古代にかけては、野村台遺跡でまとまった遺構や遺物は確認されていない。それに代わり、西隣の台地に立地する清太郎遺跡で、この時期の住居跡や掘立柱遺構が検出されている。

清太郎遺跡は、田井ヶ迫横穴墓群の西側にある台地上に立地し、カマドを持つ6世紀後半から7世紀前半の住居跡が約10基調査されている。分布状況からみると、南側にある下南小学校の校庭が集落の中心で、調査した部分は、その北端部と言える。

この台地周辺には、小河川沿いの谷底平野が取り巻いており、そこで水田開発を行い、生活の基盤となったものと想定できる。そうすれば、西側に隣接する台地上に「ムラ」を形成し、周辺の谷底平野を生産の場とし、墓地は「ムラ」の対岸の台地の阿蘇溶結凝灰岩の斜面を削りぬき造営するという、村落景観が成立していたものと考えられる。

この田井ヶ迫横穴墓群は、県内で一般的に見られるような、集落を構成する複数の家系が継続的に墓地を形成し、群集化する状況と異なり、周辺の横穴墓の分布から見ても、4～5基の構成である。その時期も、発掘調査で明らかになったように、6世紀中頃から7世紀代のものである。その被葬者は、田井ヶ迫地区周辺を生活の基盤とする清太郎遺跡を集落とする有力層の家族墓と想定される。

ところで、田井ヶ迫横穴墓群の3号墓の調査で、外面に短冊形の陽刻を持つ阿蘇溶結凝灰岩製の閉塞石が出土した。このような陽刻のある形態の閉塞石は、現在まで大分県内では、大分市木ノ上峠横穴墓群で2例、岡下横穴墓で1例がある。また、県外では、福岡県久留米市浦山古墳・熊本県宇土郡不知火町岡越古墳・熊本球磨郡多良木町赤坂古墳でも出土している。さらに、出雲地方の穴道町ドノ空古墳・同町鏡北廻古墳、斐川町出西小丸古墳、松江市北小原古墳などで報告されている。

こうした閉塞石については、すでに角田徳幸が石棺式石室との関係で論じている。それによると、奈良県天理市和爾森本遺跡や三重県大津市六大A遺跡から出土している同じ形態の陽刻を施した観音開きの木製扉板を、石材に転化したとし、九州の例は、観音開きの扉1枚を石で表現したものと論じている。

そして、出現時期については、九州地方が5世紀後半から6世紀前半と考え、6世紀後半から7世紀前半の出雲地方のものは後出のものと考えている。しかし、門付きの木製扉を忠実に模倣した形態は出雲地方のもので、「井」状の陽刻が刻まれている。それに較べると九州の短冊形は、模倣した原の形態・構造が異なる可能性もある。

また、これらの閉塞石が用いられている埋葬施設は横穴式石室や石棺式石室と呼ばれる構造の入口の例が大部分である。こうした埋葬施設が希薄な豊後地域では、4例全てが横穴墓に用いられている。

さらに、陽刻のある閉塞石の九州での分布を見ると、肥後・筑後・豊後この分布は、石人・石馬の分布圏と一致する。大分県内でも臼杵市下山古墳・臼塚古墳にだけ石製甲冑が飾られている。この分布圏は、これまで「磐井の乱」と関連付けられ論じられてきた。陽刻のある閉塞石の時期は、「磐井の乱」の後にあたるが、「筑紫」・「火」・「豊」を結びつける、共通項の一つとして捉えることができる。

野村台遺跡からは古代のまとまった資料は出土していない。しかし、古墳時代後期同様西隣りの

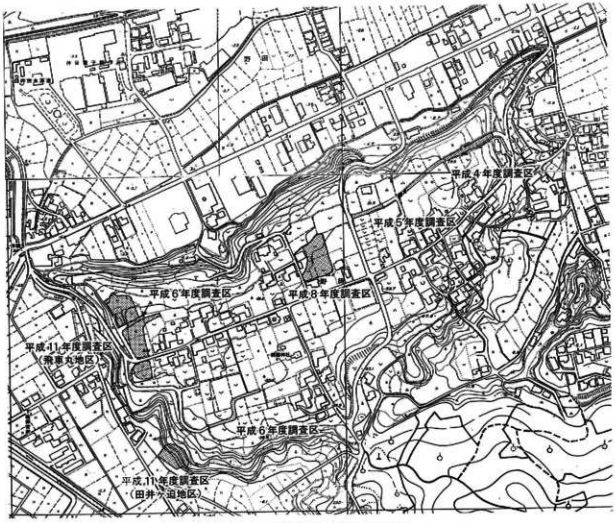
清太郎遺跡からは、掘建て柱遺構が4棟調査されている。遺物も8世紀から9世紀の須恵器や土師器が出土しており、緑釉陶器も見られる。この他、9世紀後半から10世紀前半の越州窯青磁碗や内黒土器も出土している。

4．中世～近世

野村台の台地上の中世から近世にかけては、平成4年度からの全ての調査区で検出されている。台地南西部の平成6年度の調査で11世紀後半から12世紀前半の遺物が出土する溝が検出されている。この時期は、「臼杵荘」が九条家の所領となることや、臼杵石仏の造営時期にあたる。また、平成5年度に調査している東北部縁辺の溝は、13世紀～14世紀前半に埋められている。この時期は、「臼杵荘」が九条家から豊後の守護大名である大友氏の支配化に組み込まれる時期にあたる。

さらに、平成8年度に調査した台地中央北側では、14世紀後半～16世紀の墓地が検出されており、平成11年度に調査した、台地西縁では、15世紀～16世紀後半の遺構や遺物が出土している。この時期は、大友氏の降盛期から、薩摩国の島津氏の進行を受け、最後は、豊臣秀吉による大友氏の豊後国除国までにあたる。

特に、16世紀後半は、大友宗麟が臼杵市に移住し、ルイス・フロイスの「日本史」によれば、臼杵は「王府」と記載され、豊後の政治の中心地になっていた可能性がある。そして、「日本史」によ



第84図　野村台遺跡各調査区位置図

ると1578年の大友氏の日向国の進行の際に、大友義統は臼杵から出発し野津を通過している。そうすると、最短ルートである臼杵川沿いが有力であり、野村台遺跡の北側を通ったものと考えられる。

以上のように、野村台遺跡の11世紀から14世紀にかけて検出された遺構や出土した遺物は、「臼杵荘」をめぐる支配関係の変化ともかかわるものと考えられる。また、15世紀から16世紀にかけての遺構や遺物は、大友氏の臼杵移住とも関連する可能性がある。臼杵市教育委員会が調査した部分の資料が明らかになった時点で、さらに検討を加える必要がある。

参考文献

角田徳幸「石棺式石室の系譜」島根考古学会誌　第10集　島根考古学会誌　1993年

神田高士「臼杵荘と磨崖仏-遺跡からみる臼杵の中世-」『都市と宗教』中世都市研究4　中世都市研究会編　1997年

写　真　図　版

野村台遺跡飛車丸地区全景

図版2

野村台遺跡　環溝

野村台遺跡　住居跡

野村台遺跡　石組遺構

田井ヶ迫地区全景

田井ヶ迫地区１号横穴

田井ヶ迫地区２号横穴

図版4

3号横穴

3号横穴
閉塞状況復元

3号横穴
閉塞状況復元

環溝遺物出土状況

環溝遺物出土状況

環溝

図版6

住居跡

竪穴遺構

竪穴遺構

中世1号土壙
遺物出土状況

中世2号土壙
遺物出土状況

中世2号土壙
遺物出土状況

図版8

野村台Ⅱ区
2号大型土壙

野村台Ⅱ区
近世土壙群

野村台Ⅱ区
近世土壙群

野村台近世土壙

野村台近世土壙

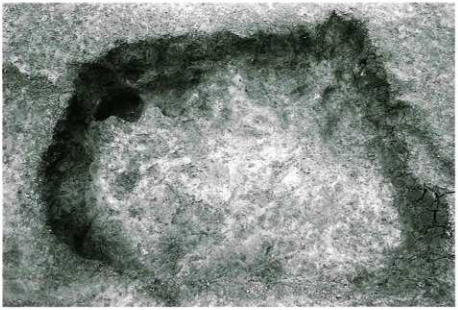
野村台近世土壙

図版10

野村台近世土壙

野村台近世土壙

野村台近世土壙

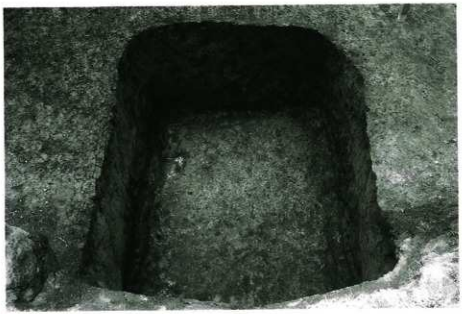


野村台Ⅱ区
1号大型土壙

野村台Ⅱ区拡張区
1号土壙

野村台Ⅲ区集石遺構

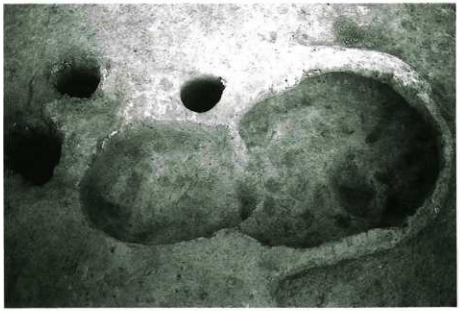
図版12



野村台Ⅱ区４号土壙

野村台Ⅱ区４号土壙

野村台Ⅱ区３号土壙

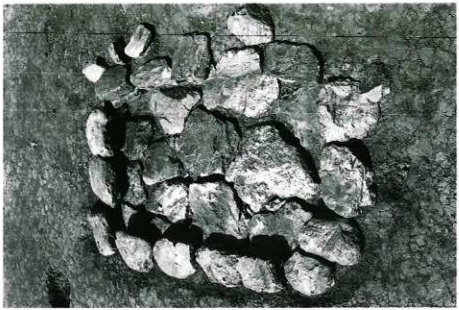


野村台袋状遺構

野村台Ⅱ区１号土壙

野村台拡張区
３号土壙

図版14



野村台石組遺構

野村台発掘風景

野村台発掘風景

野村台遺跡出土　石鏃

図版16

田井ヶ迫地区発掘前

田井ヶ迫地区発掘前

田井ヶ迫地区
石垣除去作業

田井ヶ迫１号横穴①

田井ヶ迫１号横穴②

田井ヶ迫１号横穴③

田井ヶ迫２号横穴

田井ヶ迫３号横穴①

田井ヶ迫３号横穴②

田井ヶ迫３号横穴①

田井ヶ迫３号横穴②

田井ヶ迫３号横穴③

田井ヶ迫３号横穴④

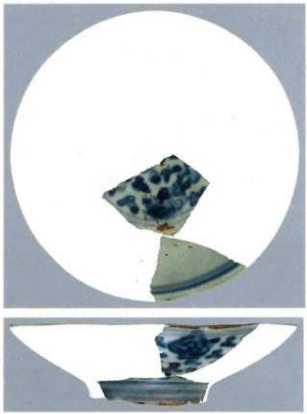
田井ヶ迫３号横穴⑤

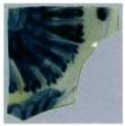
田井ヶ迫３号横穴⑥

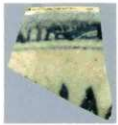
田井ヶ迫
遺物出土状況

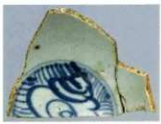
田井ヶ迫
遺物出土状況

田井ヶ迫
遺物出土状況









野村台２区２号大型土壙出土陶磁器

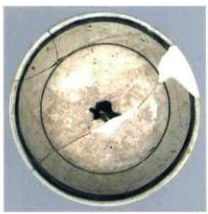
野村台２区１号大型土壙出土陶磁器・擂鉢

1号土壙出土　瓦質火鉢

7号土壙出土　土人形

8号土壙出土　土人形

8号土壙出土　平瓦



11号土壙出土陶磁器

12号土壙出土　軒平瓦

12号土壙出土　擂鉢

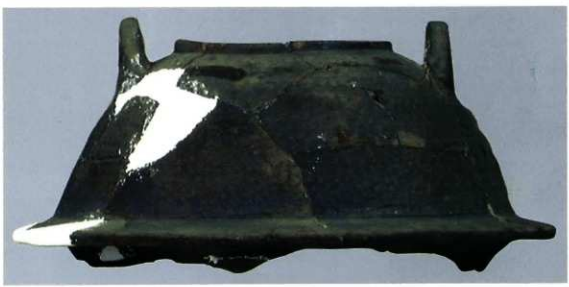
19号土壙出土　擂鉢

22号土壙出土　擂鉢

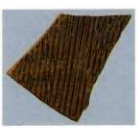
22号土壙出土　陶磁器

Ⅲ区１号土壙出土　陶磁器

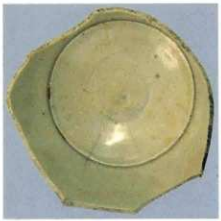
Ⅲ区１号土壙出土　陶磁器２



Ⅲ区１号土壙出土　羽釜

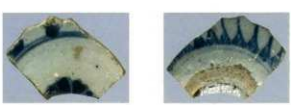


Ⅲ区１号土壙出土　擂鉢



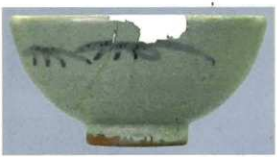
拡張区１号土壙出土　白磁碗

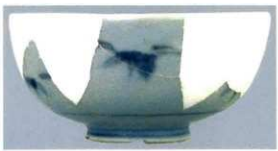
３区集石土壙出土　擦鉢

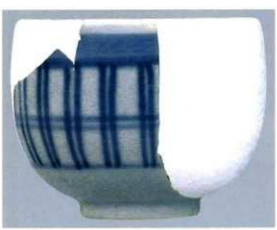


３区集石土壙出土　陶磁器

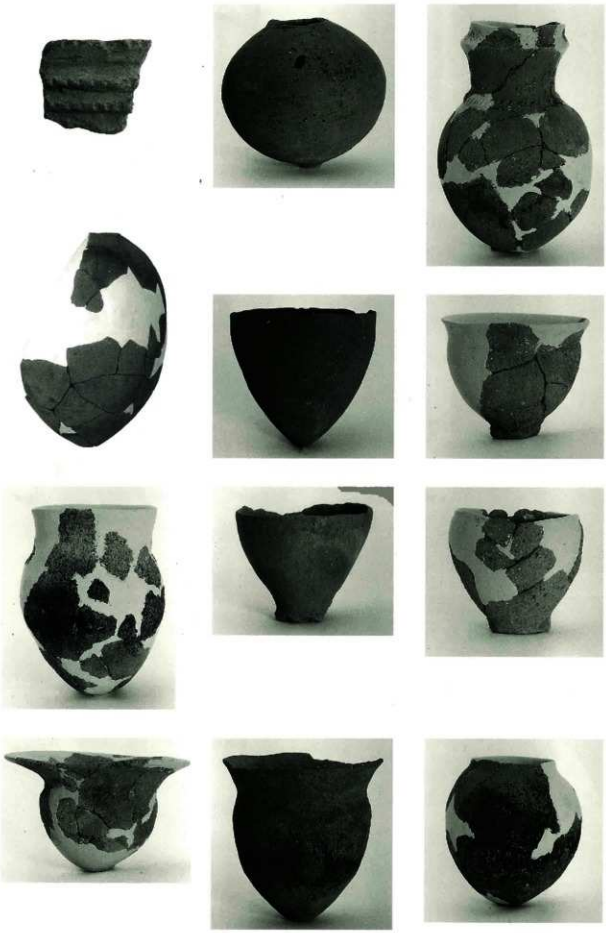
野村台飛車丸地区出土　中世陶磁器



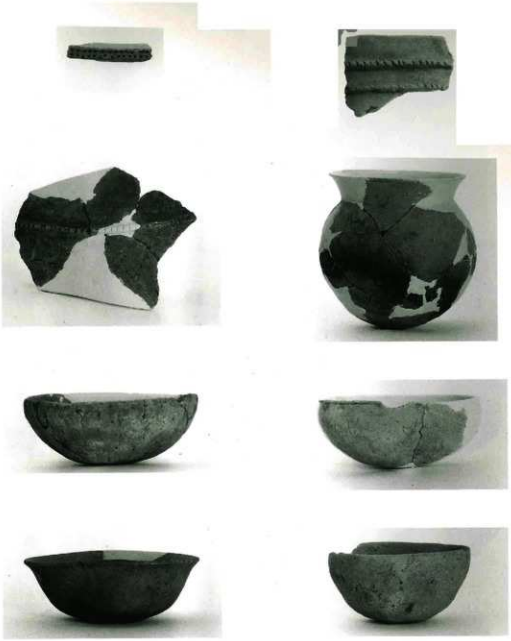




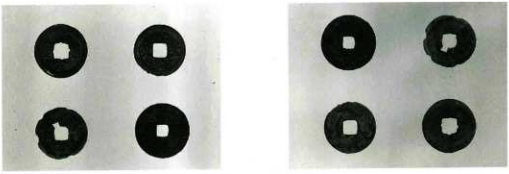
野村台飛車丸地区出土　近世陶磁器



野村台環溝遺構出土遺物



野村台住居跡出土遺物



野村台出土銅銭

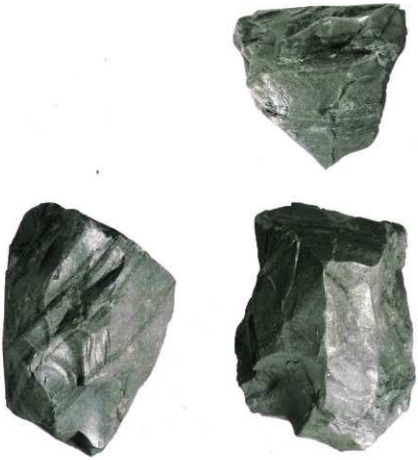
図版32

野村台Ⅱ区２号大型土壙出土遺物

野村台貯蔵穴出土遺物

野村台竪穴遺構出土遺物

野村台Ⅱ区１号土壙出土遺物



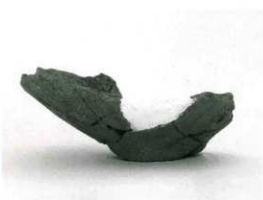
野村台環溝遺構出土黒曜石石核

野村台出土石臼

田井ヶ迫出土石臼

田井ヶ迫１号横穴出土遺物

田井ヶ迫出土縄文土器



田井ヶ迫出土弥生土器１

田井ヶ迫出土弥生土器2

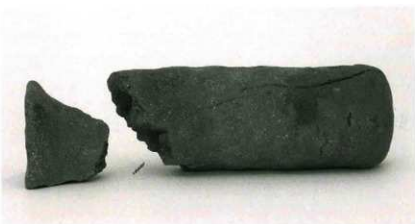
田井ヶ迫出土弥生土器３

田井ヶ迫出土弥生土器4

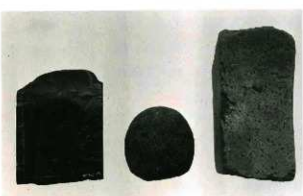
田井ヶ迫出土土師質土器

田井ヶ迫出土瓦質土器

田井ヶ迫出土須恵器



田井ヶ迫出土土製品



田井ヶ迫出土石製品

田井ヶ迫出土煙管

報告書抄録

フリガナ	ノムラダイイセキ
書名	野村台遺跡
副書名	一般国道502号（B区間）道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	大分県文化財調査報告書
シリーズ番号	第156輯
編集者	槙島隆二　坂本嘉弘
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870－0021　大分県大分市府内町3－10－1
発行年月日	2003年3月31日

所収遺跡名（フリガナ）	所在地（ショザイチ）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
野村台遺跡（ノムラダイイセキ）	大分県臼杵市（ウスキシ） 大字野田（オオアザノダ） 字飛車丸・田井ヶ迫（アザヒシャマル・タイガサコ）	442062	054	33°6′16″	131°46′50″	19990419 ｜ 20000330	2000㎡	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野村台遺跡	集落跡 墓地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 中・近世	環溝・貯蔵穴 住居跡・横穴墓	縄文土器 弥生土器 須恵器 輸入陶磁器	横穴墓閉塞石（陽刻）

野 村 台 遺 跡

一般国道 502 号(B 区間)道路改良工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

平成 15 年 3 月 31 日

発行　大分県教育委員会
〒870 - 0021
大分県大分市府内町 3 - 10 - 1
TEL 097 (536) 1111
印刷　明治印刷株式会社